

---

# 忘れられた解

鈴埜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

忘れられた解

### 【Nコード】

N5291U

### 【作者名】

鈴埜

### 【あらすじ】

宮廷魔法使いを目指すイルマは、レグヌス王国の中央西にある砂漠地帯に調査へ向かうこととなった。魔法学校時代の同級生であるアーヴィンを巻き込み、兄のサミュエル、師匠であるホレスとともにその謎に迫るが

## 第一章 新たなる魔原石 1

木の陰から敵を確認する。まるでこちらに気付いていないように、ぴくりともしないが、それに安心してはならない。やつらは音を立てずに忍び寄り、端からひとり、ふたりと削って行くのだ。

イルマはしゃがみ込んで、膝の間に杖を構えた。自分の身長より少し低いくらいのも、堅いドゥールス材で作られたその先には、明るく世界を照らす太陽のようなオレンジ色の石がはまっていた。

杖の木肌に指を滑らせながら、低い声で仲間を問う。

「誰がやられたの？」

同じように身を低くし、片膝を立て杖を構えている青年が頷く。

「ロイとレックスだ」

「あいつら、防御の結界のつくりが甘い」

ヒューゴーが舌打ちをしながら同僚の不甲斐なさを責める。

「二重にって言ったのにな」

「薬草園まで戻って、誰か呼んでこよう」

後ろから怯えを含んだ声で提案されるが、イルマはそれを却下する。

「だめよ。先月手を抜いたのがばれるじゃない。私はいなかったからいいけど、あなたたちは間違いなく、一週間の深夜警備に組み込まれるわよ」

青年たちは顔を見合わせ首をすくめた。夜更かしは好きだが、徹夜の警備はたまらない。

「魔法で一気に片をつけないと、また森の奥に移動して逃げられちゃうわ。何かいい方法ない？」

仲間が二人引っ張られていなければ、魔法で無理矢理に攻め込めるのだがと誰もがため息をつく。普段は魔法を禁止されているが、ここまで育ってしまったものを見せれば誰もが納得するだろう。

それも、あくまで捕らえられている同僚がいなければ。

「人は食べないって言うけれど、あんなバカでかくなつたんじゃそれもどうかしら」

ふわふわと揺れる金色の髪を指先に巻き付けて、イルマは次案を練る。

彼女の無神経な言葉に、青年たちは複雑な表情で顔を見合わせた。彼らは全員レグヌス王国宮廷魔法使いの見習いだった。見習いたちは、数年間教育係と呼ばれるせんせい師匠の下で、己の適性を見定めるために様々な仕事に回される。今日は月に一度の草むしりで、魔法医の専用薬草園にやってきた。普通の雑草はもちろん、今対峙している少々やっかいな雑草も、引っこ抜かねばならない。

フルテク蔦と呼ばれる植物は、地中の養分だけでは飽きたらず、小動物も取り込んで栄養にする生命力溢れるものだ。地面に根を張っているのだが、危険を察知すると移動する。一度その地に現れれば、根こそぎ消してしまうことはなかなか難しい。しかも、花を咲かせる段階で他の、特に薬草として育てている種に対して有害な物質を地中にはらまく。定期的に刈り取るしなくなる。

先月の草むしりの日は、何事も全力で真面目にやるイルマがおらず、彼らは手を抜いたのだろう。フルテク蔦の除草作業は確かに面倒だ。しかも、一ヶ月でここまで生長するとは思ってもみなかった。イルマだつてびっくりだ。

うーむ、と唸りながら、ふと上を向く。

考えるよりも先に体が動いた。

「走れっ！」

イルマが叫ぶのと、蔦が木の上から伸びてくるのがほぼ同時だ。

「うああああ！！」

蔦に足を取られ、ヒューゴーの体が宙に浮く。植物とは思えないほどの的確で、素早い動きに驚きよりも恐怖を覚える。

だが、そんなことを思えばかりではいられない。イルマはすぐに彼を助けるための方程式を組み立て、解く。

「解！」  
「ファイニッシュ」

発動の呪文を唱えると、彼を縛り上げていた鳶が鋭い刃物で切られたようにばらばらと落ちた。もちろん体も落ちるが、彼の周りにあつた防御の結界が落下の衝撃を軽減する。

「解フィニッシュ！」

別の青年が魔法を使う。ヒューゴーを、みんなの傍まで引つ張つた。少々乱暴ではあつたが、彼は友人に礼を言う。

「助かった。……前言撤回。あの鳶、少々の防御結界じゃ突破してくるようだぞ」

「なんだか日に日に手強くなって行く気がするわ」

「やっぱり人を呼んでこよう。二位トウオあたりならどうにかしてくれるだろう？　さらわれた二人の安否も気になるし」

こうなつては夜警が嫌だと言っている場合ではないと、誰もがその意見に同意を示したとき、イルマが声を上げた。

「見て、あれ」

ついさつき彼らがいた木を指さす。

そこにはまだ暗い緑色をしたフルテク鳶が、ずるずると木肌を這っていた。まるで蛇のように見えることから、蛇鳶とも呼ばれていた。小動物を食らうところも、ぴったりだ。

「あれ、アーラドリじゃない？」

梢の間から、銀色に緑の差し色があるきれいな翼がちらりと見えた。

「ほんとだ……フルテク鳶が狙ってる」

アーラドリはその羽が薬として使われる、とても希少価値の高い鳥だった。狩猟を禁じられており、自然に落ちた羽を利用する。事故で怪我をしていた場合は保護もする。大切な鳥だった。

イルマは立ち上がると、彼らを振り返る。

「援護して」

「何するんだよ！」

「木に登って巣を丸ごと持って来るわ。魔法を使って退治するとき、もしあの木にまで影響が出たらアーラドリも傷つけてしまう」

「仕方ないだろうこの場合！」

「仕方なくないわ。だって見つけてしまったもの。それでなくても数が減っているんだから」

禁じられているとは言え高値で取引されるものは、残念ながら数が減るのだ。アーラドリも生態調査で希少種として登録されていた。絶滅を危惧されてはいないが、ここ数年でかなり数を減らしている。「それなら俺が行くよ」

ヒューゴーがそう言っただけで前へ進み出るが、イルマは首を振る。彼女の空色の瞳が彼の右足を捕らえる。

「足首やられてるでしょ？ それじゃあ木に登れない」

「だからっってお前が行くことないだろう！？ 女なんだから」  
言っただけで、しまったと彼は顔を歪めた。

同じくイルマも眉間に皺を寄せている。

透き通るような白い肌と対照的な赤い唇が尖った。

「防御の結界を張るから、私の周りなら多少の魔法攻撃は平気よ！  
じゃあ、よろしく」

みんなが止めるのを聞かずに彼女は走り出す。

肩より少し下まで伸びた明るい金髪が、足を踏み出すごとに左右へ揺れた。青年たちは、互いに顔を見合わせてため息をつく。言っただけでいけぬ言葉。だが、言わずにはいられない。

努力を怠らず修行に勤しむその姿に、誰もが賞賛の言葉を述べることを惜しまない。だが、それでも、宮廷魔法使いの九割が男で、男性社会であるということ嫌でも思い知らされる。体力的にも、精神的にも過酷な仕事が多い。

普通の女性ならばそこで諦めた。

だが、普通の女性よりもさらに女性らしい容貌でありながら、イルマは上を目指そうとする。女性なのだからと言われれば言われるほど、痛ましいほど努力を重ねた。

その才能を妬ましく思い、同時に憧れを抱く。その複雑な感情を腹の底へ押しやり、ヒューゴーたちは杖を構えた。

距離を置き、隠れていた魔法使いが杖を持って現れたと、フルテクは次々に彼女に向かつて手を伸ばした。イルマの足より太い蔦が、彼女のいる場所へと振り下ろされる。まともに食らえば骨にヒビが入りそうな重い一撃だ。

だが、一つは防御の結果に阻まれ、もう一つは魔法の刃に切り刻まれる。

木の下へたどり着いたイルマは、登ろうと足をかけた。ひらひらと長くて邪魔な臙脂色をした長衣カフタンの裾は、腰の辺りで縛ってある。朱色の脚衣スボンが丸見えではしたないが、そうも言ってもらえない。長靴ブーツが滑らないのを確認すると、杖を地面へ置いて登り始める。

魔法使いは杖に触れていなければ魔法方程式を解くことはできない。つまり、魔法が使えない。仲間の援護だけが頼りだ。

木肌はざらざらとしていてとっかかりがたくさんある。小さな頃から屋敷の木に登って遊んでいたイルマには何の問題もない。あつという間にアーラドリの巢がある枝へたどり着いた。

彼女の周りの結界が、フルテク蔦からの攻撃を火花を散らして退けている。それに合わせてアーラドリが鋭く鳴き声を上げた。波のような珍しい模様をした翼を精一杯広げ、イルマを威嚇しているのだ。

「私は助けに来てあげてるのに」

言っても詮無いことをこぼす。自分がアーラドリにとってどう映っているかはよくわかっていたし、これからやることもどうせ納得してもらえないとは思えない。

どうやら卵を暖めているようだ。すぐ側でこれだけ騒ぎを起こしても動こうとしないのがその証拠だった。

と、後ろで叫び声が上がった。

「ヒューゴー!？」

振り返ると、仲間が全員足を取られて宙に吊されている。彼女を守っているものが何か、それを理解したのだ。

イルマは最後の距離を一気に詰める。ごめんね、と親鳥に謝って

から、巢を卵ごと抱えた。アーラドリは諦めたのか、こちらの意図が伝わったのか、イルマの肩へ止まる。だが警戒の声を止めることはしなかった。

その声がひときわ高くなったとき、防御の結界を破り太い蔦が幹に掴まっていた左手を叩く。痛みには耐えかねて手の力が抜けると、体がぐらりと傾いだ。

悲鳴を喉の奥に押さえ、体を丸めて衝撃に備える。その中心には巢があった。割れないように押しつぶさないようにと己に言い聞かせる。

だが、それは最後までイルマを襲うことはなかった。

「解！」  
ファイニース

高らかに宣言される発動の呪文。

その声にイルマはぎゅっと閉じていた瞳を開いた。空色の奥に、歓喜の色が宿る。

「師匠！」  
せんせい

「魔法使いが杖を離してどうするのですか？」

先ほどまでイルマがしゃがんでいたあたりに、一人の男がいた。深い海の底の色のような長衣カフタンを纏い、腰まである榛色の髪が魔法の起こした風で揺れている。紫色の瞳は少し怒ったような、でも、優しい色を湛えていた。杖の先の魔石も、彼の瞳と同じ薄い紫色に輝いている。

イルマの体は宙に浮いたまま、彼の元へ運ばれる。自分の足で立つと、彼女をくるんでいた魔法が消える。

「ホレス師匠……」  
せんせい

「これはまた、随分と豪勢に育ちましたね」

イルマの背後、木々の間から溢れる出ている蔦を見て呆れたように肩を落とす。

ホレスの後ろでは、ぶら下げられていた同僚が地面に尻餅をついていた。結局イルマを守りきることができず、教育係の一人であるイルマの師匠に見つかってしまったとバツが悪そうだ。



「他に二人、連れて行かれちゃいました」

「そのようですね。奥で暴れているので無事なようですが、フルテク蔦の除草は手を抜いてはいけません。わかりましたね」

肩越しに後ろを向いて、少しだけ怖い声で言うと、全員が口々に謝罪の言葉を述べた。

「手を抜かなくても、時期によつては急成長を遂げて三位<sup>トリア</sup>ではどうにもならないときがありますから、無理をせずに人を呼ぶように」  
そう言い終えると、ホレスは左手に持った杖を真つ直ぐ空へ掲げた。

彼の周りに魔力が集まる。方程式を解いている証拠だ。組み立てから、解を求めるまで、ホレスの一連の動作は誰よりも早い。今宮廷で、ホレスより早く魔法を放てる人物はいない。

世界は目で見える世界と、眉間にあると言われている第三の目で見る魔力の世界があった。普通に暮らしていれば、魔力の世界に関わることはないが、魔法使いはこの魔力の世界を見て魔法を繰り出す。

テルティウム・オクルス

世界はすべて魔力の図形で作られている。

眉間に意識を集中すると、その世界が見えてくる。

魔法使いは自らの魔力を様々な形に変えて魔力の世界へ放つ。図形ひとつひとつに意味があり、整然と並んだそれらはとても美しく強い。

頭で考えながら複雑な形を組み上げるのは、なかなか難しく、開発されたのが方程式だった。図形の方程式を組み合わせて、それらを正しい順番に解いていけば強力な魔法が自然と作り上げられるといった寸法だ。

図形の数が細かく、隙間をなるべく少なくしたものがより強い力を生む。

そうなると方程式も何十何百と解いて行かねばならない。

魔法研究者たちは長年研究を重ね、たくさんの方程式と、それらを上手く組み合わせた省略式を作っていた。

魔法学校で初めに習うのはその基礎だった。

基礎の魔法になると、意識せずに頭に思い浮かべた瞬間解かれ、解放の呪文、『解』<sup>ファイニス</sup>によって魔力の世界へ放たれる。

方程式をいかに早く、きれいに組み立て解くか、それが魔法使いの優劣を決めた。

「解」<sup>ファイニス</sup>

ホレスの宣言は、劇的な変化をもたらした。

木々に絡みつき、辺り一面に見えていたフルテク蔦が一瞬にして燃え上がる。だが、熱さは感じない。他の草にもまったく影響はなく、蔦だけが灰になった。その灰もあとから吹いた一陣の風がすべて取り払う。

奥の方に、囚われていた同僚が転がっている。

何が起こったのかわからずにきよとんと辺りを見回していた。

単に燃やすことだけならいくらでもできる。しかし、何をまったく傷つけない、これだけの魔法はとても複雑な方程式を解かねばならない。それだけの式を一瞬で組み立てて、解いてしまうのはさすがだった。

イルマも感嘆の声を素直にあげる。

「みんな無事のようですし、除草作業の続きをなさい。イルマは一緒に来るように」

何か特別に叱られるのかと首をすくめると、ホレスは小さく笑った。

「別の仕事が入りました」

そう言って踵を返し、来た道を戻って行く。

イルマも後を追おうとして、杖を忘れていることに気付いた。慌てて先ほどの木の根もとに取りに行き、同僚に杖の先を振って走り出す。彼らもそれに応えた。

## 第一章 新たなる魔原石2

鳥が、すぐ側でびるるると鳴いた。

暖かい季節だ。木々も一番生長し、青々とした葉を茂らせる。枝や葉の隙間から漏れる太陽の光が、地面に光と影の模様を映し出す。その下を、二人は迷うことなく進んでいる。

背の高いホレスは、その分歩幅も大きい。彼に並んで歩こうとすると、イルマはいつも小走りになる。イルマだからといって決して歩調を緩めるようなことはない。

走り出すほどでもなく、早足は続く。

少し息が上がってきた頃になって、ようやくホレスがイルマを振り返る。

「先にそのアーラドリを薬草園の魔法使いに預けて行きましょう」「はい」

親鳥はイルマの肩で機嫌よさそうにさえずっている。彼らのように翼があればと思う。だが実際は、こうやって二本の足で行くしかないのだ。

ときどき、こちらを窺っている気配を感じる。だが、気付いていないかのように真っ直ぐ前を見て進んだ。二人は何も言わずに薬草園を目指す。

ホレスはイルマを他の青年たちと同じように扱った。それはイルマを女性として差別しないという彼の態度が、表面的なものではないことを物語っていた。

彼に預けましよう、少し先にいる薬草の採取をしていた魔法使いに巣を渡す。緑色と黒の斑模様の卵が二つ。割れることなく並んでいた。親鳥は二、三度イルマの頭の上を旋回すると、巣へと戻って行く。

ようやく手が空いたと、腰で結んだ長衣カフタンの裾をほどきながら、隣を歩くホレスを見上げた。

すつと通った高い鼻と、優しい紫の瞳。肌の色は白くはなく、割と濃い目だ。榛色の髪の毛は、いつも光を浴びて淡く光っている。宮廷内でもかなり女性に人気が高い。けれど、誰かと親しくしているという話はあまり聞かない。もったいないなと思いつながら、誰にでも丁寧に分け隔てなく接する師匠せんせいを、イルマは誇りに思っていた。

見習いの期間は、特定の師に就いて学ぶ。

同期の中では群を抜いて成績のよかったイルマだが、女性である。宮廷魔法使いは男性社会だ。

他の見習いたちが次々に受け入れ先が決まっていく中、イルマを迎えようという教育係はなかなか現れなかったと聞く。最終的に、ホレスの弟子となることが決まったのは期日ぎりぎりになってからだった。彼は教育係の中でも一番若く、イルマと十しか離れていない。他の教育係は前線を退いた四十代五十代、一番上では六十代といった年寄り連中ばかりだ。教育係の中では異色の人物だった。「どうかしましたか？」

随分長い間見つめていた。その視線に気付いて、ホレスが笑いながらイルマを見下ろす。

「いえ、何も」

慌てて前を向く。そこには白亜の城が天を突く勢いで高くそびえ立っていた。王の居城だ。その周りには尖塔がいくつも並び、それを起点とした結界が敷かれていた。イルマたちが先ほど使っていた防御の結界などとは違って、本格的な防御の陣だ。これによって王宮は外敵からの攻撃を防ぐ。結界師の仕事だった。

彼らの編み出す方程式は複雑ではあるが美しく天を覆う。

ホレスせんせい師匠の下で学ぶ二位ドゥオが、イルマは結界師になればいいと言った。

見習いは、三つの位に分けられる。入って一年目は三位トリア。これは誰もが通る道で、全体にまんべんなく宮廷魔法使いの仕事を経験する。一番あちこちへと忙しい年だ。二年目以降は二位ドゥオ。二位からは

仕事を選ぶこともできる。たいていは教育係である師匠せんせいが、弟子の能力と本人の希望を計り仕事を回すことになる。二位は最高でも三年間。その間に方向を決めるのだ。そして、半年ごとに行われる試験に合格すれば、一位ウイヌスとなり、教育係の下を離れ、それぞれの職場で働くこととなった。そこで今度は実地で適性を見られるのだ。悪くすれば適性なしとして、二位ドゥオに落とされることもある。だが、そんなことは滅多になかった。一位ウイヌスになればほぼ間違いなくその職に就ける。

その彼は結界師の道を選んでた。次の試験は間違いなく通ると言われている。イルマの結界はきめが細かくよく褒められた。それを知っていたのだろう。

同時に、彼女の本当の望みも、彼は知っていた。イルマが公言してはばからないからだ。

王属護衛官になりたい。

それが、目標だった。

宮廷魔法使いの中でも花形の職業、王属護衛官は、その名の通り王やそれに近しい者を護衛する職務だ。武芸に長けた騎士と、宮廷魔法使いの中でも特に能力の高い者がその任に就く。イルマはそれを目指して日々鍛錬に勤しんでいる。

だが、女性だからという理由で宮廷魔法使いになることすら反対された。

皆が口を揃えて言う。

過酷な任務だ。きつい仕事だ。イルマは女なんだから、わざわざそんな辛い道を選ぶなくともよからうと。

周囲の反対を押し切って、誰にも文句を言わせない成績で試験を通ると、今度は宮廷魔法使いの中でも女性に向けた仕事がある。王属護衛官は常に神経をすり減らさねばならない。女性では無理だと立ち塞がる。

「イルマ、どこか怪我でもしたんですか？」

今度は反対に、ずっとこちらが見られていたようだ。

いいえと答えようととして、留まる。

そしてホレスの瞳とぶつかった。

「<sup>せんせい</sup>師匠……、私、やっぱり、王属護衛官にはなれませんか？」

薄い紫色の瞳が一瞬揺らぎ、色を濃くしたように思えた。目を細めてイルマを見返す。

少しして、彼は視線をそのまま前方の城へ向けた。レグヌス王国を象徴する不落の城だ。

「魔法使いほど、男女という性による能力の差がない職業はないと思いますよ」

城を見据えたまま彼は笑う。

「努力を怠らぬことです。君は私が受け持った魔法使いの中でも群を抜いて優秀です。確かに今は男性優位の社会です。特に、この宮廷魔法使いという仕事は。けれどね、変わらないものなんてないんです。そうでしょうか？」

「はい！」

イルマは元気よく返事をした。

ぎゅっと左手の杖を握りしめる。

陰っていた表情が、明るく切り替わった。杖の先のオレンジ色の魔石のように、彼女の空色の瞳も輝きを取り戻す。

あまりに簡単だと言われそうだが、<sup>せんせい</sup>師匠の言葉はいつもイルマを助けた。彼の慰めは、口先だけのものではない、そう思わせる何かがあった。

ホレスの右手がイルマの頭へ伸び、柔らかいその金色の髪を優しく撫でた。

「努力は報われる。そうでなければいけません。あとは、チャンスをものにすることです。機運を待っているのではなく、呼び寄せるんですよ」

「呼び寄せる？」

「ええ。……さあ、急ぎましょう」

薬草園を抜け、城の外苑にたどり着く。少し行くと城とは比べも

のにならない簡素な作りの建物が見えた。その奥に白い石を使って建てられた丸い塔がある。

手前の建物は見習いたちが詰める控えの場所。その奥が彼らをまとめる教育係の部屋がある塔だ。ホレスは真つ直ぐそこを指指して行った。

普段は朝、詰め所に二位トウオがやってきてその日の仕事を指示する。魔法学校を卒業したあとも、こうやって年次の呪縛に囚われると同期たちは不平を漏らす。イルマはその制度が好きだった。そう、ホレスの言う通り、平等にチャンスが与えられる。すべての仕事に触れることができた。

ときどき、師匠せんせいの元へ特別な仕事が入り、それを手伝うこともある。

先月、ちょうど薬草園の除草作業が入った頃に、イルマはホレスの供として東の港町に赴いた。今回も同じような簡単な仕事の補佐なのだろう。見習いを連れて行くくらいだ。難しい、危険な仕事はそうそう入らない。

当然のこととは言え、残念な気持ちもある。同時に、どこか、安心もしている。魔法学校は三年間。そこで習うのは魔法の基礎の基礎。実戦とはほど遠い。実際、習ってきたことがまったく役に立たず困ってしまう場面がこの一年で何度もあった。そのたびに、王属護衛官になどなれるものかと自分で自分を笑う。最近、この一年でどれだけ成長したかと自分自身に不安を抱く。

再び物思いに沈みそうになり、慌てて視線を戻した。すると塔の前に男の姿があった。

裾が地面につくほどの長衣カフタンを着て、口元の黒いひげを揺らしている。茶色の瞳が、こちらをきつく見ていた。禿頭の彼はメルヴィン・ウルカニウ。このレグヌス王国の中でも王属に連なる家と言われる六貴族の出だ。

六貴族はその名の通り、六つの家のことだ。ウルカニウ家はその中でも特に影響力のある貴族だった。実はイルマのインプロブ家も、

六貴族の一つだった。とはいえ、昔ほど力はなく、六つの中でも一番末席にいる。

メルヴィンは教育係の一人で、さきほどイルマと一緒に蔦退治をしていた同僚の師匠だ。

普段から女であるイルマを何かと目の敵にしている。自分の弟子よりもイルマの方ができるのがよっぽど気に食わないらしい。

だが今日は珍しく、視線の先にあるのは自分ではなかった。

先を歩くホレスへその熱いまなざしが注がれている。

何かあったのだろうか。

わざわざ塔の前でこちらが近づくの待って、言葉が届く距離になつた頃になつて目をそらした。

ホレスが軽く頭を下げ通り過ぎる。イルマもそれに倣つた。

だが、大変珍しいことに、メルヴィンが呼び止めた。

イルマは慌てて足を揃え振り返る。ホレスもゆつくりと、イルマにだけ聞こえる小さなため息をついて体の向きを変える。

「どうされましたか？ メルヴィン様」

人の歩みを止めておいたくせに、メルヴィンはじつとホレスを睨んだまま口を結んでいる。

とにかく絶対に口を挟んではいけないと、置物の彫像にでもなつたように視線も地へ向けたまま固定した。自分が特定の言葉に激しやすいのはよくわかつている。さっきもそれで突っ走ってしまった。これ以上失態を重ねないためにも、いつそれらの言葉が飛んできても余計なことを言わないで済むように、心を凍らせる。

十分な沈黙が通り過ぎた後、ようやくメルヴィンが再び口を開いた。

「いったい何のつもりだ」

「いったい何のことでしょう」

押し殺したメルヴィンの言葉に重なるように、ホレスがどこか笑いを含んだ軽やかな返事をする。

始まり方が不穏だ。



「ふざけるでない。先ほどの話だ」

「ああ。それで今イルマを呼んできたところですよ」

「なぜお前が」

「なぜ？」

「あれはわしの弟子が行くはずだった！」

「おや、それこそなぜ、ですね。メルヴィン様。誰かと問われて、では私だと応えたまでですよ」

「貴様は先月の任務にそれを伴ったばかりであろう」

それとはイルマのことだ。どうやらホレスは今回の任務を奪ったらしい。基本的に、突発的な、経験を積ませるための任務は持ち回りだと聞いている。

「はつきり初めに告げられていたはずですよ。内容が普段のものとはまるきり違う。それはあの場にいた全員がわかっていた」

いつの間にか周囲に魔法の結界が張られていた。外と、内を完全に隔離するものだ。ホレスか、メルヴィンか。二人の会話にはららしている間にどちらかが方程式を解いたらしい。

「ならば、今からでも申し上げに参りましょう。メルヴィン様もこの任務を積極的に受けたいと」

メルヴィンが顎を引いて呻く。

「いまさらそのような真似ができるか」

「違うでしょう。積極的にではなく、仕事を押し付けられて受けただけだ」

「何を」

「体力に不安があるとか適当に理由をつけて、弟子を数人送り込んで成功すれば上々とするつもりだったのでしょうか。失敗しても弟子がやったこと。仕方ないと終わらせる」

畳み掛けるような物言いに、メルヴィンの顔が赤く染まる。

イルマは息を飲む。

こんな風に相手を挑発するような態度をとるホレスを初めて見た。どちらかというと無難にかわし、無駄な衝突を避けようとする人な

のだ。

「今回の任務がそれで済まされる類のものではないことは重々ご承知でしょう。だからこそ慣例を覆し私がこの任務に就けたのですよ」  
荒い息をメルヴィンはゆっくりと整える。何があつたのかは知らないが、よっぽどのことなのだろう。普段からあまり仲のよいといえないホレスの下へわざわざ文句を言いに来たほどだ。

「……確かに今回は、その小娘が適任かもしれん」

ほら来た。大丈夫と心の中でつぶやく。大丈夫。まだ我慢できる。  
「ただの小娘ではありませんよ。彼女は三位トリアの中でも実に優秀な魔法使いです」

「だが、所詮女だ」

拳をぐつと握って耐える。平気だ。この差別が大好きな男の前で、思う壺の反応をしてやる義理はない。

「確かに彼女は女性ですが、それが何か？ 魔法使いは男性の方が優秀だとも？」

今日のホレスはどうしてここまで攻撃的になるのだろう。普段はイルマが何か言われても上手く話をそらして、後でよく耐えたと言うくらいだ。下手に反論すればそれだけまたイルマへの風当たりが強くなるのをわかつているから。

「では今の三位ヤニトの中で一番優秀なのが女である彼女なのはなぜなのでしょうね」

「わしの弟子を愚弄する気が！」

「それはあなたの方でしょう。弟子の優劣を師が競うなど、無意味なこと。師が弟子を駒に自分の優越感を満たすのは愚かなことだ」

「わしが弟子を駒にしているだ！？」

「……弟子を育てるのが師の役目。よいところを見つけ、やる気にさせ、伸ばしてやるのが教育係りです」

「そのようなこと、貴様に言われずともわかっている！ 小娘の能力はお前が引き出してやったとも言つうのか」

「いえ、イルマが今の実力を身につけたのは彼女の努力の成果です。

人の弟子のことばかり気にしていないで、少しはあなたの弟子を見てやったらいかがですか？」

放任主義というのは便利な言葉だと、同僚が憤慨していたの思  
い出す。

彼にも思い当たる何かがあったのだろう、さらに顔を赤くして怒  
鳴りつけたいのを我慢しているように見えた。

「それでは、急ぎますのでこれで」

ホレスが歩き出し、イルマも心の中で舌を出すと塔の中へ入って  
行った。

「……すみません。君をだしに使ってしまいました」

「いいえ！ でも、師匠せんせいが珍しいですね」

「聖人君主ではありません。私にだって、腹立たしいことはありま  
すよ」

それを常に押さえているのが師匠せんせいだと思っていた。

## 第一章 新たなる魔原石3

塔の入り口には二人の兵士がいる。二人とも杖を持つてはいない。ごく普通の警備の兵士だ。ホレスが彼らに軽く頭を下げ、イルマもそれに倣う。兵士二人は槍を胸に当て、顎を上へ向けたまま微動だにしない。

ホレスの部屋は塔の五階にあつた。煙と偉い人は上へ行きたがると言うが、年寄りには階段が辛い。必然的にホレスは上の方になる。五階には部屋が二つ北と南にあるが、使われているのは南側の部屋だけだ。

茶褐色の重い扉を開けると、豪華な長椅子が二組、机を挟んで並んでいた。

その一つに、こちらへ背を向けて金色の頭が覗いている。肩より短いそれを、藍色のリボンで束ねていた。背もたれに置かれた手には、大きな石の指輪が光っていた。インプロブ家に伝わる家宝の指輪だ。透明の金剛石が銀の台座にはまっている。

扉を開く音で彼は立ち上がり、イルマの姿をみとめると相好を崩した。淡い水色の長衣カウタンが、彼の薄い色合いによく似合っている。

「ああ、我が愛しの妹よ……なんだいその泥まみれな姿は」

ホレスよりもさらに背が高く、憧れの貴族の容貌を体現しているかのような兄、サミュエルは、笑顔から一転、眉をひそめ渋い顔でイルマを上から下まで眺める。白い肌に、高貴なる青い瞳。それがぐっと近づく。イルマの顎をとり、上へ向ける。そのままいつもと同じように貴族の令嬢にキスするかのごとく、彼女の顔を検分した。「あつちにもこつちにも、随分細かい傷があるな。俺の大切な姫君の顔に、いったいどのどいつがこんなひどいことをしたのか」

飄々とした物言いだ、相手が人間であれば間違いない、後でこつそりそれなりの報復をする気だ。そう、瞳が物語っている。

「フルテク鳶ですよ」

イルマを溺愛する兄の所行を、ホレスはまったく意に介さず、さらに奥の部屋へ向かう。こちらは応接のための部屋であり、奥がホレスの私室だった。

「薬草園の除草ですか。確かにあれは凶暴だ。それにしても、お前は女の子なんだから男どもにやらせればいい。せつかくの美人が台無しじゃないか」

サミュエルはそう言うと、部屋の隅の棚から薬箱を持ち出す。誰もが避ける言葉を、彼は惜しみなく、ことあるごとに強調する。彼に言われるのは慣れていて、小さな頃からで、さすがに苛立ちも起こらない。ただ少し、寂しいだけだ。

「やめてよ兄さん。こんな傷の一つや二つ。王属護衛官になったらこれくらい日常茶飯事よ」

「王属護衛官の魔法使いが顔に傷をつけているようでは、周りは全滅でしょうね」

再び奥から現れたホレスは、笑いながらそう言った。  
優しくあるからこそ、せんせい師匠の指摘はかなり痛い。

彼の手には羊皮紙の巻物がいくつかあった。どうやら地図のようだが、イルマを長椅子に座らせて、傷の手当てをする兄へ体は向けているが、顔だけはしっかりとせんせい師匠を見る。ホレスの準備が終わると同時に、サミュエルも薬箱の蓋をパタンと閉めた。頬に塗られた消毒液の匂いが鼻を突く。

サミュエルはイルマよりも二つ上。同じくホレスをせんせい師匠としていた。彼は今は落ちぶれて末席ぎりぎりを保つてるに過ぎないが、それでも六貴族であるインプロブ家の長男だ。実力もあり、家柄も十分。本来なら引く手あまたの存在だったが、少々素行に問題があった。魔法学校時代から浮き名を流しに流しまくる彼を、手元に置いて指導しようという奇特的な教育係がおらず、結局兄妹揃ってホレスの世話になっている。

「サミュエル、沈黙の結界を」

「はい ファイニス解」

長椅子に立てかけてあった杖を取ると、サミュエルは軽くその先端を回す。石の色は透明。かなり珍しいものだ。

魔法は魔法学校に入るとき、水晶や金剛石などの透明な石を使って作る。それが入学の儀だった。在学中肌身離さず持っていることで、単なる石だったものが、次第に自分の魔力を帯びてくる。と同時に、色がつくのが普通だった。ホレスのように瞳の色と同じものになることが多いが、イルマの魔法はオレンジ色に染まった。それ自体は珍しくはない。だが、まったく色がつけないことは滅多になかった。本当に魔力が通っているのかと疑いたくなるが、こうやって卒業のとき杖にはめ込み、魔力の引き出し口として使っているのだからこの石は間違いなくサミュエルの魔法石なのだろう。

沈黙の結界は初歩の初歩。その内側で話されることを、人に聞かれないようにするものだ。魔法を知らない者に見えなければ、直前までと同じように談笑しているようにしか見えない。話しているということはわかるが、その内容を知ろうとすれば他の音が邪魔で言葉として理解できないようになっていた。もちろん口の動きにも目くらましがかかる。

ただし、方程式をいかにきれいに美しく解くかで、その結界の性能が決まる。目の粗い結界は、魔法でこっそり聞き耳を立てられることもあった。

反対に、魔法使いの前で沈黙の結界を使うことはまずない。結界を張っていることはわかるし、下手に使えばいったい何を話しているのだと好奇心を誘い、いらぬ不満を膨らませる。

サミュエルの沈黙の結界はなかなかの出来で、せんせい 師匠も良しと頷いた。

「仕事の一つ、入りました。二人はニヒ・ラルゲ 荒れた土地 のことは知っていますね？」

「王都レグヌスセスの西、モンス山脈の東にある大きな沙漠ですよ  
ね？」

「そうです。レグヌス王国の国土の七分の一を占める大きな不毛の

土地です」

内陸に入れば入るほど、寒暖の差が激しく土地は乾く。だが、魔法使いを有するこのレグヌス王国においては、さほど深刻な問題ではなかった。定期的に魔法で水を運び、土地を潤す。気温は生態系をあまりに変化させてしまうために手を加えることが禁じられているが、飢えて乾くことはなかった。

あの土地の緑化計画に参加している友人がいる。彼からニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の異常さは聞いている。どんなに水分を投下しても、それを保潤する方程式を施しても、沙漠は乾き、その勢力範囲を徐々に広げて行っていた。放っておけば、いつか、何百年後かには、この国全土が沙漠の乾きに覆われてしまうことになるという。「先日、一つの情報が入りました。ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 に、魔原石があると」

「ええ！？」

「まさか！」

イルマとサミュエルは同時に声を上げる。

そして互いに顔を見合わせた。

瞳が、信じられない、馬鹿なと言っている。

魔原石は、魔法使いたちが杖の先に持っている魔石よりもさらに強い魔力を秘めた、大きな石だ。イルマが見たことがあるのは、母校のフェンデルワース魔法学校の地下にある緑色の魔原石クリュソスプラだが、地中から顔を覗かせている部分だけでも、彼女が両手を広げたときより大きかった。実際はどれだけのものなのか、想像もできない。他にも二つの魔法学校の地下に、魔原石がある。つまり、レグヌス王国には三つの魔法学校と三つの魔原石があった。

この魔原石はレグヌス王国が興る前、魔法により繁栄し、そして滅んだウエトウム・テツラ 古王国 が造り上げたものだと言われている。ウエトウム・テツラ 古王国 はレグヌス王国だけではなく、北のセプトント王国から、東のオリス王国、そしてレグヌスと陸つなぎではあるが、モンズ山脈に阻まれたその向こう、西にある

オキデス帝国まで、この世界全土を治めていたと言われている。

強力な力の礎となっていたのが、魔力の詰まった魔原石なのだ。今では、その力を自由に扱える者がおらず、入学の儀で、魔原石からほんの少しの魔力を引き出し水晶や金剛石に移し取る、魔力の種として利用されていた。魔力の種を植え付けることによって魔石となり、イルマたちが本来持っている魔力を吸い込み己の魔石となるのだ。

これによって自分の中から魔力を引き出しやすくなる。魔力の道筋を作る役割をした。

つまり、魔原石は魔法使いを育てるための大切な基盤なのだ。

ホレス師匠せんせいは軽々しく嘘をつくような人ではない。サミュエルが口笛を吹き、長椅子にどっしりともたれた。

「素晴らしいですね。誰ですか、その魔原石発見の栄光を浴したの  
は」

だが、ホレスの眉間には深い皺が刻まれた。喜ばしい事態であるのに、彼の顔が晴れず、イルマは怪訝な表情を浮かべて兄を見た。

彼も師匠せんせいの不審な態度に組んでいた足を解く。

「最近王宮の地下で亡くなった魔法使いに何か関係しているのですか？」

サミュエルの言葉に、はっと顔を上げたホレスは、やがて苦笑を浮かべた。

「師である私を差し置いて、君はいつたどこに情報の網を張っているんですか」

「上には疎まれますが、友人は多いのです」

話が見えないイルマは、二人の男を交互に見比べる。彼らはよくこうやって秘密めいたやりとりをする。そんなとき、兄は貴族の顔をした。

「もう！ 私にもわかるように話してください」

兄の長衣カフタンの袖を掴んで揺さぶると、彼はイルマを見て、ホレスに視線を定めた。ホレスは短くため息をついて足の上で指を組む。



「本来ならめでたき事態です。それがまったく漏れ聞こえてこないのがおかしいと思いませんか？」

言われて確かにそうだと気付いた。

イルマだつて決して友人が少ないわけではない。お喋りは女性特有のものと思われがちだが、同僚たちは暇があれば宮廷内で起きた様々なことを話題に上らせた。くだらないゴシップから、その八割に兄が関わっているのには肩身が狭い、新しい人事まで、位の壁を越えて取りざたされる。

新しい魔原石の発見ともなれば、雑談をしてよいときでなくとも、ちよつとした隙間を縫つてイルマの耳にだつて入ってきたはずであった。

それがまったく聞こえてこない。

「隠されているのですか？ でも、なぜ」

「隠さねばならない話がついてくるからだよ。……せんせい師匠、よくも俺をここへ呼んでくれましたね？」

サミュエルの恨めしそうな声に、ホレスはふわりと微笑んだ。

「本当に、弟子の中でも事態の理解は飛び抜けている。魔法使いでなく謀略を巡らす文官の方が君には似合っているように思うよ」

「褒め言葉として受け取っておきます」

「当たり前だろう。よくできた弟子だと言っているんだ」

またイルマにはわからぬ話の流れに、彼女は頬を膨らませる。

そんな彼女を見て、ホレスは机に広げた地図の一点を指さした。

「魔原石があると言われているのはこの辺り、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地、の奥の奥。本当に中心の辺りです。早足の魔法を使つたとしても、一番近い都市、ティルムから二日はかかります。国はもちろんその真偽を確かめたい。けれど、問題があった」

「沙漠だから、行くのが大変なんですか？」

「魔法を使えばあまりたいした問題にはならないだろう？ 確かにニヒ・ラルゲ 荒れた土地 は少々魔法の効きが弱いと言われているけれどね。問題は、何か畏が敷かれている可能性があるという

ことです」

なぜと言いかけて、やめる。先ほどからずっと質問を繰り返している。

黙り込んだイルマに、ホレスは目を細めて続けた。

「この魔原石発見の情報も、嘘かもしれないということです」

彼の言葉にハツと顔を上げると二人の視線は絡み合う。

「ことの始まりは一人の魔法使いでした。不審な行動を取る彼を捕らえ、情報を引き出したところ、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 にある新しい魔原石と、そこから魔力を取り出している他国の人間がいるという話が得られました」

「他国がっ！？ まさか、オキデス帝国？」

そこまで詳しく知らなかったのか、サミュエルも顔色を変える。

ホレスは重々しく頷いた。

「その魔法使いが言うには、オキデス帝国の人間が我が国の領土に入り、魔原石から魔力を得て魔法を使えるようになっていたとのこととです」

「魔法をつ！？」

あまりの出来事に、イルマは知らずのうちに右手で自分の口を押さえていた。

ウエトウム・テツラ 古王国 は一夜にして滅びたと言われている。その後、魔法によって治められていた国は、各地で独立し現在の国々の元ができた。

ただ、レグヌス王国の始祖は、ウエトウム・テツラ 古王国 で生き延びた王族たちだと言われていた。彼らは過去を戒め、魔法への過度の依存を禁じた。新たに強い魔力を得るものがおらず、魔力を身に宿す者はレグヌス王国内でしか見られなくなったと言う。

イルマやサミュエルなど、貴族は比較的魔力を多く持っている者が多い。王族との婚姻がそのような結果をもたらしているのだろう。それは容姿にも現れていた。白い肌に色の薄い髪の毛、そして青や緑の瞳だ。

反対に、肌の色や髪、瞳の色が濃い者たちは魔力の量が少ない。魔力は劣性遺伝なのだ。

他国にイルマのような淡い色合いの人種はいない。そして、魔力を持った者もないはずだった。まして、過去の技術は失われ、現在では魔法学校に入り、魔石を作り上げなければまず魔法を使うことはできない。

他国に魔法使いはいない。

レグヌス王国が戦を優位に進められるのは、魔法使いがいるからこそだ。使い方によっては、一人の魔法使いは優秀な兵士百人に相当する。

ほとんどが、レグヌスとは友好的に付き合っているのが現状だ。特にここ何世代かの王は、争いごとを好まず現在の領土を維持し、人々の暮らしが平和であるように望む傾向があった。

積極的にレグヌス王国と戦おうとするのは、モンス山脈に阻まれているとはいえ、陸続きであるオキデス帝国くらいだ。

国境ではことあるごとに小競り合いが絶えず、そして、年に数人魔法使いが消えた。

魔法を学ぶために拉致されていると考えられた。

こちらから必要以上に攻め立てることはせず、国境を遵守するレグヌス王国だが、オキデス帝国が魔法を手に入れば話は変わってしまう。

ひどい戦が始まるだろう。

「さて、ここからが本題です。王は国家の基盤を揺るがすゆゆしき事態と判断しました。すぐさま事の真偽を確かめたい。ですが、王属護衛官が赴けば、もし今回のことが本当なら相手を警戒させてしまいます。ティルムでも噂はすぐに広まるでしょう」

ティルムに王属護衛官が行くことはたいした問題ではないが、彼らが沙漠へ入って行けば話は別だ。捕まった魔法使いがどういった役割をこなしていたかが問題ではあるが、こちらが知っているのがばれるのは、出来るだけ先送りにしたい。

「そこでまず、本当に魔原石はあるのか？ あるとしたら、そこで何者が何をしているのか？ この二点を確認するのが我々の使命です」

イルマは息を飲む。

そうか、と下でのやりとりを思い出す。

ホレスはこれをメルヴィンから奪ったのだ。成功すれば間違いなく輝かしい功績となるが、反対に失敗すれば王国に重大な被害をもたらす。だから、メルヴィンは押し付けられる形で仕事を得たかった。誰も拳手しない中で、順番だから仕方ないと言って弟子をやり、自分は高見の見物でどちらへ転んでもいいように構えていたかったのだ。

「今回の仕事は普段のものとはまるで違います。拒否権を与えましょう。選ぶのはイルマです。が、もし断るのなら一段落するまで隔離させてもらいますよ。漏れてはいけない情報ですからね」

サミュエルが手の平を顔に当て、天を仰ぎ見る。

イルマに適任かもしれないという意味もわかった。それだけ軽んじられているのだ。

女の宮廷魔法使い、誰もがイルマに重きを置かない。

実習の一環として気楽な貴族のちよつとした研修旅行として見られることが自分でもわかる。

そつと唇を噛んだ。

「言っただけでしょう？ チャンスです」

ここに来るまでの会話を思い出す。

「今朝の会議で、我々教育係全員に話がありました。ですが誰をとまでは言わない。皆、危険に怖じ気づいているのです。現役を引退した老人どもには、国の危機とはいえ寒暖の差が激しい沙漠へ、しかも罨が敷かれているかもしれない場所へ赴くだけの勇気がなかったのでしょうか。自分の弟子の未来など、欠片も考えていない。あの沈黙はなかなかに見物でしたよ」

ホレスは楽しそうに笑った。

性格が悪い。たまにそう思う。

だが、そこまで言わせるほど、不甲斐ない惨状だったのだろう。「考えてみてください。初めから私に押し付けることすらしなかった仕事です」

それだけ栄誉は大きい。

簡単に他人にやってしまえるほどの安い案件ではなかったのだ。

「今回は私が呼び寄せました。選ぶのは君です」

念を押されるまでもなく、答えは決まっていた。

危険な仕事になるかもしれない。

けれど、今選ばなくていつ何を選ぶと言っただ。

「ホレス師匠、私やります！」

隣でサミュエルが深いため息をつく。ホレスはにこりと笑って軽く頷いた。

「なぜ俺まで呼んだんですか」

「君のお父上は六貴族のインプロブ家。変な圧力をかけてもらっては困ります」

「六貴族と言っても末席ですよ。父は入り婿ですし」

「けれど、彼はイルマを溺愛している。君以上にね。娘可愛さに横やりを入れられてはたまりません。君も一緒に行くとなれば、まだ納得していただけるかね」

本当の使命を話すことはないだろうが、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 に行くとなれば父は大騒ぎだろう。だが、兄と一緒に行けば違う。普段の所行はどうあれ、父は兄の、イルマに対する扱いをとても評価していた。自分の身を挺してでもイルマだけは守りきると信じている。

「ずるいですよ、師匠。他の教育係の弟子にも、女はいたはずだ」

「イルマの師が私であるということも重要なんだよ、サミュエル」

「……」  
無然とした表情で黙り込んだ彼を放置し、ホレスは話を進めた。

「一応、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の緑化対策の視察ということ

になっています。フェンデルワース魔法研究所で、国が支援している研究室があるから、その誰かを一人か二人つけてもらうことになるだろうが」

研究所と聞くと、イルマの表情がきらきらと輝き出した。

「心当たりでもあるんですか？」

「はいっ！ はいはい！ とつてもほどよく去年研究所に入ったばかりで緑化方程式をこねくり回してる適任を知ってます！」

身を乗り出して手を挙げるイルマに、ホレスも笑顔で応えた。

## 第二章 魔法都市フェンデルワース1

主要都市には直通の魔方陣がある。

国が管理しており、気軽に使用できるものではなかった。それを今回初めて使わせてもらい、王都レグヌスから南の魔法都市フェンデルワースまで一気に飛ぶ。大興奮のイルマに、大人二人は苦笑するしかなかった。

沙漠用に真っ白な外套を纏い、ぴよんぴよんと元気に飛び跳ねる彼女は、転移の塔を出ると大きく深呼吸する。

「この潮の匂い！ 懐かしい空気！」

フェンデルワースからは海が近く、風向きによっては風が磯の香りを運んできた。王都から来た学生たちはそれを嫌っていたが、約一年ぶりにこの空気を嗅ぐと、心が弾んだ。

浮かれてくるくる回ってみると、垂らしたままの髪の毛がふわわりと浮かび、外套の裾が広がる。そこには熱除けの文様が青い糸で織り込まれていた。

「イルマ！ 行くぞ」

旅行気分の彼女のフードをサミュエルが掴んで引っ張る。杖を振り上げ文句を言いつつも、大人しく従った。遊んでいる場合ではないのは確かだ。

街の中心の高台には、フェンデルワース魔法学校が見える。他は平地なのに、学校だけが高い場所にある。一般教養や魔法を学ぶ学校棟の他に、王都にもあった薬草園や生徒たちが寝起きする寄宿舎まで、すべてがあの中にある。

十三歳から十五歳までの三年間を過ごした場所は、懐かしく楽しい思い出でいっぱいだ。

もちろん王都が彼女の故郷だったが、充実した時を過ごしたこのフェンデルワースは第二の故郷と言えた。

町並みのひとつひとつがイルマの記憶を刺激する。

緑色の魔原石、クリュソプラを抱える都市ということ、この街の建物には緑色がよく使われた。白い壁に緑色の屋根や窓枠、玄関の扉。誰から言い始めたわけではないが、街全体が統一感を持った雰囲気に含まれている。北に魔法学校。中央に市庁舎があり、南には市場があつた。目的地である研究所もどちらかという南に位置する。街中を通り、彼らはそこへ向かつた。

すれ違う人々が、ちらりちらりとホレスに目をやる。もちろん彼の容姿も目を引くが、それ以上に左胸につけた銀色の紋章が輝いている。宮廷魔法使いの証だ。

イルマやサミュエルは見習いであり、同じ形ではあるが銅色あかがねいろをしている。

「なんだか、一年見ないうちに雰囲気が変わつた気がするわ」

「そうか？ 相変わらずだと思っけどな」

王都に負けず劣らずの活気。特に市場へ行けば人と商品で溢れかえり、レグヌス王国でも一番の賑わいだ。魔法に関わる商品は、フエンデルワースで揃わぬものはないと言われていた。王都からもわざわざ買い付けに訪れる魔法使いが引きも切らない。

「君の気持ちが変わつたのでしょうか。最近は随分と学生気分が抜けてきましたからね」

「そうですかあ？」

顔をしかめるサミュエルに肘鉄を食らわせ、イルマは師匠せんせいの言葉に喜んだ。

フエンデルワース魔法研究所は、国はもちろん個人貴族からもかなりの融資を得ている場所だ。魔法研究所としては国で一番の規模となる。設備も充実している。

だが、新卒の魔法使いは滅多なことではここに来ない。特に貴族の息子令嬢が多いフエンデルワース魔法学校からは皆無に等しかつた。というのも、派手な魔法のやりとりはなく、魔力を引き出す方程式を一日中作っては解き、また作り直して解くの繰り返しで、若



い魔法使いたちには魅力を感じることができないのだ。

しかも、前線を退き、王都で職もない魔法使いや、宮廷の派閥争いに敗れて逃げ出してきた魔法使いの行き着く先でもあった。

「レケン君を、ですか？」

「ええ。こちらが王都からの指示書です。うちの見習いの実習に付き合わせるの忍びないのですが、お互い旧知のようですし」

緑化研究室の室長であるダモンは、腹の突き出た大柄な男だった。これなら沙漠で二、三日漂流しても困らないわね、とサミュエルにこっそり言ったところ、お尻をつねられた。だが、兄も顔を伏せて笑っている。身長差があるので笑いを押し殺している顔が丸見えだ。「人選までは命令されておりませんので、一応彼に訊いてみてからにしようと思います。残念ですが断られてしまった場合は、どなたかご紹介ください」

「まあ、彼も二ヒ・ラルゲ 荒れた土地 を一度見てみたいとは言っていましたから、お断りすることはないと思いますが……、実際方程式を作っていただけで実地的なことはまだ何も学んでおりませんよ？」

「構いません。こちらも見習いの、みの字すら抜け出せておりませんから」

自分のことを言われているのだと気付くのに少々時間がかかる。頬を膨らませて兄を見ると、それ見たことかと笑われた。

三人のそんなやりとりを見て警戒を解いたのか、ダモンも頬を緩める。

「それでは、本人に訊いてみてください。ただ、今日は彼は休みなんです。先週まで情報整理で連日出勤でしたね、今週は交代で休んでいるんですよ」

「じゃあ、私探して来ます」

イルマは手を挙げ腰に巻いた鞆から手紙を取り出す。

一瞬目を閉じて追尾の方程式を解いた。手紙はアーヴィン・レケンとやりとりしたものだ。彼の魔力がほんの少しだがついている。

それを追うのだ。

「解！  
ファイニス」

発動の呪文とともに、手紙が輪郭を蕩かせ、角張った面影が消えると小さな小鳥が現れた。先日見かけたアーラドリに似せて作つてある。鳥は部屋の壁をすり抜けて飛び立った。

「では宿へ。場所は後で知らせます」

「今日出発しないんですか？」

「彼だつて準備があるでしょう？ 説明がてら夕食を摂りましょう。寄り道せずに来るように」

わかりましたと答えてイルマは駆け出した。

その後ろ姿を見て、ダモンはため息をつく。

「見事な魔法ですね。さすがは宮廷魔法使い様だ。方程式を組み立てて解くまでが本当に短い」

「まだ見習いですよ」

すかさずサミュエルが突っ込むが、ホレスは頷く。

「とても優秀な弟子です。今の見習いの中では一番でしょうね」

「それは、一位から三位まですべて含めて、ですか？」

サミュエルの問いにホレスはにこりと笑った。

「当然でしょう。だからみんな扱いに困っているんですよ」

中途半端ならば、落としてしまえる。だが、誰よりも抜きん出ているがために、資質の面で彼女を排除することができない。

「過保護もいいですが、そろそろ守り方を変えなければ、彼女は潰されますよ」

少しのミスも許されない。そんな道を歩み出しているのだ。

「わかってます」

少しだけ不満そうな表情のままサミュエルは手の平をホレスに向ける。それ以上は言ってくれなるといふことだ。

見事なまでに真つ直ぐな彼女に、誰もが危うさを感じずにはいられない。

「ならよろしい。それでは失礼します」

呆気にとられるダモンに代わる代わる頭を下げて、二人は研究所をあとにした。

追尾の魔法は、魔法を使えない人間には見えない。つまり魔法使い以外には、イルマだけが前方の空を見上げているようにしか見えなかった。新品の真っ白な外套を羽織った美しい少女が走って行くのは目立つ。外套に負けないくらい白い頬を上気させて、杖が人にぶつからないように駆けて行く。

途中、彼女が一年前までよく市場をうろついていた少女だと気づき、声をかけてくる者がいる。笑顔で挨拶を返し、人であふれかえった露店の隙間を縫うように進んだ。

鳥が二度旋回する。そして店の中へ吸い込まれていった。

露店もあれば、建物の中にも店がある。建物の中の店は、露店よりも少し高級な物を扱うところが多い。追尾の鳥が入っていったのは、宝石店だ。宝飾品というよりも、魔法に使う石を置いてある、魔法使い専用の店だ。イルマは疑問に思いながらも色硝子のはめ込んである扉を押した。カランと訪問を告げる音が鳴る。

店内には低い棚が所狭しと並べられ、品物がきれいに飾り付けられていた。そのどれにも盗難を防ぐための魔法が施されている。鉾石は作り出すわけにもいかず、比較的高価な物が多いのだ。

その商品棚の向こうで、鳥が彼の頭をつつき回していた。本当に痛いわけではないが、頭の周りをうるちよろされて、苛立たしげに手を振っている。

「アーヴィン!!!」

イルマは駆け寄りながら、魔法を解除した。ひらりと舞う手紙を掴み、彼の側に立つと、眉をひそめて目を大きく開く。

「私より背が高くなったらもう遊んであげないって言ったのに……」  
一年でいっただれだけ伸びたのだろう。卒業したときにはイルマと身長は変わらなかったはずなのに、今は手の平分だけ彼が上にいる。

「う、裏切り者っ！」

「……なんでここに」

あまり表情が変わらない彼の目が、イルマよりも大きく見開かれている。海の底のような、深い藍色の瞳が驚きに満ちていた。辛うじて肩につかないくらい髪の毛は濃い茶色をしていた。肌の色も、ホレスと同じように少し濃い。彼の杖にはやはり彼の瞳と同じ藍色の石がはまっていた。こちらは去年と変わらずイルマと同じぐらいの高さだ。

「でも仕方ない。身長くらいは、譲ってあげてもいいわ」

「君は王都にいるはずだろう？」

「男の子だもんね。普通にしたら伸びちゃうものね。不可抗力よ。兄さんもいつの間にかひよろひよろ伸びて、アーヴィンよりさらに一つ分高いし、あれよりはましだわ！」

「……すぐ終わるから先に外に出ていてくれないか」

「あら、遠慮しないで。ここで待ってるわよ？」

「お店の人に迷惑だから、外にいてくれ」

「えー、ちよっとお。もう！」

無理矢理背中を押されて外へ放り出される。扉に手をかけると、硝子の向こうで怖い顔をしたアーヴィンが人差し指をこちらへ突きつけていた。

そこにいろ、と言われている。

「何よー。……まあ、いつか。滅多に見られない驚いた顔が見られ  
たし」

手紙を丁寧に鞆にしまうと、杖を背にして彼を待つ。

学校を卒業し、友人が各地へ散ってしまった。手紙はイルマの唯一の趣味と言ってもいい。暇があれば近況をやりとりした。そうすることで各地の状況がよくわかり、彼らの目を通して世間も見えてくる。研究所に入ったのはアーヴィン一人で、イルマは同じように彼に手紙を送った。はじめはまったく返事がなかったのだが、懲りずに送り続けると、何通かに一回の割合で帰って来るようになった。

溜まっていく未返信の封書に罪悪感を抱いたのだろう。彼のそんなところも見越していた。実際、イルマの知らないことも多く、彼の手紙はなかなか楽しいものだった。

カランと扉の開く音がして、彼が現れた。手に白い紙袋を持っている。

「全然待つてないわよ！」

アーヴィンが何か言う前にイルマが宣言すると、彼は軽く首を振った。そして紙袋を差し出す。

「送る手間が省けた」

「え？ なにこれ」

「この間冷却石をくれただろう？」

「ああ！ 城に出入りしていた商人が売っていて、品物もよかつたし、少し欠けが気になりはしたんだけど、値段もお手頃だったから」

冷却石は、持っているると冷気を孕んだ風が運ばれて来る。石の大きさに比例してその範囲が決まる。手の平にすっぽり収まるくらいだったのでほんの気休め程度だ。ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 につか行きたいと言っていたのでちょうどよいと、手紙と一緒に送ったのが一ヶ月ほど前だ。

「そのお礼」

「ええ！？ いいのに。そんなんじゃなかったんだけどなあ」

欠けていたので思い切り値切った。

「僕の気が済まないから」

「そう？ じゃあ遠慮なく。ねえねえ、今開けていい？」

「後にしてくれ。君、落としそうだし」

「えー！ そんなことしないわよ。まあ、宿でゆっくり楽しむか。

それじゃあ行こうよ」

先に立って歩き出すが、後ろからついてくる気配がせず振り返る。

「アーヴィン！ 早く」

「イルマ……。相変わらず過ぎて何から言えばいいかわからないんだけど、とにかくなんで君がここにおいて、僕を連れて行こうとする

かだけ教えてくれないか？」

いつもの諦めたような表情で言う。

なんのканのと理由をつけて彼をいろんなところに引っ張り出したとき、最後にたどり着く彼の顔だ。身長は伸びてもそういった仕事は前の通りでイルマは笑った。

「笑うところじゃないと思うんだけどね」

「ごめん。宿に私の師匠せんせいがいるからそちらから説明してもらった方がいいと思うんだけど、えとつまり、今度私ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 に行くの」

彼は息を飲む。

「それは、おめでとう」

「ありがとう。でね、アーヴィンも一緒に行くのよ」

彼は大変思慮深い。在学中、イルマの嘘は何度も見破られた。少しの情報でたくさんを知る。彼の前に出て、嘘がばれないようにするには言葉数を減らすこと。

だが、彼の青い瞳の前に立つと、どうもそわそわしてしまう。

そして言葉に言葉を重ね、嘘に嘘を乗せてしまう。

「えっと、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の緑化政策の査定なの。師せん匠せいと、兄さんも一緒だわ」

「サミュエルさんが？」

「あと、アーヴィンもね！」

「そこでなぜ僕が出てくる」

もつともなご意見だ。本当に査定ならもつと実地調査に詳しい人間が案内すべきだ。

「うん、まあ。結局、査定と言っても私の実習がメインなわけ」

イルマが歩き出すと今度はアーヴィンも後からついてきた。

杖を振るって二人の周りに沈黙の結界を作る。アーヴィンが目を細める。

「アーヴィンには悪いけど、研究所の人はおまけなの」

彼の表情を盗み見るが、よくわからない。

「実習にも色々種類があるんだけど、その中にレグヌス王国の各地を回るっていうのがあるの」

これは本当だ。ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 を見ることたまにあるそうだ。だがごくたまにであり、定期的な調査のときに随行するだけだった。こんな風にこちらから実習を言い出すことはない。ダモンが戸惑っていたのはそこだ。しかし、目の前の彼はさすがにそこまで知らないだろう。

「それでね、実習のことを聞いたとき、真っ先にアーヴィンのことを思い出したの。で、私が師匠せんせいにどうかお伺いを立てたってわけ。誰か、研究所の人に随行してもらおうという話だったから。手紙でニヒ・ラルゲ 荒れた土地 に行きたいけど、上がつかえててなかなか行けそうにないって言うてたでしょ？」

「ああ」

返事に抑揚がない。疑われているのだろうか。

だが、彼のことを思い出したのは事実だ。せつかくなら彼の望みも叶えられればと思った。

「これはチャンスよ」

つい先日、同じようなやりとりをした。

「私が呼び込んだチャンスだけれど、それを掴むかどうかはあなた次第よ」

それで断られるなら仕方ない。

「ホレス師匠せんせいから詳しくお話があると思うから、よく聞いて決めてね。あ、でも査定に行く、で師匠せんせいは話を止めるかもしれないから、そのときは私が色々喋ったのは内緒よ？」

しばらく彼は黙り込んだ。イルマも気にしないように宿への道へ向かう。ホレスたちが泊まるような宿屋が密集している地区は決まっていた。途中でサミュエルから知らせが届いた。彼が好む蝶の形をした伝達魔法だ。イルマの手の平に当たると、泊まる宿の名前が浮かび上がって消えた。

頭の中で素早く最短の道のりを計算すると、右に折れる。細い、

街の人が使う道へ入って行く。

「君が絡むといつても大騒ぎだ」

「そう？ でもみんな楽しいって言うてくれてたわよ」

夜中に学校を抜け出したり、寄宿舎でパーティーを開いたり、あの頃はとても面白かった。

「いつの間にか人を巻き込んで」

「本当に嫌なら拒絶すればいいのよ。みんなの嫌だは面倒だってだけ。始まってしまえば楽しめる」

「確かにね」

「でしよう？ とイルマは彼を見て笑った。そこにはいつものどこか諦めた笑みが浮かんでいる。」

「まあ、君がべた褒めする師匠せんせいを見ないで帰る手はないね」

「そうよ！ 紹介するわ。本当にすごくすごく素敵せんせいな方よ。優しくって、でもきちんと厳しく指導してくれる。最高の師匠せんせいだわ」

イルマが瞳を輝かせると、その勢いに圧されたのか彼は肩を落とし首を左右へ振った。

「なによう」

「いや。行こう」

宿屋はすぐ見つかった。入ってすぐの受付に人がいるので、話しかけようとすると、サミュエルの声がする。

「こっちだ」

右手の通路に彼の後ろ姿が見える。ふわりと漂う酒の香りに、もう始めているのだとわかった。大きな宿で、少し夕飯には早い食堂は混み合い始めていた。ホレスとサミュエルが一番奥の机に陣取っている。

木のテーブルの上にはいくつか皿が並んでいる。王都を出る前に食事はしていたので、そんなに腹は減っていないと思っていたが、嗅覚と視覚を刺激されると胃が我慢できないと訴えてきた。

「お待たせしました。こちらがアーヴィン・レケン。アーヴィン、私の師匠せんせいのホレス・ディーリゲンス様よ」



初対面の二人を引き合わせ、イルマはさつさと席に座る。ホレスの正面だ。二人が来るまでサミュエルがそこに座っていたのだろう。空の杯が二つあった。今彼は、ホレスの隣に席を移し、手にはもちろん酒がある。三杯目、いや、それ以上か。

「初めまして、ディーリゲンス様。よろしく願います」

彼はいつもの調子で物怖じせずにあ挨拶した。ホレスに席を勧められてイルマの隣、サミュエルの向かいに座った。

「様はやめてください。ホレス、でいいですよ」

「では、ホレスさん、と」

サミュエルが給仕を呼ぶ。

「俺の紹介はなしか？」

「口説いた女は数知れず悪名高きインプロブ家の跡取り息子って？」

「ひどいなイルマ、女性に声をかけないなんて失礼極まりないことだ、……これをお代わりと、香草茶を二つ」

「あ、私もお酒飲みたい！」

「明日から移動するというのに、倒れられては困ります」

すかさずホレスに釘をさされて、イルマは口を尖らせた。

「夜中に介抱するのは嫌ですよ」

さらに笑顔で念押しされた。

「俺はいくらでも介抱してやるぞ」

サミュエルが杯を目の前に掲げながら言った。

二人で結託して、なんとも腹立たしい。

「もう、いいわよ。香草茶大好きだし！　アーヴィンはお茶でいいの？　お酒の方がよかったんじゃない？」

「いや、酒は匂いだけでもう十分」

「ん？　それは俺に対する嫌みか？　随分おつきくなったなあ、坊や」

そう言って、机越しにアーヴィンの頭をがしがしと撫でた。彼はされるがままになっている。

「ちょっと兄さん！　もー酔っぱらいって嫌ね」

伸びてくる手をはたき落としていると、給仕がお茶とお代わりの酒を持ってきた。

「それでは楽しい夜に乾杯」

強引に差し出された杯に、イルマは仕方なく自分のものを軽く当てた。

「久しぶりのフェンデルワースに」

ホレスとアーヴィンもそれに倣うが、二人とも無言である。

取り皿を隣に座るアーヴィンへ回し、イルマは早速目の前の料理に手を伸ばした。

「ファイニース  
解」

サミュエルがそつと四人の周りに沈黙の結界を張る。アーヴィンが宙を見据えた。結界のできを眺めているようだ。

「イルマからどこまで聞いているのかな？」

ホレスはアーヴィンを見つめて問う。彼はちらりとこちらを見て首を傾げた。

「査定とは名ばかりで実習の一環だというお話まで」

いきなり全部だ。が、それは彼が何かしら疑問を持っているという証の気がしてならない。それが本当なら、全部をばらしてしまつたイルマの立場が悪くなるかもしれない。アーヴィンはそんなことをするようなタイプではなかった。つまり、これは話してもいいことだと彼がそう認識しているのだ。

こちらが彼にそう思っけてもらいたいのだとわかっている。

「うちの弟子はお喋りですね。それとも、内情を隠しておけないほど仲がよいということですか？」

「そうです！」

「違います」

軽く隣を睨む。

ホレスはそれ以上突っ込むことはせず、彼の前に大皿を押しやる。食べなさいと指示して自分も少し口をつけた。

「国の勅命ではありませんから。一応室長殿には許可をいただきま

した。彼もよい機会だろうから、あなたが了解するのであればと」  
イルマは余計な口を挟まないよう努力し、アーヴィンの答えを待った。嫌がっていないのはわかっていたが、ただ、不信感を抱いているのもわかっていた。

十分過ぎるほどの沈黙の後、彼はゆっくりと顔を上げた。真つ直ぐホレスを見る。

「お誘いは光栄ですが、一つ、言っておきたいことがあります」  
聞いておきたいことではなく、言いたいことに思い当たる。

アーヴィンがこちらを見て笑っている。

「僕は魔法使いません」

「あまりに当たり前のことになっていて、すっかり忘れていたわ」

「あれ、あの噂本当だったのか」

イルマとサミュエルが同時につぶやく。

魔法を使わない魔法使いを連れて行くのは危険が多過ぎる。沙漠は敵しい場所だ。イルマは己の失態を嘆いた。

が、

「わかりました」

一拍置いてホレスが頷き三人が目の前の宮廷魔法使いの顔を穴があくほど見つめた。

「師匠せんせい? 今なんて?」

「了解しましたと言ったんですが?」

「え、だって、アーヴィンが魔法を使わないって言ったんですよ?」

「ええ。聞こえましたよ。実習中、魔法が必要になったら、イルマ、あなたが代わりにやりなさい。それでいいですか?」

最後に三人のやりとりを黙って見つめていたアーヴィンへ尋ねると、彼はゆっくり頷いた。

噂というのは嘘が混ざっていることが多いが、この場合ほとんど真実だ。フェンデルワース魔法学校に魔法を使わない魔法使いがいると、あちこちで囁かれた。事実、当の本人であるアーヴィンは、本当に必要なとき以外、魔法を使わなかった。つまり、実技試験の

ときだけ彼の魔法を見ることができるとは。それ以外は覚えた方程式を解き、魔法を使いたがる生徒と違い、彼は決して魔法を使わない。いったい何のために学校にいるのかわからないと言われるほど頑なにそれを守った。

方程式を解くことが、魔法を使うことが下手なわけではない。むしろ、試験で力を振るえば誰も彼の出来にケチをつけられない。教師よりも上手くやるくらいだ。

魔力があまりにも少ないわけでもなかった。貴族ではないが、普通の、魔力の値が規定に足りず学校に入れぬ人よりは断然多い。魔力を節約しているわけではない。

方程式を組み立てることは好きなようで、訊けば色々と教えてくれる。試験前には彼の前行列がよくできた。

ただ単に、彼は魔法を使いたくないのだ。

過去に何度か、試験以外に魔法を使う彼を見たという話もあった。それも、誰かが怪我をしそうで、他に助ける者がおらず、かなり不承不承、文句を言いながら魔法を使って助けたという筋金入りだ。「使えないというわけではないのでしょうか？」

「ええ、それは……」

ちらりとアーヴィンを見ると、彼は軽く頭を動かす。

「沙漠は厳しい場所です。ときにはあなたが魔法を使わないことによつて怪我や最悪死ぬことがあるかもしれません。ですが、それはご自分のせいです。私たちがあなたを責めることは決してありませんが、反対にイルマを責めることもしないでくださいね」

「それは、当然です」

「では、よろしく願います。ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 へ行く基本的な準備はすぐ整いますか？」

「自分でも準備をしてきましたから。ああ。でも外套がまだありませんね」

「そうですね。支度金をいただいていますので、それで買ってしましましょう。フェンデルワースの店は夜遅くまで開いていますから、

食事が終わったらイルマを連れて行きなさい。せっかくですから良い物を選ぶといいですよ。彼女のように、暑さ避けの魔法がかかっているものが便利です」

呆気にとられるインプロブ兄妹を完全に無視して、ホレスとアーヴィンは話を進めて行った。

## 第二章 魔法都市フェンデルワース2

街の明かりが空の瞬きを消してしまう。沙漠へ、ニヒ・ラルゲ荒れた土地へ行けば降ってきそうな星空というものに出会えるのだろうか？ いくつかの都市へ行きはしたものの、未だにそのような情景に出会えていない。地上の明かりは天へと届く。そして天を霞ませてしまう。

外套選びに熱心でないアーヴィンの代わりに、イルマは次々店の奥から品物を持ってこさせた。ずらりと並んだ中から、かなり時間をかけて選んだのは、イルマと同じ真っ白で、青い刺繍糸で暑さ除けの文様がかなり大きく描かれているものだった。内側にはポケットがいくつもあり、イルマのあげた冷却石もそこに入れば快適だろう。

機能的であればいいと渋るアーヴィンをなだめすかして、最後は財布を握るのはイルマだと脅してお買い上げだ。

既製品の中から、値段や機能を比べてお値打ちな物を探す楽しみは、このフェンデルワースで覚えた。貴族らしくないと散々横で言われたが、貴族らしさを出したら、預かった金では到底足りないのだ。

「ねえねえ、夜こうやって歩いているとき、思い出さない？」

二人は店じまいを始めた市場の中を、ふらふらとさまよっていた。先に行くのはイルマなので、彼女が好き勝手歩くのを、アーヴィンが放って帰るわけにもいかず仕方なしについてきているだけとも言っ

「みんなで抜け出して、学校の丘から布敷いて滑り下りたときのこと！」

「ああ、あれは君が無理矢理」

「でも、すっごく楽しんでたじゃない。アーヴィン、絶対魔法使わないって言うから私と一緒にの布に乗って、裏手の林の中を思い切り

スピード出して！」

「生きた心地がしなかったよ」

「私がいつちばん早く下りたのよね」

「あとで教頭先生にこっぴどく怒られた」

「もう！　なんで楽しかったことを忘れて怒られたとか、そーゆうのばっかり思い出すの？」

突然足を止めて振り返り、彼の鼻先に指を突きつける。

「せっかく覚えるなら面白かったことを覚えておくべきよ」

「……努力はしたいが、君といると怒られたことの方が印象的でね」  
「後ろ向き過ぎるわ」

そう言いながらも気分はよい。やっぱり買い物はいい。預かったお金は余っているし、二、三着長衣カフタンを買ってもよかつたんじゃないかと思うのだが、それはアーヴィンが許さなかった。

自分の金でやってくれと言われたので、今度自分のお金でアーヴィンへ長衣カフタンをプレゼントしよう。何色が似合うかと考えているだけで楽しくなる。

もちろん、アーヴィンが言った意味は十分理解している。

その上でわざと取り違えて押し付けてしまえばいい。アーヴィンに似合う色は、兄には似合わないから、いらなと言われてしまえば捨てるしかなくなるのだ。それにはアーヴィンが耐えられないだろう。イルマの勝ちだ。

「ねえ、明後日にはニヒ・ラルゲ　荒れた土地　よ？　どきどきしない？」

「してるよ」

「そんなすました顔で、全然説得力ないわ」

イルマは笑いながら先を歩く。白の外套が街の灯りを受けて光の軌跡を描く。

　　瞼を閉じて　睡りの泉に身を浸せ

　　丸い月が　天を回る

無数の月が 世界を回る  
天を貫く 四本の柱  
円い柱が 空へと伸びる  
強い力は 螺旋を描き  
後を追うのは 陽昇る軌跡  
世界を箱に 閉じ込めて  
月の睡りを 誘い出す  
二つの渦は 力の道筋  
世界を巡る 力は大地へ根を下ろす  
瞼を閉じて 睡りの泉に身を浸せ  
渦は力を天よりくだす

歌に合わせてくるくる回る。

大通りではなく割合細い道を行くので、人には出会わず迷惑はかけていないが、後ろをついてくるアーヴィンはいつ転ぶんじゃないかとひやひやする。

「それは？」

初め何を指しているかわからず首を傾げると、どこの歌？ と重ねて問われる。

「さあ？ よく知らないけど、子守歌よ」

「子守歌？ どこが？」

「どこって……」

「僕の知ってる他の子守歌とは随分違うし、また方程式が山盛り隠されていそうな歌だ」

言われてみればその通りだ。

古くから伝わる歌は、重要な魔法が隠されていることが多い。そうやってウエトウム・テツラ 古王国 の魔法を伝えていたと聞く。だから方程式の研究者は、まず古い歌を参考にした。

「初めて聞いた歌だ」

「小さな頃から、兄さんが歌って聞かせてくれたのよ」



「音の調べは、子守歌の旋律に類似する点が多いね。でも、歌詞がいまいち。それに、円い柱だの、螺旋だ、箱だと、図形を表すものがたくさんある」

「アーヴィンが知らないって言うのが、珍しいわよね。兄さんは、母さんが歌ってくれたって言ってたけれど」

「インプロブ家に伝わる秘密の歌とかね」

「秘密にしすぎでしょう。アーヴィンに指摘されるまで、私、方程式が入っていきそうって全然気付かなかつたし」

「……ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 から帰ったら、少し調べてもいい？」

「ええ。もちろん！」

彼の研究者魂に火がついたようだ。

それにしても、と辺りを見回す。歌いながら好きなように歩いてきてしまった。懐かしい風景だ。

「マナの店で食べたスープ、美味しかったなあ」

ふと思いついて、つぶやいた。よく学校を抜け出して食べに行っただの。

「確かに、それには同意する」

「でしょでしょ。あれは絶品だった。まだやってるのかなあ？」

「やっているよ」

彼の答えに足を止める。くるりと踵を返し、すぐ後ろにいたアーヴィンに詰め寄る。

「まさか、食べに行ったの!？」

「僕は、ここに住んでるからね」

「ずつつつーいっ!」

「ずるくない」

「ずるいわよ。絶対。ずるい。ひどいわ、私を差し置いて。本日二度目の裏切りよ」

「君だって在学中は毎週通っていたじゃないか」

「でもここ一年ご無沙汰だもの。よし、行こう!」

目的を得た彼女は素早い。杖を振り上げて突撃体勢だ。

「今から？ 夕飯は食べただろう？」

「スープが入る余地くらいあるっ！」

言い出したらきかないイルマを放っておくわけにも行かず、アーヴィンは横へ並ぶ。

「最近あの辺りは治安がよくない」

だからやめておいた方がいいんじゃないかと言いかける彼を尻目に、方程式を完成させて防御の結界を張った。フルテク蔦に対したときに使っていたあれだ。

「上手くなつたね」

彼はぐるりと周りを見回す。

「昔アーヴィンに粗い汚いだの散々言われたからね。二重にしておこうかな？」

結界が二人を包み込む。

魔法使いは国の学校に入り、ほとんどが国の機関に組み込まれる。だが全員ではない。地方の貴族が己の息子を魔法使いに仕立て上げ、己の領地を治めるために利用することもある。力のある、それこそ六貴族が魔法使いを召し抱えることもあった。国はそれを禁じていない。ただ、国外へ魔法使いが出ることは、かなり厳しく制限されている。魔法使いの力の仕組みを外へ漏らさないためだ。

そしてたまに、道を踏み外す者もいた。魔法を使って正攻法ではなく金を儲ける者がいる。魔法使いの犯罪者は始末が悪かった。魔法使いに魔法使いが狙われる。

路地をいくつも曲がり、二人はよく知った道を行った。

両側から喧噪が流れてくる。建物の二階から伸びた看板に目をやると、確かに以前来たときよりも、夜、酒を売る店が増えていた。女の嬌声も聞こえてくるので、そういった場所もあるのだろう。

目的の店の灯りが見えたとき、心の中でほっとため息をつく。絡まれたら面倒だ。魔法で撃退はあまりやりたくない。だが、服を少しでも汚していったら、サミュエルがこの世の終わりがごとく嘆き

に嘆くだろう。真相を話せば乗り込んでこのあたりを一掃しかねない。

アーヴィンが先に入る。入り口で止まるので、彼の背中が邪魔で見えない。数瞬間を置いて、奥へ進む。イルマも杖がぶつからないよう彼の後に続いた。

飛び交う口笛。これは予想していたことだ。アーヴィンが治安が悪くなったと言った時点で覚悟している。覚悟を決めても来たかった。

だが、次の攻撃はまったく予測しておらず、無防備なところへ完全に決まった。

「この子はっ！ 久しぶりじゃないか」

恰幅のよい店主のマナが、力の限りイルマを抱擁する。息が詰まって苦しい。辛うじて彼女の背中に手を回し、再会の喜びを表す。

「ご無沙汰してます。マナも元気そう」

「もちろん元気だよ。何か食べるかい？ それとも酒を？」

イルマが酒の名前を言おうとすると、アーヴィンが遮るようにスープを注文した。睨み付けるが、彼は奥の席にさっさと座る。仕方なく向かいへ腰を下ろした。

「もう、いいじゃないちよつとぐらい」

「酒を飲ませて返したら二人から怒られる」

たぶん怒られるどころじゃない。

マナはすぐに盆に二つスープ皿を載せて持ってきた。野菜がたっぷり入っていて、作るのに丸三日かかると言う。手間暇かかっているだけに絶品だった。

「美味しい！」

一口食べて、身もだえする。マナはそんなイルマを見て満足そうだ。

「それはよかった。ところで、宮廷魔法使いさんがこんなところで何してるんだい？ 山の方ではオキデスが騒がしいって聞くけど、あんたもそっちに行かなくていいのかい？」

山とは、オキデス帝国との境界でもあるモンズ山脈のことだ。

「騒がしいって言ってもいつものことよ？ あの付近にはゲナもあるし、王都の魔法使いが出て行くような戦は起きてないわ。ティルムもあるし、大丈夫よ」

イルマが笑顔で答えると、マナも口元をほころばせる。

「それに、私はまだ見習い！」

「フェンデルワースで一番に優秀だったんだから、あんたならすぐに見習い脱出だろう？」

「そうなればいいんだけど、やっぱり学校と実戦とはだいぶ違うわ。頑張り甲斐はあるけれど」

「そこらの男どもに負けるんじゃないよ？ 私はあんたを応援してるからね」

「ありがとう！」

後ろから新たな注文の声が上がり、マナはイルマの頭を撫でるとそちらへ向かった。

イルマは引き続き懐かしの味を賞味する。

「オキデスの攻撃が激しくなってるって、本当なのか？」

「んー」

イルマはスプーンをくわえて、杖を取る。二人の周りに沈黙の境界を張った。不用意な言動がおかしな事態を引き起こすのは避けたい。見習いとはいえ宮廷魔法使いである彼女の言葉に周囲の人間は耳をそばだてるだろう。

「ちよつといつもより激しいっていうのは聞いているわ。ゲナ周辺の魔法使いと、ティルムの兵たちが結構ぴりぴりしていたって、この間ゲナへ研修に行った同僚が言ったの。今回はティルムを起点として移動するって話だから、気をつけた方がいいかもね。みんな苛立ってるだろうし」

それにしても、オキデスの噂がフェンデルワースのこんな場所まで広まっているとは予想外だ。普段のお約束的な侵攻なら、こんなところで話に上らないだろう。

サミュエルも気にしていた。二ヒ・ラルゲ 荒れた土地 に不穏な動きがあるところへ、季節外れの侵攻。たまに同じように時期を外して仕掛けてくることもあったが、このタイミングが嫌だと、漏らしていた。

「まあ、大丈夫よ」

何の根拠もないイルマの台詞に、アーヴィンは肩をすくめた。

「なんとってホレス師匠せんせいが一緒ですもの」

「自分が一緒だから、じゃないのか」

こちらを見ずに、アーヴィンがスープをすくいながら言う。

「それはもちろん！ 大前提じゃない」

悔しかったので、極上の笑みを浮かべて応戦した。だが彼にはこれも通用しない。ちらりと視線を向けるがすぐにスープへ戻す。自分でもそれなりのランクに入ると思うのに、アーヴィンには効かない。

イルマには足りないものがある。魔力や方程式を解くスピードはそうそう負けはしないが、それでもやはりホレスやサミュエルが話しているのを聞いていて、自分は幼いなど感じるが多々あった。だが、この幼さを克服するのは、それこそ経験を積んでいくしかないのだろう。

焦っても無駄だと思っただが、たまに苛立ちに打ちのめされる。

「まあ、僕の分の魔法はよろしく」

「ええ。任せておいて！」

「早足と冷却と軽減と防御」

「……多い」

「魔力の浪費を押さえる方程式を考案したから、後で教える。試してみてくれ」

「えええええ……アーヴィンの方程式ややこしい上に長つたらしい」「仕方ないだろ？ まだ試行錯誤の段階なんだから、省略式はきちんと完成してから作らないと二度手間どころの話じゃないし」

アーヴィンは方程式をいじるのが好きで、また上手かった。ただ

し、本人の方程式を解く速度が尋常でないため、その省略式は作っている式が本当に完成するまで作られない。実験台として何度かアーヴィンに頼まれ試してはみたが、まずはその式を覚えるのに一苦労する。そして、もたついているとやれやれと肩をすくめるのだ。気分が悪いことこの上ない。

「僕が君に頼んだのは、他の人間じゃ覚えるのに丸一日かかるが、君なら半日で済むからだ。その点は評価しているんだよ」

「褒められてるように思えなーい！」

さらには、イルマは決してアーヴィンに自分でやればいいとは言わない。一度だけ、なぜ自分でやらないのかと訊いたことはある。答えは簡潔で、やりたくないからだ、と。自分がやりたくないことを人にやらせる。そんな風に言われて協力する人間の方が少ない。

それでも変わらずにイルマはアーヴィンの手伝いを進んでやった。イルマにとつても勉強になったし、楽しかったというのもある。

「とにかく、君の元の魔力が多いとはいえ、有限だ。僕のためにそれを消費してもらうのは心苦しいから、せめて開発中の方程式を提供しようと言ってるんだ」

「大丈夫よう。そんな気を遣ってもらわなくても」

有益な新しい方程式を開発すれば、それなりに金になる。初めの頃は彼の方程式も魔法を覚えたての子どもが少しいじくる程度だったが、年を重ねるにつれて高度なものへと変化してきた。そうなるのと、軽々しく他人が試しているのかと思うのだが、彼はそこら辺は頓着しない。

いくつか高額な賞金がかけられている方程式がある。それを狙う在野の魔法使いも多い。

ただ、アーヴィンの場合国の研究所に属しているので、よっぽどの大発見でもない限り、研究所から発表となり少額の報奨金で終わる可能性が高かった。

「何か役立つ方程式になればいいわね」

「僕のはいつも役に立つ」

「言い方を変えるわ。誰にでも使える、役に立つ方程式が出来上がる」といいわね」

「例えば？ 君の大好きな竜のように強くなれるような？」

「いいわね、とイルマが身を乗り出す。だが、彼はため息をついて肩をすくめた。

「お伽嚙なお年頃はもう卒業しただろう？」

「お伽嚙なんかじゃないわ。竜はいるもの！」

イルマの勢いをよそに、彼は黙々とスープを口へ運ぶ。

「ちよつとアーヴィン！ もう。仕方ないわね。とっておきの秘密を教えてあげる。いい？ インプロブ家の家紋、知ってるわよね」

首にかけていたペンダントを外してテーブルの上へ置いた。宮廷魔法使いになった祝いに父からもらったものだ。透明の石の台にインプロブ家の家紋が描かれている。

銀の蛇が肢体をうねらせ鳶と絡みついていた。

「他の五つの家の家紋は、鷹とか、獅子とか狼とか強くてかつこよさそうなものばかりでしょ？ 蛇ってなんか手足がなくなって生理的にだめって人も多いし、正直子どもごころに不満だったのよ。そうしたらね、お父さまが言うの」

指先で蛇の背を指す。

「ほら、ここ。まるで羽根があるように見えない？」

「……そうだね」

言われて初めてそうかもしれないと思えるものだが、確かにインプロブ家の家紋の蛇には、背に羽根がついているように見ることができた。鳶の葉が上手い具合に羽根の形をしてそこにあるのだ。

「だからね、蛇じゃなくて、竜なのよ、これは」

「……それこそ、子どもの不満を解消してやるためのものなんじゃないの？」

「あら！ お父さまが嘘をおっしゃったと言うの？」

ぷっくり頬を膨らませるイルマに、アーヴィンはやれやれと息を吐いてスープを黙々と平らげる。そんな彼の態度に不満を抱きなが

らも、イルマの興味は次へと移る。なんといっても目の前のスープだ。暖かいうちに存分に味わおう。

実際イルマも父の話はこじつけであり、彼女の夢を壊さぬためのものだと思っていた。

夕飯もかなりしつかりと摂った上のスープだが、あまりの美味しさに皿はきれいに空となる。



## 第二章 魔法都市フェンデルワース3

「仕事の方はどうなの？」

「どう、とは？」

「何か面白いことはないの？ やっぱり学校とは全然違うでしょ？  
せつかく手紙返してくれてるのに、アーヴィンちつとも質問以外のことを書いてくれないんだもの」

「仕事の話は情報漏洩」

「わかってるわよ！ そうじゃなくて、こんな楽しい先輩がいるよとか、こんな珍しいことがあったとか。当たり前障りがない程度でいいよ。仕事のことじゃなくてもいいわ。休日にあったこととか  
そうよ！ 私アーヴィンの自宅の住所も知らないのよ？ いつつも研究所宛てに出してるし。今は一人暮らしなんでしょ？」

「卒業したのに学校の寄宿舎にはいられないだろ」

さも当然といった様子でアーヴィンが言う。こちらはちょっと勇気を出して聞いたことなのに、軽く流される。彼は昔から自分のことをあまり話そうとしない。触れられたくないのだろうと思うのだが、でも、気になる。

「もしなんだつたら手紙は自宅の方に」

「研究所宛てに出してくれる方が受け取りやすい」

えーっとイルマは不満をあらわにする。だが、彼はまったく動じない。

「でも、いいな。一人暮らしって。一度やってみたかったわ」

「……君が？」

「うん！」

「掃除洗濯食事の支度。何から何まで自分でやるんだよ？ できるの？」

眼を細めて疑わしそうな表情で見る。

大変失礼だ。

「寄宿舎で掃除も洗濯もきちんとやっていたもの。あとは食事くらいでしょ。屋敷の厨房に入り浸ってお料理見ていたし、たまに手伝っていたのよ？ 大丈夫！」

「……」

「ま、マナのスープみたいに最初っから美味しくってわけにはいかないかもしれないけど」

「ふうん」

大変大変失礼だ。

「いいわ！ じゃあこれからアーヴィンの家に行って、何かとんでもなく美味しいものを作つてあげるわ！」

そうだ、それがいい。彼の家も見られるし一石二鳥だ。

ウキウキと席を立とうとするイルマを、アーヴィンが慌てて止める。

「何を言い出すんだ君は！」

「いいじゃないちよつとくらい」

「……もう、ほんとに、無茶苦茶だ」

呆れたように口をぽかんと開けて、最後は額に手を当てうつむいてしまった。必死で長衣カフタンの袖を引っ張るので、仕方なしに立ち上がりかけていた腰をもう一度下ろす。

「ちよつとくらいとかそんな問題じゃないだろ」

「だって、まだそんなに遅くないのに、宿に帰っても寝るだけなんだもん。つまらないじゃない？ だったらアーヴィンの家でお茶でもしてー」

「だ、か、ら、……はあ。……お茶ならここでもできるだろう」

内臓まで吐き出しそうなほど深いため息。よっぽど差し障りがあるのだろうか？ 怒ってはいないようなので、触れられたくないとか、そういった要素ではないようだ。

ただ、なんでか困っているようなので話を变えてあげることにする。

皿を下げてもらい、彼の提案通りお茶を頼むことにした。

「じゃあ、研究所のこと。何か面白いことはなかったの？」

「君らみたいに毎日波瀾万丈なんてことはないなあ。もともと地味な仕事だし。方程式を作っては壊しての繰り返しさ」

話題が変わったのをこれ幸いと思っているのか、普段より高いトーンでアーヴィンが話す。視線は宙を漂っている。

「困ったことは？」

「いや、環境はいいと思うよ。それぞれ個室も与えられているしね。ただ、前の人の資料が山のように残っていて、文献を拡げて作業ができないんだ。でもそんなときは共同の部屋に行けば広い机がある。ああ、いびきがなあ」

「いびき？」

「先輩なんだけどね。たまに共同部屋で昼寝をしてるんだ。まあ、徹夜で仕事をしていたりするから、上司は大目に見ているし気持ちわかるんだけど」

「上司っていうのはダモンさんよね。お会いしたわ。おなかに栄養が詰まってそうな方」

イルマの表現にアーヴィンも噴き出した。

「沙漠で遭難してもやっていけそうだって、本人も普段から言うてるよ」

「うんうん。で、いびきって何？」

自分がそらした話を引き戻す。

「悪い人じゃないんだけど、いびきが本当に大きくてね。壁が震えるんじゃないかってくらい」

「……すごいわね」

「思わず魔法でなんとかしてやろうと考えるくらいに」

「アーヴィンが!？」

魔法を使わないと決めた彼が、衝動的に杖を手にしてしまうほどのいびきとは。そこがすごい。

「あ、でも、人は魔力の周期がころころ変化するから、一度消してもすぐに戻っちゃうわよね」

音は波だ。

いびきを消すならまったく逆の波を魔法で作り上げ、ぶつけてやればいい。

だが問題があった。

生き物の魔力は常に変化する。波の大きさもすぐに変わり、少しでもずればせつかくの魔法も効かない。

「うん。そう。そうなんだ」

イルマの指摘にアーヴィンはふいと目をそらした。最後の台詞も尻すぼみである。

魔法を使わないという誓いを、破ってしまいそうになったのが後ろめたいのかもしれない。

その後もなんだかんだと言い合いながら、やがて二人は店を出た。もと来た道を並んで行く。

さつきまではなかったテーブルが通りまでせり出し、男たちが着飾った女を伴い杯を掲げていた。確かに騒がしくはあるが、これはこれでまた楽しそうだ。店の扉は大きく開かれて、奥の奥まで丸見えだった。

「へえ、たいした美人だ。どうだい？ 少し飲まないか？」

突然手首を掴まれた。反射的に投げ飛ばそうとして慌てて踏みとどまる。行きに張っていた防御の結界を、つい忘れていた。慣れてしまっていたのもあるが、気が抜けていた証拠だ。情けない。

酒臭い息に眉をひそめて腕を振りほどこうとしたところへ、女の声が入ってきた。

「おやめよ。まだ子どもじゃないか。それに杖持ちだ。あんたまた吹き飛ばされるよ」

彼女の言葉に男は慌てて手を離す。

「こりゃ、悪かったね」

「お嬢さんみたいな子がこんな時間にうろろろするもんじゃないよ。それともあれかい？ あいつの仲間かい？」

赤いドレスは胸をやたらと強調している。それを恥ずかしがるこ

となくぐつと張つて、腰へ手を当て彼女が尋ねた。顎で指された方を見ると、奥の方で男が一人、杖を杖立てに乗せて料理を食べている。

「……イルマ」

「ええ。アーヴィンは知らせを」

女は首を傾げ、男はイルマの視線の先をたどった。

そこには男の杖がある。魔石の色は緑。濃い、新緑の色をしている。普通の人間にはそう映るだけだ。しかし、イルマやアーヴィンには別のものが見えていた。

魔法使いは二年に一度、魔法学校へ出向きその二年間、どのような仕事を行ってきたか報告する義務があった。イルマや、アーヴィンなどは国の下で働いているので報告は免除されてはいるが、それでも魔法学校へ行かなくてはならなかった。

そこで杖に印をつけられるのだ。

その印は二年が有効期間で、それを過ぎると色を発する。魔力を制限することはできないが、その光を覆い隠すことも難しい。

魔法使いが悪事を働くことのないように、決められた制度だ。また、国内の魔法使いの所在を確認するための意味もあった。

印つきの杖を発見した場合は速やかに通報する。

こちらに気付かれては拙いと、目をそらそうとする。だが、視線が交わる。互いが互いの存在を確認した。

次の瞬間には杖の周りに魔力が集まる。

「爆破だ」

アーヴィンが叫ぶ。

「解！」

ほんの少しだけ、イルマの方が早かった。

フェンデルワースの街に、火柱が上がる。

それでも被害は驚くほど少ない。煙と埃が舞う中、さらにイルマは駆け出す。男の杖についた期限切れの印は一度気付けばそうそう見失うことはない。さらに方程式を解いて男に目印を放つ。いくつ

も、執拗に。

「イルマ、無茶はだめだ」

後ろでアーヴィンが叫ぶ。

「わかつてるわ。知らせをよろしく！」

そう叫び、足元に魔法を放つ。一時的に重力を無効化するものだ。同時に地面を強く蹴る。

体が空へ向かって飛び上がる。舞い上がるというような優雅なものではない。ナイフのように真っ直ぐ上へ向かった。ちょうどよい場所に到達したところで再び杖を振るう。イルマの体が難なく建物の屋根に着地した。長衣の裾がふわりと踊る。だがそれが下りないうちに、彼女は屋根の上を走り出していた。

男は爆発と同時に飛び上がり、先を行っている。

イルマは焦らず自分の周りに結界を準備する。

同時に複数の作業をすることには慣れていて。慣れさせられた。

宮廷魔法使いの訓練はかなり厳しいものだ。そして、イルマが一番得意とするものでもある。難しいことは考えず、ただ目の前の敵に向かう。常に一番の成績を収めていた。

だが、相手がどれほどのものかわからない。イルマよりもかなり年上のように見えた。実戦経験が高ければ侮れない相手となる。能力がわからない魔法使いに挑むときには慎重にならねば痛い目を見た。

男はすぐにイルマが追っていることに気付く。

フェンデルワースの建物は、斜めに尖った屋根を持つものと、平らなものとかちょうど半々ぐらいだった。足元に先ほどの魔法の効果があるから苦労はしていないが、距離を縮めるためにさらに新しい式を追加する。ぐんと、体が引っ張られるような感じがした。早さが増す。

イルマの役割は、応援が駆けつけるまで彼を見失わず、また周囲に被害を出さないことだ。

そう胸のうちに再確認しているところへ、前方に魔力が集中した。

先ほどから魔力の世界もこまめに視るようになっている。男が解いている方程式の形があまりにもよく知るもので、慌ててこちらも対応できる式を引っ張り出した。解き終わり、相手の発動に合わせて魔法を展開する。

夜空の星よりもひとときわ明るい火の玉が、イルマめがけて飛んできた。

だがそれは次々イルマが作り出した結界に飲まれて行く。向こうもそうなることがわかっていたのだろう。だが懲りずに同じことを繰り返した。範囲を広げて。

イルマは防戦一方になる。イルマの対象は男一人だ。しかし相手にとつては攻撃範囲はフェンデルワース全体だ。こちらの気をあちこちへ向けさせ、注意を拡散したいのだろう。

しかしそれも想定内だ。

必死に防戦していると、思われるのがいい。

火の玉を投げつけることに必死であれと願いながら別の新しい方程式を解き出す。相手の攻撃への対処はすでに自動で行われていた。昔アーヴィンが試していた方程式を応用したものだ。単調な攻撃には簡単に対応できる。火に反応して対応する基礎を作ってイルマの背後に展開していた。

今度はこちらからだと言で唇をぺろりと舐める。

準備はすぐに終わった。

イルマは追い続けられよい。だが、できれば、広くて見晴らしがいい、援護する魔法使いが介入しやすい場所に導くことができればなおよい。

少し行ったところに広場があった。そちらへ誘導したい。  
「解」  
フィニッシュ

男の周囲に魔法を放つ。

彼の左肩で光が弾ける。当然ながら防御の結界に阻まれ男は無傷だ。しかし、衝撃までは抑えきれずに横へ飛ばされる。

だが敵もなかなかしぶとい。すぐに立ち直りまた走り出す。

印は期限切れを知らせるだけのものだ。何年放置していたのかなどはわからない。

だが、これだけ必死に逃げるのだから、かなりの年月なのだろう。そんな男がこのフェンデルワースで何をしていたのか。

気を抜くなど己にささやきかけ、光と衝撃の手は緩めない。わざと左右に振り、しかも命中させたくてやっているが命中させられないといった風に演出した。

光は応援の魔法使いに現在地を気付かせやすくするためでもある。そこまで考えて、拙いと思った。

最初に明るい火の玉を使ったのは男の方だ。火の、周囲を燃やすという特質ばかりに目が行っていた。

ああ。やはり自分は見習いだ。愚か者めとののしる。

なぜ不正魔法使いが一人だなんて思っていたのだろう。これは、罠だ。

そう覚悟したとき、隣の少し高い建物からアーヴィンの声が聞こえた。

「この先に結界が張られている！ そこまで行かせるな！」

やはり、と唇を噛み、追うことをやめて捕らえるための方程式を解き始めた。だが、男もこちらの変化に気付いてさらに足を速める。

魔力の世界へ切り替えると、前方に大きな結界が見える。ただ、イルマにはそれがこのフェンデルワースに張られた町全体を守るものか、男が何かたくらむためか、または自分が逃げ込むために特別に張った結界かは見分けがつかなかった。

そういつた視ることはアーヴィンの方が格段上だ。  
「解！」  
ファイリス

男の足元へ網状の魔力の塊を投げつける。その直前に男の前方へ圏を五つ。おかげで彼は足をもつれさせ、真つ逆さまに落ちて行く。三階建ての建物から、あんな風に無防備に落ちれば頭を打って死んでしまうだろう。すぐさま彼の周りに防御の結界を三重に張る。

そのまま自分も宙へ躍り出た。



速度を緩めることなく着地する直前に衝撃を吸収する魔法を張る。もがく男の手には杖がなかった。少し先に、離れた場所にある。チャンスだ。

今なら反撃もない。

素早く捕縛の魔法を彼へ向けて解き放つ。だがそこで信じられないことが起こった。

杖が自ら男の手に飛んだ。

しまったと思ったときには遅い。

イルマがこの場へ駆けつけたときには、その方程式は完成していたのだろう。杖が手から離れているのも、油断させるためだ。相手の方が何倍も上手だったのだ。

杖を手に入れ、男はイルマへ攻撃を仕掛ける。

こちらは捕縛の魔法のために完全に無防備だった。来るべき衝撃に備えてぐつと目をつむり両腕で頭を守る。

だが、それはなかった。

代わりに男のうめき声が聞こえる。

すぐに目を開くと、男の傍らによく知る人物が立っていた。

榛色の髪の毛が、夜風に揺られている。

生成色の外套が夜の中で浮き立つように見えた。

「せんせい師匠!？」

足下で気を失っている男を見下ろしていたホレスが、弾けるように顔を上げた。駆け寄ろうと足を一步前へ踏み出す。

だがそれ以上に素早くホレスがこちらへ近づいた。

どうしてここにと尋ねる前に、少しだけかんでイルマを抱きしめた。

まるでサミュエルのような自然な抱擁に、固まる。

あまりこんなことはしない人なので、驚いてしまった。

「よかった。怪我はないようですね」

ほっと深く息を吐きながら言う。

「えと、はい。大丈夫です」

最後まで、ホレスが守ってくれたのだらう。こちらの戸惑いに気付いていないのか、彼はイルマを放そうとしない。

「帰りが遅いと思っていたところに火柱が上がったので」

宿はあの場所からそう遠くない。この短時間で駆けつけることも可能だっただろう。

少し広めの道には、両脇に二階か三階建ての住宅が並んでいる。騒ぎを聞きつけて窓がいくつが開かれていた。

細い路地からアーヴィンが現れる。ホレスの肩越しに彼と目が合った。

勢いよく飛び出してきた彼は、イルマの姿を見つけると一度足を止めた。途中の、倒れている男に目をやり、ゆっくりと歩き出す。

「二人とも怪我はないようですね」

その足音に気付いてホレスはようやくイルマを開放して振り返った。

遠くから杖の先に明かりを灯した魔法使いが数人やってくる。

「ここの処理は私がしておきましょう。二人はもう戻りなさい」

「いえ、最後まで」

「彼らに引き渡して少し書類を書かねばなりません。走り回って疲れたでしょう。レケン君。彼女をお願いできますか？」

アーヴィンは黙ったまま頷く。

「でも……」

「こついった処理には私の方が慣れていますから。もちろん、手柄を奪う気はありませんよ」

そんなことはどうでもいいのだが、結局イルマも頷いてアーヴィンと宿へ向かった。

なんだか変な気分だ。

アーヴィンとも、その後は一言も話さずに宿屋の前で別れを告げる。

捕らえた魔法使いが脱走したとの知らせが入ったのは、イルマた

ちが次の町へ転移の陣を使った後だった。

### 第三章 武装都市テイルム1

沙漠化の原因は主に三つある。

一つ、洪水や雨などによる肥沃な土壌の流出。これにより作物が育ちにくくなる。

一つ、土壌の塩性化。地下水などが地表まで現れ、水分が蒸発する。塩類だけが残り、これが繰り返されることによって作物が育つ土壌ではなくなる。

一つ、飛砂。すでに沙漠化した土地から砂が入り込むことよつて、沙漠が徐々に拡大していくのだ。

このうち、一つ目と二つ目の過程については現在は認められていない。すでにあの土地は乾ききつている。三つ目は常に見られていることなので、それを防ぐ魔法方程式を再三施している。

だが、効果は見られなかった。

「魔力が枯れているのね」

イルマは第三の、魔力の目で世界を見て深く息を吐いた。

初日は午後からカメルという沙漠での馬のようなものに乗って、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の少し入ったところを軽く見て回つた。沙漠の砂の色と似たような短い体毛で、背中には小さなこぶがある。そこに脂肪がぎゅっと詰まってこの生物には厳しい場所でも耐えられるそうだ。沙漠の砂から目を護るために、恐ろしいほどの睫毛が飛び出していた。それがちよつと可愛い。頭部は馬に比べれば格段に小さかった。

馬にも乗ったことがないというアーヴィンは、イルマと同じカメルだ。

「馬に乗れないだど!？」

「フェンデルワースに住んでいるんだつたら、馬なんか必要ないじゃない。私だつて家に馬がいなけりゃ練習なんて絶対してないもの。別におかしいことじゃないわ」

「わかつてる。俺が言ってるのはそこじゃない。お前とそいつが一緒に乗るって言うのに反対しているだけだ」

「じゃあ、兄さんがアーヴィンと一緒にカメルね」

「問題外」

「お断りします」

二人がほぼ同時に答え、サミュエルはアーヴィンをギリギリと歯ぎしりしながら睨み付ける。

「男と一緒にカメルなんて、ぜーったい嫌だ」

「でしょう？ アーヴィンの魔法は私がやるんだから、実際一緒に乗っている方が便利なのよ。ほら、子どもみたいに文句言っていないでさっさと乗って！」

正論に追い立てられて、サミュエルは不機嫌なまま午後の視察を終える。ホレスはそんな彼らをにこにこ眺めているだけだ。

「アーヴィン大丈夫？」

途中から彼の息づかいが荒いのが気になった。

下りてみると、顔色もこころなし。

「酔ったのか？」

サミュエルも尋ねるが、アーヴィンは頭を振る。

「こんなに、魔力が崩れているとは思わなくて」

「ああ、魔力の世界に酔ったのね」

見えている物すべてに力の大小はあれども、魔力が宿っている。

だが、このニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の魔力の欠落はすさまじかった。あちこちに大きく暗い穴が空いているように見える。

実際に見える世界と、魔力の世界の齟齬から、感覚の違いに酔うことがたまにある。

「アーヴィンはよく見える方なんです」

心配そうなホレスに言うと、彼は頷いて今日は早めに休ましましょうとテイルムの宿に戻ることにした。

ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の端からテイルムまでは普通に行けば一刻ほど。魔法を使うとそれが四分の一になる。カメルで街中は

行けないので、街の端で借りていたものを返して、残りは徒歩だ。ティルムはモンズ山脈の麓にあり、オキデス帝国からの侵入を一番警戒する場所にあった。初めは要塞だったのが、次第に街となったのだ。

山脈の、他の場所は難所が多く、山越えは難しい。

侵攻は常にここから始まっていた。山脈の麓には、百年以上も前から高い防壁が築かれ、等間隔に置かれた砦に兵士と魔法使いが詰める。

街もぐるりと堀に囲まれている。

レグヌス王国に徴兵制はなく、兵士を国が雇った。そして雇われた兵士は、まず初めに、貴族であろうが平民だろうがこのティルムに送られる。そうやって各地から人が集まり、王都レグヌスセスやフエンデルワースとはまた違った、雑然とした活気を持つ特有の空気が全体を覆うことになった。

イルマはティルムに来るのは二度目。だが、一度目は他にも数人同行者がおり、予定がぎつちり組まれていた。見物も、父親やサミュエルに土産を買う暇すらなかった。

一日目はアーヴィンの体調も悪いしと大人しくしていたが、二日目、アーヴィンの調子を思いやり、午前中で視察をやめるとしてもたつてもいられなくなった。

「街の中なら平気でしよう?」

と、無理矢理彼を連れ出した。

「兵士が多い。気性の荒いやつらもいる。気をつける、騒ぎは起こすなよ?」

一階の食堂で昼間から酒を飲んでいたサミュエルの注意を背中に聞きながら、イルマは外へ飛び出す。

その後をアーヴィンが続く。これで追いかけてこないのかと。理不尽ではあるが、叱責が飛ぶのだ。なぜ追いかけてこないのかと。理不尽ではあるが、何度も繰り返される。ある意味様式美だ。

その辺りは彼も心得たものであった。

実際、二ヒ・ラルゲ 荒れた土地 で酔ったのも一日目だけで、今日は意識して見ないようにしていたため、彼の状態もよい。

すたすたと前に行くイルマにアーヴィンが声をかける。

「僕の体調の心配をしてくれているなら、あんまりさっさと行かないでくれ」

「うん、ごめんごめん」

反省しているように見えないのもいつも通りだ。だがそこで、イルマは膝を折る。何がと、思う暇もなく、アーヴィンの体も揺れた。ティルムの人々も、一様に腰を低くし立ち止まる。

「地震だ！」

誰かが叫んだ。イルマは地面に手をつき、杖でなんとか体のバランスと取った。そうやってすぐに彼の側へ寄る。

揺れはすぐに収まった。

「びっくり」

「うん、本当に多いね」

道を行く人々は、まるで直前の地震など気にする様子もなく、自分の目的を果たすため動き出している。二人はさすがにしばらくそこへ留まった。

ティルムでは最近地震がよく起こるそうだ。地質学者や魔法使いたちが原因を調べているが、よくわかっていない。この近くには火山も、地震が起こる原因も見られないため、謎のままにされていた。街の人々も、すっかりこの地震に慣れている。多い日は二度あったりするそうだ。

王都では地震は滅多に起こらない。二人とも慣れないせいで心臓がどきどきと波打つ。ようやく落ち着いて歩き出したのは、少し経ってからだ。

「それにしても、せんせい師匠がティルムに詰めていたなんて知らなかったわ」

イルマは不思議そうに首を傾げて山を見る。西に黒々と映るどこまでも高い山脈は、人を拒む。魔法も使えないのに、それを越えて

までやってくるオキデスの兵士たちの執念に恐ろしさも覚えた。

レグヌス王国を手に入れば魔法を自由に使うことができる。そんな風に他国には思われているらしい。

事実、時折魔法使いが行方不明になる事件が起きている。それもこの山脈の付近で多い。

「どんなお仕事していたのかしら」

「宮廷魔法使いなんだから、魔法使いの取りまとめとかだろう。巡回に組み込まれたりはずすがにしないだろうし」

「そうよね」

南に市場があると聞いていたので、アーヴィンの腕を掴むと人混みを上手にすり抜けて進む。

「新しい街に來ると、探検したくならない？」

「別に？」

わくわくしていた気持ちが一気に萎む。

いつもこうだ。彼はどうしてこう、人の気持ちを萎えさせるのが上手いのか。

「興味があることなら進んでやるけど、今は別に」

イルマの気配を察してか、フォローとも言えないフォローをする。「つまり、私と街をぶらぶらするのは全然興味ないってわけね！

いいわよ。来る気がないなら帰れば」

「二人で出かけるところを目撃されて、一人で帰ったら君の兄さんにぼこぼこにされるだろう」

「されればいいじゃない！」

もう知らないんだから、と手を振りほどいて先へ行く。さらに早足で人の隙間を縫う。

いつもいつもこのパターンだ。誘わなければアーヴィンは来ない。誘えば来るが、イヤイヤだ。たまには、もう少し反応が違っていてもいいと思うのに。本当に嫌なら、彼は断る。そういう人だ。だから、本当に嫌ではないんだと自分で勝手に決めつけていた。

でも、無性に腹が立つ。誘うのはいつもイルマ。拒否されないと



無理矢理連れ出して、文句を言われる。

だが、少し進んで踵を返した。

アーヴィンは見え過ぎる。それで体調を崩して今日の午後も休みになっていたのだ。連れ出したのは自分だし、ここで彼を放つていくのはいくらなんでもひどい。

どうしてそれを最初に考えないのかと言われれば、イルマがイルマであるからとしか言いようがない。

とにかく、すぐに心配になって戻ることにした。

この思いつきだけで行動する癖を本当にどうにかしなければ、いつまで経っても落ち着きなんてものは得られない。

ため息をついたところに前方で男の声がした。何か揉めている。

ちょうどアーヴィンと別れた辺りで、嫌な予感に走り出す。

「杖を持つて行くせにとつさに魔法も使えないとは。まさか、それは偽物なのか？ それならば重罪だ！」

人の輪ができていた。その層が厚く、中心は見えない。声しか聞こえなかった。低いが、どこか頭にキンと響く嫌な声だ。

そして、杖を持つて魔法を使わない人を、イルマは知っている。

### 第三章 武装都市テイルム2

そして、杖を持つて魔法を使わない人を、イルマは知っている。「卑しい薄き血風情ヒブリダが魔法使いになろうなどと思うからこうなるのだ」

カツと体内の血が一瞬で沸き上がる。

それは、肌や髪、目の色が濃い、貴族の色をしていない魔法使いを貶める言葉だ。魔力が貴族より少なく生まれた者を、侮蔑するときに使われる代表的なものだった。

「通してください」

魔法で無理矢理道を開きたいが、それをなんとか我慢して、人の隙間に身を滑らせ中心へ向かう。

「すみませんでした」

抑揚に欠けた、よく知っている声が謝る。まったくすまなそうに聞こえない、煽っているのかと思えてしまう彼の言葉。

ようやくちらりと見えた先に、アーヴィンがいた。思わず舌打ちする。

男が三人。かがんでいる彼の側に立っている。杖持ちが一人と、腰に剣を差しているのが二人。どちらもそれなりの衣装を身につけている。貴族だ。まあ薄き血ヒブリダなどと言って己の優位を保とうとする輩が貴族でないはずがない。

もう一度舌打ちをする。

アーヴィンは右手を胸の前にあてていた。何かを抱えているようだ。左手の杖は魔力を帯びてもいない。相変わらずの無防備な状態だった。

男が杖を振り上げる。魔力の集まる。

反射的に発動の呪文を唱えていた。

「解ファイニクス！」

ざっと、人垣が割れる。現れたイルマへ四人の視線が集まる。彼

は、険しい表情を見せる。

そんな顔をするなら魔法を使えばいいのに。

もちろん、イルマの使った方程式は防御の結界で、相手を攻撃するものではない。こちらから何かする気はない。

軽い口笛が響く。

剣をぶら下げた一人が嫌な笑みを浮かべながら吹いたものだ。

「何があつたの？」

イルマのよく通る声は、辺りに響く。ことの成り行きを見ていた群衆の目が、現れた彼女に惹きつけられた。惹きつけて、放さないだけの容貌をしている。

だが、問いに答えはない。

仕方なく、相手をする。

「彼が何か？」

明らかに貴族とわかるイルマの髪や肌の色にも臆さず、そのような態度を取るのは、彼らも位が高い証拠だ。しかし、フェンデルワースの出ではない。年はサミュエルとそう変わらないだろう。ならばイルマが知っていて当然だ。そして、イルマを知っていて当然だった。

だが、見たことのない人物だった。もちろん、魔法使いでない二人もだ。

となるとゲナカスペキリ。ティルムにいるということはゲナカ。ティルムに居を持つ貴族の御曹司という可能性も捨てられない。

どれにしる、兄に騒ぎを起こすなど釘を刺された。これ以上はまずい。

「何か？ だと？ お前はこいつの連れか？」

中でも一番下っ端であろう赤毛の男が一步前が出る。身長差を利用して、威圧するように見下ろしてくるが、そんなものに構うはずがない。平然と質問を繰り返す。

「ええ。謝っていたようだけど、彼があなたたちに何をしたのかしら？」

イルマの様子に不満だったのだろうか。

男はさらに声を荒げた。

「あいつは突然俺らの足下へ飛び込んできて、ぶつかりやがった」

「あら、危ないわね。でも、怪我がなくてよかったわ」

イルマがにっこり笑うと、もう一人取り巻きが言葉を重ねる。

「怪我は、な」

では何が欠けたのだ。

上から下まで丁寧に相手を見る。値踏みするように取られるだろうと計算して。

早く名乗り上げてくれないだろうか。家柄によっては対応に違いが出てくる。つまり、こてんぱんにのしているか、それともある程度気を遣わなければならぬか。

慎重に対応しなければならぬような部類にこの顔はいなかった。いくら廃れているとはいえ、六貴族の一員であるイルマのことを知らないのだから、慎重に対応する必要はないことはすでにわかっている。

今後のお役目に差し支えがない程度にしたい。

「その阿呆の杖がジェラルドの剣に当たったんだ。高価な鞘に傷がついた」

仕方なく彼が示す先を見ると、確かに装飾過多な剣がある。実際戦場で使い物になるのかと聞きたくなるほど、金銀宝石がちりばめられていた。もちろん、杖持ちの彼の剣だ。三人の中で主導権を握っているのが彼なのだろう。

「ドゥールス材は堅いからね。魔法使いならそれくらい知っているでしょう?」

杖は、時にはそれで剣を受けることもできるほど堅い木材で作られている。衝撃には弱いが、そこはそれぞれが魔法で補っていた。

北の厳しい寒さの中で育ったものが杖の材料としてより品質がよい。「お前らには一生かかっても払えないほどの値段だぞ。どうしてくれる!」

剣の持ち主は成り行きをニヤニヤと眺めていた。

正直、余裕で払えるのだが、まあ父に迷惑がかかるのでそれはあえて提案しない。父にだけならまだしも、周りへ余波がとんでもなく広がりそうであるべく大げさにはしたくない。

彼らの視線のいやらしさから、要求はだいたい予想がつくが、それを面と向かって言われたら今度は自分が切れてしまいそうで悩ましい。

しっかりと前を合わせた外套のせいで内側の、宮廷騎士見習いの銅色の印が見えていないのが悔やまれる。少しは相手も考えただろうに。

「イルマ」

背後で短く呼ぶ声がする。

「大丈夫よ」

小声で返す。

彼が何を言いたいのか。わかり過ぎるほどわかっている。

「おい！ 聞いているのか！」

赤毛が吠える。

「こんな近くでそんな大声で話さなくたって十分聞こえているわ。それで？ ぶつかったからとつさに魔法を使ったの？ たかが、ぶつかった程度で」

「たかが、だと！？ 今までの話を聞いていなかったのか？ この、高価な」

「飾り物が傷ついたのは聞こえたわよ。私が訊いているのは、単にぶつかっただけで思わず魔法を使ったのかと訊いているの。あなたどこの出？ どんな教育を受けてきたの？」

魔法使いの中には、出身校にこだわる者がいる。というか、ほとんどの魔法使いが実際こだわっている。貴族は特に、まずはなにによりフェンデルワース。それしか認めないという傾向にあった。だが、頭が足りずに競争率の高いフェンデルワースを落とされる者も多数いる。

彼も、そういった劣等感を抱いていた立場にあったのだろう。親に言われ続けたのかもしれない。イルマの問いかけにさっと顔色を変えた。

「飾り物だと！？ 貴様、愚弄するののか」

「私はただ、もし道ですれ違いざまぶつかった人間に、魔法で攻撃するのをよしとする学校があるのなら問題だと思って訊いただけよ違う？」

それには魔法使いの男もぐつと黙る。

だが、赤毛とは別のもう一人　こちらは金髪だが、話を進める。

「その小僧がジェラルドの剣に傷をつけたと言っているんだ。話をすり替えるな！」

よい連携である。こういった言いがかりに慣れているのだろうか。「これはジェラルドのお父上が、記念として送ったものだ。この世に二つとない一品なんだぞ！」

何の記念かと訊いて見たい衝動にかられる。卒業記念ならば、その後数年まったく実戦で使われていなかったことになる。

ティルムにいるのも、どうせ三男四男の穀潰しを、その根性をたき直すために兵士として送り出したからだろう。そこから騎士になればめっけもの。魔法使いはそれなりに受容もある。ただ、これほど尊大な人間が、平民出の魔法使いと上手くやっていけるとは思わない。結局いざこざを起こして首になるのが目に見えている。引導を渡してやるのも優しさかもしれないあと、そんなことを考えていた。

イルマが上の空なのを敏感に察知したのだろう。勢いを盛り返した赤毛がまた一歩前に出る。

「どうしてくれる！」

イルマから引き出したい言葉が見え過ぎて、言う気にならない。正直どうもする気がない。

だが、このままではらちが明かないので、仕方なしに口にする。

ただ、とんでもなく偉そうに、上から目線で。喉が無防備にさらされるほど顎を上へ向けて。

「どうして欲しいの？」

三人はむっと顔を引きつらせる。

だが、待ちに待った言葉に、赤毛が我慢できずに応じた。

「どうするジェラルド」

目の前にぶら下げられた餌に、すぐ食いついた彼を少しだけ迷惑そうに見やるが、だが、ジェラルドも笑ってイルマを見る。下品な笑い方だ。品性が表れ過ぎだ。

「これから飲み直そうと思っていたところだ。付き合え」

「ごめんだわ」

「何い!?!」

イルマのにべもない返答に、男たちは色めき立つ。

「弁償するとも言うのか」

笑う。

形容するならばからからと。弾けるように笑った。

「弁償も何も。あなたたち、初期の訓練でテイルムに来ているのでしょう? 違う?」

やはり違わないらしい。三人はイルマを睨み付けたまま動かない。

「それならそんな傷、すぐに気にならなくなるわ」

現にイルマの剣の鞘には、あちこち傷がついている。少々がさつであるからというのもあるが、これが普通だ。

「それとも、鞘と同じで剣もお飾りなのかしら?」

「何をっ!」

「女だと思って甘く見ておればっ!」

男たちは怒りに顔を赤くし、柄に手をやる。

ここまで来れば彼らは嫌でも名乗る。

計画通りに進んだと内心ほくそ笑むが、そこで計算違いが生じた。ジェラルドが言っただけはいけない言葉を口に出してしまったのだ。

「女のくせに生意気にも佩刀しおって!」

かちんと、頭の中のどこかで何かを叩く音がした。我慢だったか、忍耐だったか。計画、かもしれない。叩かれたそれらはあつという間に碎け散る。

「イルマ！」

「何よ！」

アーヴィンが選びに選んだであろう言葉をイルマの背に投げた。

「魔法はだめだ」

「わかってるわよ。私弱い者いじめ嫌いだもん」

言いながら少し冷静になる。危ない。思い切り勢いで吹き飛ばすところだった。それじゃあジェラルドと変わらない。

「やめておくなら今のうちよ？」

「それはこちらの台詞だ！」

ジェラルドが剣を抜いた。飾りではなかったようだ。刀身が太陽を受けて光る。

だが、イルマは動かない。名前を、まだ得ていない。この後どう収めるかが左右される。応戦する前に絶対に手に入れておきたい。

「どうした。怖くなったか？」

対峙して、少しの震えも感じられない。たいした使い手ではなかった。剣を抜かずにどこまで対応できるか、考える。地の利を生かして戦えるというのならいくらでも方法はあるが、群衆に囲まれ、彼らはイルマの勝利のための逃走を許しはしないだろう。

軽いため息について剣の柄に手をかけた。

そこへ、この場に似つかわしくない女たちの笑い声が聞こえた。嬌声と言ってもいいだろう。それが群衆を割り、中央のイルマたちに近づいて来る。

「おつとごめんね。ここで待っていてくれるかな」

知っている声だ。十人以上の女性に囲まれて、男が現れる。ゆったりとした動きで、すぎる女たちの手をするりと抜ける。

インプロブ家の家宝である透明で大きな石の指輪が、太陽の光に煌めく。



「君ら、なんて名前なの？」

ジェラルドの取り巻き二人の間に立ち、その肩をがっしりと掴んで離さない サミュエルだ。

「なーんか見たことある顔だね。君らどこの子？ あの子の名前なんてえの？」

口調はあくまで軽いが、兄の指が二人の肩に食い込んでいた。痛みはその手から逃れようとしているらしいが、少しでも動けばさらなる激痛が襲う。

前を向いたまま、微動だにできないようだ。

「ねえ、俺の質問に答えてよ」

「……ジェラルド……ディーウエ」

金髪の方が絞り出すように応えた。

「ディーウエ、ディーウエか。そんなのたしか、うちの傍流にいたね。スベキリだったかな？」

ジェラルドたちがぎょっとした顔をする。

「まあ、イルマ・インプロブのことも知らないような貴族なんざあ、どうしようがたいした問題にならないだろう」

インプロブの名を聞いて、さらに顔色が青くなる。

サミュエルと、イルマを交互に見つめる。イルマはどこまでも馬鹿にした笑顔で応対してやった。

顔が朱に染まる。青くなったり赤くなったり忙しい男だ。

だが、どう考えても拙い状況だと悟ったのだろう。

口の中で何事かをつぶやくと、ジェラルドは二人を置いてその場を離れた。群衆に文句をつけながら、遠ざかって行く。

それをサミュエルが見送る。が、そこへまた、大地が揺れた。

ここでは日常となった地鳴りにサミュエルがバランスを崩す。手が彼らの肩から離れる。

今がチャンスとばかりに、二人は自分を置いて逃げた魔法使いの後を追う。

群衆も地鳴りに気を取られ、また派手な事態にならないと知り、

人の流れに消えていった。インプロブ家との囁きがこぼれてくる程度だ。

「普通に訊けば教えてくれるだろうに」

「教えてつて言うのが嫌だったのよ！」

一瞬でも下手に出ることが我慢ならなかったのだ。

「それで切れてちゃ意味がないだろう。馬鹿」

そう言つてサミュエルはイルマの頭をくしゃりと撫でた。子ども扱いに普段なら憤慨するところだが、今はそうされても仕方ないと肩を落とす。

「イルマ、すまない」

「ううん。私も置いていってごめんね」

イルマが悪いのだと、サミュエルを牽制する。彼の形のよい眉が跳ね上がった。

「それで何してたの？」

「……彼らが猫を踏みそうになっていたから」

アーヴィンの腕の中には小さな白い生き物が丸まっていた。微かに動いている。

「大丈夫だったの？」

「宿に戻つて手当てをすれば」

「……そう。よかった。今日はもう帰りましょう」

これだけ騒ぎを起こして注目された中、街をうるつくのは面倒なことになりそうだ。逆恨みで襲撃なんてことになつても困る。まあ、あの動揺の仕方ではそれも無いとは思つが、このあと控えていることを考えると面倒ごとは避けておくべきだった。

サミュエルも引き連れていた女性たちに別れの言葉を告げる。彼女たちは名残惜しそうにこちらをちらちら振り返りながらもその場から離れていった。

「何よあれ」

「ん？ 彼女たち？ ちょっと歩いてたら声かけられてね。見る間に人数が膨らんだんだ」

ふつんと納得して見せるが、どうせ自分から声をかけていったのだろう。宿からここまでの短い距離でよくもまああれだけの人数が寄ってくるものだ。

アーヴィンは白い猫を心配そうに撫でてているが、あまり反応はない。

「怪我しちゃったのかな？ 魔法でぱっと治せればいいんだけどね」

生物に魔法で治療を施すのは今の技術では難しい。無機物と違って有機物、特に複雑な器官を持つ生物は魔力の値が刻一刻と変化する。それに合わせて治療する側の魔力の量も加減しなければならぬ。瞬間的な判断は経験がものを言う。魔法医はかなり難しい仕事だった。

その生物の魔力の変化に合わせて自動的に魔力の放出量を変化させる方程式は、高い懸賞金がかけられている。変数を求める変数の方程式だ。たくさんの方程式研究家はその難題に挑み、破れていた。

例の、アーヴィンの先輩のいびきも、この方程式があれば解決するのだが、難しいだろう。いびきの原因を探った方がずっと現実的だ。それほどの方程式ものだった。

### 第三章 武装都市テイルム3

宿は三階建てで、イルマの部屋は一番東の端にあった。窓の外には宿の中庭が見える。宿の主人の趣味だとかで、小さな畑が作られていた。そこで採れた野菜が、朝食に並んでいた。

ベッドの上に寝転んで、そうだと跳ね起きる。

フェンデルワースでアーヴィンにもらった物を、まだ見ていなかった。ゆっくり開ける暇がなかったのだ。

鞆の中から紙袋を引っ張り出すと、両手に載るくらいの木箱が、赤い包装紙に包まれて転がり出る。丁寧に紙をはがして蓋を開けると、中から水晶が出て来た。

丸い銀の枠に、親指ほどの大きさがある透明の水晶がはめ込まれている。銀の土台には、旅の安全を祈る文様が彫られていた。一般的な旅の無事を願って送られるペンダントだ。茶色の皮の紐がつけられている。

早速結ぶと、備え付けの姿見の前でいろんな角度を試してみる。

旅の間、肌身離さずつけていれば災厄から旅人を護ると言われているのだ。

アーヴィンの気遣いが嬉しくて、先ほどの自分の強引さがまた、悔やまれる。

猫の様子を見たいと言い訳して、お礼を言いに行こう。

そう決めて部屋を出たが、二つ先の彼の部屋をノックしても、出て来ない。部屋に戻って何気なく窓の外に目をやると、庭の隅でかがんでいる彼を見つけた。身を乗り出して声をかけようと思ったが、途中でやめる。まさか、と思い階段を駆け下りて彼の後ろへそっと忍び寄る。

アーヴィンは何か必死で魔法を使っていた。

彼が魔法を使う。その事態にイルマは眉をひそめる。距離があるので何をしているのか、わからなかった。だが、すぐそれはやんだ。

彼の腕から真つ白な子猫が顔を出して、にゃんと鳴く。

「アーヴィン！」

声をかけると、こちらが反対に驚くくらい、彼は動揺した。

一度尻餅をついて、慌てて立ち上がる。

「イルマ？ 何をしてるんだ」

「それはこつちの台詞よ。窓から見えたから来たの。庭の隅でかかんでるんだもん、まさか猫ちゃんのお墓を掘ってるのかと思ったわ。でもよかった、とっても元気そう」

彼の腕からふわふわの毛玉をかつさらうと、その頭をゆっくり撫でる。

「あ、ああ。ほとんど怪我也なかったみたいだから、もう放そうかと思って……」

「えーっ！ そんなの無責任よ。拾ってきたんだから最後まで面倒みないと」

顎の下を撫でてやると、気持ちよさそうに目を細めた。瞳は茶色い。

「だけど、ここはフェンデルワースじゃないし」

「帰りも転移陣でひとつ飛びよ。一人暮らしなんですよ。いいじゃない。おうちに帰ったらお出迎えしてくれるかもよ？」

「猫は犬と違って物を引つ掻くから……」

「そんなときこそ魔法を使えばいいでしょ。自分でするのが嫌なら私がやってあげるわよ？ もちろん、方程式を組むのはあなたね」

最後にひと撫ですると、アーヴィンの腕に子猫を渡す。

「飼い方がわからないなら私が指導するわ」

「君が？」

「ええ。昔から、拾ってくるのが得意だったの」

「それは、……心強い」

猫の食べ物をもらうために二人は揃って厨房へ向かった。

夕食の席は和やかに始まった。

「もっつのすごく可愛いんです！」

今はアーヴィンの部屋で寝ている子猫について熱く語る。その過程で騒ぎを起こしたことがばれてしまったが、おとがめはなかった。サミュエルがフォローを入れてくれたのが大きい。

「それで、レケン君が飼うんですか？」

「成り行きで」

「嫌ならいいのよ！ 私が引き取るわ」

「……嫌じゃないよ」

食事に呼ばれるまで、彼は部屋を荒らされなかったための魔法方程式を机の上でこねくり回し、イルマは名前を考えた。

「ニクスにしたんです」

「確か、雪と言う意味だったね」

「そうです。野良とは思えないほどきれいな白だったから」

「私も後で見せてもらいましょう」

ホレスの言葉に飼い主であるアーヴィンより先にイルマが頷く。

「ぜひ！ 撫でてあげてください」

いつも穏やかなホレスだが、今日はさらに機嫌がよい。

「師匠せんせいもご友人にお会いできたんですか？」

サミュエルも思ったのだろう、そう聞くとホレスはにつこり笑って頷いた。

「皆元気そうだったよ」

久しぶりに楽しい時を過ごせたに違いない。

「そう、それで申し訳ないんだが、少し用事ができてしまっただね。」

二人はついてきなさい。レケン君は明日からティルムで二、三日待っていてもらえませんか」

来た。

「……飛び入りのお仕事ですか？」

「そうですね。街の庁舎に連絡が入ってまして。もし時間をもてあますようでしたら、壁の見学ができるように手配しましょうか？」

私の友人に案内を頼むこともできます」

アーヴィンは少し考えた風だったが首を振る。

「沙漠に行かないのなら、大人しく部屋で方程式を練っています」

師匠せんせいは、お願いしますと頷く。

さすがだと、イルマは内心ほっとする。イルマではこっちは上手く  
いかない。些細な嘘も、ことごとくアーヴィンに見破られる。

「二、三日なら、その頃には方程式も完成しているだろうし、帰っ  
て来たら頼むね」

「ええ。喜んで」

突然こちらへ話を振られて、そう答えるのが精一杯だった。正直  
そんなに早く帰って来られるとは思わない。初めから、三日経った  
ところで他の人間がアーヴィンをフェンデルワースへ送り返すよう  
になっている。彼の部屋へ魔法をかけることができなくなってしまう  
うが、それは仕方がない。彼が自らの禁を破り、自分で魔法を使う  
ことを祈るばかりだ。

夕食後、ニクスとひとしきり遊んで早めに眠った。

明日からのことを思うと、なんだかどきどきして、眠りが浅い。

その浅い眠りの中で、自分の側に気配を感じた。それを現実だと  
認識するや否や、意識が急速に浮上する。

目を閉じたまま全神経を部屋の中へ注ぐ。間違いなく誰かがいる。  
物音一つ立てずにいるが、足下の方に気配がある。

指先を気付かれないようそっと動かし、ベッドの脇に立てかけて  
ある杖へ手を伸ばす。

あと少しで触れるというところで、口と、手を押さえつけられた。  
閉じていた目を開く。窓には遮光性の高いカーテンがあり、部屋  
の中は真っ暗だった。

反射的に腕を取り、相手をはねのけようとしたところに、意外な  
囁きが降ってきた。

「イルマ、僕だ」

押さえつけられている口の中で、驚きの声を上げる。くぐもった  
それに、彼はさらに言葉を重ねた。

「大声を出さないでくれ。隣に気付かれたくない」

隣の部屋にはサミュエルがいる。この状況で声を上げれば間違いなく駆け込んで来るだろう。そして、誤解され、アーヴィンがとんでもない目に遭うのだ。

誤解される。

それを考えると、急に顔が熱くなった。

イルマが大人しくなり、アーヴィンはもう一度念を押した。今度は素直に頷く。

彼の手が離れ、大きく息を吸うとゆっくり体を起こす。毛布を胸元へかき寄せて、ベッドの脇に立つ彼の方を向いた。暗闇に目が慣れ、カーテンの隙間から漏れる光でだいたいがわかるほどにはなったが、細かい表情までは読み取れない。

暗くてよかつたと、内心安堵のため息を漏らす。

「何かあったの？」

なければ、こんな風に常識知らずな方法をアーヴィンがとることはない。

彼の青い瞳に、月明かりが映りこむ。

一年前までの、イルマより背が低くて、人付き合いが苦手ななんとなく守らねばならないと思っただ彼の面影が消え去る。

イルマを押さえ込んだ腕の力強さを思い出し、胸の辺りがもやもやと疼く。

いつの間にこんな風にすっかりした、大人になってしまったのだろう。

自分の知らないアーヴィン・レケンに戸惑いを感じる。

「アーヴィン？」

いつまで経つても黙り込んだままの彼を、イルマは再び促した。口から出た言葉の優しさに、自分で驚く。

それは相手にも伝わったのだろう。少し目を大きくして、迷った末ベッドの端に腰掛けた。

彼が近い。



「教えてくれ」

アーヴィンの手に杖はなかった。部屋に置いてきたのか、それも床にあるのか。重い口ぶりに、イルマは反射的に手を伸ばし、杖に触れると沈黙の結界を張った。

普段の彼なら第一声は間違いなく『すまない』であったのに、この非礼を謝罪しない。

「教えてくれイルマ。君たちは何をしに行くんだ」

彼の質問に言葉を詰まらせる。イエスと答えても、ノーと答えても、アーヴィンは正しい答えを手に入れる。自分がとても不利な立場に立たされていると気付くのに、そう長い時間はかからなかった。黙っているのが一番いい。返事をしないのが自分に残された道だと悟る。

だが、

「イルマ？」

顔が近い。

「し、知らない」

悲鳴が漏れそうになって、反射的に答えてしまう。彼は少しだけ眉を寄せた。

「ふうん。やっぱりニヒ・ラルゲ 荒れた土地 なのかな？」

「知らない！」

「そうか……最初から明日行くところが目的？」

「知らないもん」

「誰か待ち人がいるとか？」

「知らない知らない」

そうやって繰り返される質問に、知らないと首を振り続ける。

だが、イルマはアーヴィンに嘘がつけないのだ。

朝、食堂で彼らを迎えたのは旅装を整えたアーヴィンの姿だった。サミュエルの視線がイルマへ突き刺さる。

ホレスもちらりとこちらへ目を向けたようだが、とがめることは

なかった。そのまま彼を静かに見る。

「おはようございます」

普段、無表情を決め込んでいるアーヴィンが笑顔で挨拶する姿を、イルマは初めて目にする。

「おはよう……随分と、万全な旅支度ですね」

「沙漠へ行かないのなら、と言ったんです。目的地が沙漠なら僕も同行します」

「イルマ、お前！」

「し、知らないもん」

昨日から、イルマがずっと繰り返してる言葉だ。

知らない。知らない。アーヴィンの質問にすべて知らないで答えただが彼は、それだけでどんどん話の核心へ迫って行くのだ。

途中、何度声を上げてサミュエルを呼んでしまおうかと思ったが、だがその後の、アーヴィンの末路を考えるとどうしてもできなかった。

後から考えれば魔法でアーヴィンを追い出すこともできたのだ。

しかし、そのときは必死に知らないと繰り返すのが精一杯だった。

答えれば答えるほどドツポにはまっていくし、そのたびに彼は身を乗り出してイルマへ迫ってくる。叫び出したいのを押さえるので必死だったのだ。

「僕、嘘をつかれるのは嫌いです」

「アーヴィン、色々あるんだよ」

サミュエルがホレスの顔色を窺いながら、そう言っただけだが、彼は首を振る。

「僕も一緒に行きます」

「だめよアーヴィン！ 危ないわ！」

「ふうん。危ないんだ」

ぐう、と喉を鳴らしてイルマは黙る。これは完全に彼のペースだ。泣きそうな顔でホレスを見ると、そちらも困った顔をしている。

「今イルマが言った通り、少々危険な仕事です。二、三日すれば

「嘘ですね。二、三日で帰って来るのは無理なんですよ？ ……」  
「そんなに奥まで行くんですね」

きっぱりと言い捨てる彼に、ホレスも目を見開く。

「宿屋のご主人に、ニクスのことも頼んでおきました。しばらく預かってくれるように」

「……細かい話はイルマから聞いているんですか？」

「いえ。何も」

「我々が何をしに行くかも知らずに、一緒に来ると？」

「ええ」

「なぜ？」

矢継ぎ早の質問。最後の最後で、彼は回答をためらう。

「ここまで来て、気になるでしょう？」

「嘘ですね」

反対に言い切られて、アーヴィンは顔をしかめ、ホレスは微笑んだ。

「いいでしょう。ですが、命の保証はありません」

「わかっています」

「例えどんな事態になっても、決してイルマを責めるようなことはしないでください」

「はい」

アーヴィンがしっかりと頷く。ホレスはそれを見てイルマたちを見る。

「それじゃあ、行きましょう」

何か言いたそうなサミュエルも、結局肩をすくめて出口へ向かう。すれ違いざまホレスがイルマの肩に手を乗せる。

「彼の面倒はあなたが見るんですよ？」

「それだけで許される。」

自分のせいでアーヴィンが危ない目に遭うかもしれない。だが同時に、彼とまたもう少し一緒に旅をできることに、喜んでいる自分

が  
い  
た。

## 第四章 ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 1

ホレスから簡単に今回の任務について事情を聞かされたアーヴィンは、最後は神妙な面持ちで頷いた。

見方も気をつけているのか、気分を悪くすることもなく旅は順調に進んだ。

「実際の程度なんだい？ その情報の信憑性は」  
後ろからアーヴィンが話しかけてきて、イルマは首を傾げる。

「よくわからないの。師匠も、どこまで信じていいかわからないって」

拷問の上吐き出された情報は、信用するに値するか。

「魔原石に関しては、私は正直嘘だと思うの」

「なぜ？」

彼の声が耳元で聞こえて、びくりと肩を揺らした。昨日の夜を思い出してしまふ。

動揺を悟られないように前を向いたまま話し続ける。

「だって、魔原石が本当にあるのなら、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地が荒れたままであるはずがない。魔原石の周囲は、魔力に溢れて安定しているから」

「それは、 僕もそう思う」

そう言っつて彼は別の世界を見る。

「こんなに魔力が抜け落ちているはずがない」

イルマもそつと瞼を下ろした。眉間に意識を集中すると、世界が暗転する。そして、魔力が光を宿し出す。本来ならすべての物が大なり小なり魔力を持ち、仄かに光り出すのだが、ここ、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 は真つ暗な穴があちこちにあいている。一番輝いているのは空だ。空は、この異常に冒されていない。空から魔力がさんさんと降り注いでいた。

「イルマ、手綱を握っているのは君だよ」

「え、ああ。ごめん」

つい魔力の世界に見とれてしまい、手元がおろそかになった。カメルは乗り手の気がそぞろだと、好き勝手に動き出す。慌てて軌道を修正し、カメルの背を撫でる。

「どちらにしる、かなり慎重にしないとね」

先頭はホレス。次にイルマとアーヴィンのカメルが続く。殿しんがりを行くサミュエルが、四人を包み込むように幾重にも結界を張っていた。それぞれが役目の違うもので、珍しく真剣に方程式を解く兄を、イルマは感心して見ていた。

「宮廷の女の子たちが騒ぐのもわかる気がするわ」

「サミュエル先輩は、もともとできるよ。処理能力も高いし。騒がない方が変わってるんじゃないかな」

「うーん。それはわかってるんだけど、普段のアレを見ていると、素直に受け入れられないのよ」

「そう言った面は別にして、普通に憧れてる学生も多かったよ」

ちょうど、イルマが一年生として入学したとき、サミュエルは最高学年である三年生だった。そこで兄の所行をまざまざと思い知ることとなる。

「友達がきゃあきゃあ言ってた覚えしかないわ」

兄と父親の愛情が行き過ぎていると知ったのもその頃だ。

「お母様が早くに亡くなられたから、二人が過保護になるのはわからないでもないんだけどね」

女手がなかつたわけではない。貴族の女性として必要な知識は召使いや乳母から嫌と言うほど聞かされてきた。それでも、母親の愛情を注がれなかったと言い、父と兄はその分を取り戻すのだと頑張り過ぎるほどに頑張ってしまったのだ。

イルマとて、二人の気持ちが変わらなくはないから、邪険にしきれずにいる。

口を尖らせて悩む彼女を、アーヴィンが小さく笑う。

「なによ」

「いや、羨ましいなと思って」

どこが、と声を荒げそうになって飲み込む。

彼の両親が小さな頃に事故で亡くなったという話を思い出す。人伝に聞いたので、真偽のほどはわからないし、どんな状況でか詳しくも知らない。

「兄さんなら、たまに貸してあげてもいいわよ」

突然黙り込むのも変だと思い、返した台詞がそれだった。気の利いた言葉を考えてはみるものの、アーヴィンからよい反応を引き出せそうにない。

その結果のこれだ。どうなることやらと、内心ひやりとしたが、彼は楽しそうに笑った。

「大変なことになりそうな気がする」

「そりゃもう。私の苦勞を一日で知ることになるわ」

二人が一緒に笑うと、ホレスが振り返り、サミュエルがカメルを寄せる。

何でもないと行って、またひとしきり笑う。

そうやって日暮れまで移動したところで、その日は休むことになった。

空にはこぼれんばかりの星が広がり、天に大河を作っている。昼間の辟易するような暑さと日差しがなりをひそめ、急激に寒さが這い上がってきた。

暖かいスープが入ったカップを両手で包み込み、四人は丸くかたまる。

早足の魔法のおかげで、普通に歩くよりもずっと早く目的地まで近づいている。このままいけば、明後日の昼過ぎには魔原石があるとされる場所近くまで行くことができるだろう。

ホレスが見せた地図を前に、アーヴィンが首をひねる。

「本当に、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の中心にあるんですね」

「あらそう？ ちょっと西に寄ってると思っけど」

杖の先に明かりを点し、それを地図に近づけてイルマが言うつと、

アーヴィンは首を振る。

「これは最近の地図だろう？ 沙漠は拡大している」

そう言っただけは自分の鞆から紙を取り出した。

「写しですね」

「ええ。さすがに原本は持ち出せないのです、普段僕が使っているものですが、これは約二百年前の地図になります」

周辺の目印となるものから推測すると、確かにアーヴィンの言う通り、今回言われている魔原石はニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の真ん中に位置していた。

続けてアーヴィンは今の地図を指さす。

「このこと、ここは、砂嵐がひどい地帯です。避けた方がいいと思いますが」

「敵がいるなら向こうもそう思っただけを張っているだろうってことだな」

「こちらが迫っていることを知っているかはわかりませんが」

「最悪の事態を想定して近づく方がいいでしょう。ただ、砂嵐をものもしない結界を張れるかどうか、ですが」

ホレスがこちらを見るので、イルマは自信たっぷりに頷いた。

「私がそれは維持します」

これ以上サミュエルの負担を増やすのは上手いやり方とは言えない。ただ、ホレスは必要最低限の魔法だけにしておき、不測の事態に対応する役目を負っている。経験も、能力もそれが最適だ。ということは新しい魔法はイルマの役目となる。

「それではこちらの砂嵐の中を通過して行く道を使いましょう」

「カメルはどこまで乗っていくんですか？」

サミュエルが顎に手をやり唸りながら訊いた。

「一応、明日の晩まで。こちらの道を通るなら、この辺りで夜を過ごすことになりそうです。そこからは半日もかかりません。必要最低限の荷物を持って、天幕などは置いて行きます」

魔法があるので、水分の補給はどうにかなる。水分さえ十分にあ



れば炎天下の中もなんとかしのげる。

ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 は完全な砂漠ではなく、岩がところどころ地表に出ていて日陰も手に入りやすい。隠れるところもない砂漠だったら接近するのも一苦労だったが、これならなんとかなりそうだ。

「そうと決まれば今日は早く寝て、明日は日の出とともに出発です。サミュエル、先と後、どちらがいいですか？」

サミュエルがどちらでもと答えて立ち上がる。

見張りの話だと気付くのに少しかった。

「それじゃあ、先に寝させてもらいましょう」

「私も！」

「お前はいいの」

慌てて手を挙げ主張するイルマのおでこを、サミュエルが拳でつつく。

「僕も」

「やめてくれ。お前まで言い出したらなおさらこいつが引っ込みつかないだろう。チビ組は大人しく寝ろ」

アーヴィンに皆まで言わせずサミュエルが反論を封じる。

「さ、それじゃあお先に失礼しますね、せんせい師匠」

「ええ、おやすみなさい」

そう言つてイルマの肩を両手で押す。

「ほら、行くぞ」

「行くつて……」

「天幕二人用が二つしかないんだ。どう考えてもお前と、俺だろ？」

「ええ！？ なんて兄さんと同じ天幕で寝ないといけないの!？」

「仕方ないだろう」

サミュエルはよい笑顔だ。少しの疑問も抱いていない。

「昔はよく眠る前にお話してやったじゃないか。そのまま眠ってしまったことが何度もあつたらう？」

「そ、それはそうだけど！」

もう十年以上昔の話だ。兄に対して何を思うわけでもないが、この春で十六になった。大人の女性として扱われて当然の年齢だ。「それじゃあイルマは兄ではなく他の二人と同じ天幕がいいってのか!？」

「そんなっ!」

そうはいってないのに、ホレスは面白そうににこにこしているし、アーヴィンは相変わらずの無表情だしで、口を開けたまま絶句する。さらにアーヴィンと目が合い、あっという間に顔が赤くなった。昨晚の出来事を思い出さずにはいられない。

その劇的な変化にサミュエルが何かを感じ取り、口を開こうとしたところへ、ホレスの笑いを含んだ声が割って入った。

「私と君は交代ですからね。先にレケン君とあちらの天幕を使いなさい」

「っ! そうよ! 師匠せんせいの言う通りよ」

あらためてそのことに気付き、今度は怒りで顔を赤くするイルマに、サミュエルは肩を落とす。

「師匠せんせいはすぐそうやって最愛の妹との心の交流を邪魔するんですから」

「女性をいじめるものではありませんよ」

「わかってませんね。イルマはこういった反応が可愛いんですよ」

「もーっ!」

言いたい放題の兄から、矛先が一人すましてるアーヴィンへ移る。「だいたいアーヴィンもアーヴィンよ! 気付いてたなら言っつてよね」

「そこでこっちに八つ当たりされても困る」

八つ当たりじゃないわと暴れるイルマだが、限界が来たのか、杖を振り回すとサミュエルへそれを突きつける。

「もう! 兄さんなんか大っ嫌いよ!」

大変傷ついたという顔をつくるサミュエルを目の端に写し、イルマは自分の天幕へ駆け込む。杖と鞆を放り出し毛布を頭から被ると、

バカバカバカと呪いの言葉を繰り返し、やがて眠りの海に飲み込まれて行った。

もう一方の天幕には狭い空間に男二人が寝転がる。

「……なあ、お前イルマになんかした？」

「何かって何ですか？」

「何かつつつたら何かだよ」

要領を得ないサミュエルの質問に、アーヴィンは答えようがなく黙だんまりを続けた。

と、杖の先で頭をつつかれる。

「質問の意図がつかめないのでお答えのしようがありません」

「妙にあいつがお前を意識し過ぎている気がする」

鋭い。

さすがはレグヌス王国一の兄馬鹿だ。妹思いが度を超して変態の域に達しているが、観察力は神级だ。どんな些細な情報も、いつ彼女に関わるかわからないと無節操に集め続けた結果、王の起床時間まで把握しているとの噂が、まことしゃかに流れている。

「そうですか？」

とぼけてみる。

「そうだろう？ 気付かなかったのか？ あの可愛らしく焦っておたおたしていたのを」

逃がしてもらえない。

「まさかつ！ 昨日あの後部屋でいちゃいちゃ……」

「そんなわけないでしょう」

「いちゃいちゃしたのはニクスとイルマだ。」

「言っとくがなあ！ もしイルマに何かしようと思いついたら、まず俺に報告しろよ？」

「許可制ですか……」

なんなんだこの兄妹は。

「だいたい、どこでどう間違っただとしても、身分が違い過ぎるでし

よう。あなたたちは六貴族のインプロブ。僕は単なる庶民ですよ。問題外です」

「馬鹿だな。若いなあ。いいか？ あのイルマが政治に利用され、親が勝手に決めた相手に嫌々ながら嫁ぐような女だと思うか？ 俺は想像できないね」

確かに、大人しく従う姿など彼女には似つかわない。

「それに、俺も父上も可愛いイルマを無理矢理結婚させようなんて思わないしな。そこらへんは俺がしっかりやっておけばいいことだろう」

貴族とは到底思えない返答に、アーヴィンはイルマの父のことを思い出した。インプロブ家の直系はイルマの母一人だった。イルマの父親は、貴族といっても底の底。名ばかりの貴族でインプロブ家との婚姻が認められたのは奇跡だと、当時噂されたそうだ。もちろんアーヴィンは生まれていない。すべて人から聞いた話だ。

サミュエルやその父親が彼女に関してそんな風に考えているのは、もしかしたらそこが絡んできているのかもしれない。

ちらりと、暗闇の中に浮かぶ金髪を盗み見る。

イルマのためならば自分は政治に利用されようとも構わわないと言っ。どこまでもイルマのために尽くすその姿には尊敬の念すら抱く。

だが、それでいいのだろうか。

彼にとって彼女はそこまでする価値のある相手なのだろうか。

「おいおい。お前今、サミュエル先輩可哀想とか考えてたんじゃないだろうな」

「そこまでは思ってますよ」

「それなりに考えたってことだろう？ 俺はいいの。貴族間のどろどろしたやりとり結構好きだし。女の子はみんな愛せちゃう性質だし」

「……僕はサミュエル先輩が結構一途だって知ってますけどね」  
ぴたりと、隣の軽口が止まる。

学生時代、アーヴィンは共同部屋での読書が落ち着いてできないと、寮を抜け出して学校内で静かな場所を探した。教師たちはそんな彼を見て見ぬ振りをしてくれていた。事情があつて人より長くフェンデルワースにいたし、彼の境遇を哀れに思っていたからだろう。ある日、警備の魔法使いから逃れるサミュエルを匿ったことがあつた。

頼むから見逃してくれとすぐそばで身を隠す結界を張る。だが、それがあまりに不恰好で、間違いなく見つかるなと思つたアーヴィンは、ほんの気まぐれから彼に魔法方程式をいくつか教えた。それにより、サミュエルはその夜発見されずに事なきを得た。

後から、不埒者がフェンデルワースにたまたま滞在していた、とある王族の姫君の元に侵入したという話を漏れ聞いたが、その夜のこととつなげてみることはあえてしなかつた。

サミュエルが王宮の結界をも突破できるような方程式はないのかと言つて来るまでは。

悪用されては困るので一応用途を訊いたところ、愛のためだとそれだけしか返答がないので、丁重にお断りした。だが、匿つたときの方程式を応用し、自分でそれなりのものを作り上げたらしい。もともと結界方面に素質があつたのだろうが、愛の力は恐ろしい。

「とにかく、そんな心配は無用です」

「なぜだ！ あんなに可愛いイルマに、邪な気持ちを抱かない男の方がおかしいぞ？ しかも最近可愛いから美しいに移行中で俺ですらはつとさせられるときがあるつてのに」

そんなことは言われなくともわかつている。フェンデルワースを卒業したとき、まだ幼さを残していた彼女は、今では十分大人の女性だ。中味が外側に追いついていない分、そのちぐはぐさがまた魅力的だつた。

それでも、やはりその心配は杞憂だ。

「彼女は公平ですから」

「なんだそれは」

イルマと同じ色をした男が、暗闇の中で形のよい眉をひそめているのが想像できる。

彼女は、行動に常に理由がつきまとう。

人の輪の中心から少し離れたところにいるアーヴィンを、ことあるごとに招き入れるのは、すべての人にそうやって声をかけているからだ。拒否も受け入れもしないアーヴィンを、外す理由が見つからない。だからイルマは声をかけ続け、自分は拒否しないことでその距離を保てた。

アーヴィンと手紙のやりとりをするのは、研究所に他に同期がないからで、本来アーヴィンでなくてもいいはずだった。

今回の調査だって、本当なら自分でなくてもよかった。

けれど、公平な彼女はアーヴィンに機会を与えた。

ただそれだけだ。

黙ったままのアーヴィンに、何を勝手に想像したのか知らないが、サミュエルは鼻を鳴らしてごそごそと背を向ける。

「そう思いたいなら思ってる」

なにやら一人憤慨して眠る体勢に入ったようだ。

アーヴィンも暗闇の中瞼を閉じる。ちらちらと瞼の裏に映る魔力の光が、ぬくもりを感じさせるほど身近に迫ってきた頃、またポツリとサミュエルが問いかける。

「だいたいなんでついてきたんだ」

寝たんじゃないのか。

いや、あのサミュエル先輩だ。気を抜いていい瞬間などない。

思わず身じろぎしてしまったので、眠っていないのもばれた。

「心配だったので」

悩んだ挙げ句の一言は、サミュエルを完全に黙らせた。

誰を、とか何をとの質問が次々投げかけられると思っていたのに予想が外れた。

何が間違っていたのかと考えを巡らすが、わからなかった。

そして、それ以上の追求はなく、乗り慣れないカメルの移動に疲

れ切っていたアーヴィンは、隣がホレスと交代したことも知らずに朝までぐっすり眠った。

## 第四章 ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 2

砂嵐はイルマの予想を遙かに超えた。

本来遭遇したらじつとカメルを盾にしのごしかないものだが、今はそれを逆手に取ることで、もし敵が待ち構えていた場合相手の意表を突くことができる。まさかこの砂嵐を越えてはやってくるまいという油断がこちらの勝機となる。

実際これに遭遇するまではそう上手くいくものかと内心首を傾げてたのだが、今なら間違はなく頷ける。砂嵐へのルートはそこを通ってくるとの確信がなければ何かするだけ無駄と切って捨てて当然のものだった。

普段より体を寄せ合ったカメル立ちは、数歩先で吹き荒れる砂に少しも怯える様子を見せず、いつもの調子で黙々と前へ進んだ。

のんびりとした少々間抜けな顔立ちのカメルだが、肝は据わっているようだ。さすがこの不毛の土地を渡る生き物。心の中で称えながら、浅く息を吐く。

余裕だと思っていたのが案外結界の維持に手間取り、アーヴィンが慣れたからとカメルの手綱を引き受けてくれて、正直助かった。杖に集中できる。

目を閉じて、眉間の間の目で世界を視ると、結界の向こう側は乱れた魔力で吹き荒れている。砂嵐だけでなく、竜巻や、豪雨などの少し行き過ぎた自然現象は、魔力も乱れることが多い。そういった常態ではない自然現象を押さえる魔法方程式も、数多くあった。そのうちいくつかを応用して今回の結界を作っている。

その手順はホレスはもちろんアーヴィンにも褒められた。こういった独創的なやり方は昔から得意だ。

それでも砂の威力はすさまじく、たびたび手を加えなければ砂が吹き込む。一度思い切り被ってしまい、口の中がじゃりじゃりと不快感で一杯だった。



「あとどれくらい？」

「すぐ左に行くサミュエルに訊くと、彼は肩をすくめる。」

「まだ半分も来てないぞ」

「右手の、少し前にいたホレスが速度を緩めてイルマの横についた。」

「休憩を取りますか？」

「いえ！ 大丈夫です」

集中力は途切れていない。平気なのは本当だ。それでも、ホレス相手だといつ張り切って返事をしてしまう。彼もそれをわかっているのか、いつものふんわりとした笑みを浮かべる。

「無理は禁物です。疲れが出たらすぐ言いなさい。この分じゃ本当に先には誰もいないでしょうから、少しくらい行程が遅れても問題はありません」

「お気遣いありがとうございます。でも、本当に平気です。このまま一気に砂嵐を抜けてしましましょう」

そうしてフードの中や髪の毛についた砂を払ってすっきりしたい。風呂には入れないが、魔法を使えば擬似的なことはできる。風と水ですっきりした気分を味わうことができるのだ。

また笑って、ホレスは先頭に戻る。

そうして元の隊列を組んで随分進んだ後。もうすぐ終わりが見えてきたと喜んでいたところ、アーヴィンが突然カメルの手綱を引いた。

また、大地が揺れる。

微妙に動かし止まれとの命を下す。

「アーヴィン？」

「どうした」

後ろのサミュエルがそれに倣い、ホレスも歩みを止めた。

イルマは素早く方程式を練り、解いて、砂除けの結界をその場へ安定させる。

後ろを振り返るととても近いところに彼の顔があった。思わぬ距離に慌てるが、彼が眼を細めてずっと先、砂嵐の中を真剣に見つめ

ているので、イルマの中のおかしな焦りもすつと引く。

「アーヴィン？」

再び問いを重ねると、彼は顔をしかめたまま言う。

「おかしいんだ。この先の魔力がおかしい」

イルマは前を向いて目を閉じる。だが、砂の乱れと同じ形で魔力が暗闇の中にきらりと吹いている姿しか見えなかった。

「どうかしましたか？」

ホレスはどこかのんびりと穏やかに、カメルを降りてこちらへやってくる。

「この先は何か変です。道を変えた方がいい」

アーヴィンの言葉にホレスもまた両目を閉じた。だがすぐに首を傾げる。

「特に今までと変わりないように思いますが……」

「きれいに乱れ過ぎています。もうすぐ砂嵐は終わりだったね？」

イルマへの質問だと思い、しっかりと頷いた。あと半刻もしないうちに抜ける。

「道を変えた方がいい。待ち伏せされている可能性がある。これより先の砂嵐には人の手が入っている。自然の物じゃない」

「しかし、今から引き返すのはイルマにも随分な負担となります」

魔力の乱れにおかしさを見つけられないホレスは、彼の言い分に不審そうな表情を浮かべる。

イルマにもわからない。どこが先ほどまでと違うのか、少しも差違が見つからない。だが、アーヴィンの言葉だ。

「大丈夫ですせんせい。少し戻ってぐるっと大回りしましょう」

「……だが」

「せんせい、アーヴィンは、その」

ちらりと彼を見る。簡単にいいことなのかどうか、イルマには判断がつかなかった。けれど彼はあっさりと口にする。

「僕は、開ウイデ・リーヘかれた子です」

ホレスが軽く目を開く。

少しの間のあと、だからとホレスが漏らした。

「だから初日に沙漠で酔ったんですね」

「つい癖で」

魔力で作られた世界を、眉間にある第三の目テルティウム・オクルスで見ることができるようになるのは、入学の儀で魔原石に触れ、魔力に触れたときからだ。

それが普通の魔法使いだ。

だが、アーヴィンたちのように、ある日突然第三の目テルティウム・オクルスが開くことがある。乳幼児のこともあれば、二十歳を超えた、すでに普通の仕事に就いているような大人になってからのこともある。普通は五、六歳くらいだと言われていた。

魔原石に触れることなく魔力の世界を視た者を、開かれた子ウイデ・リーベと呼んだ。

開かれた子ウイデ・リーベは、国に管理され、最低でも十三歳になったときフェンデルワース魔法学校へ入学する。学費や生活費、すべて国が面倒を見る代わりに、国に仕え働くこととなった。というのも、彼らは総じて魔力を視る能力が高い。子どもの頃から慣れ親しんでいるが故と言われているが、とにかく何かしらの分野で高い能力が認められた。

だが同時に、彼らは魔力の世界を意識せずとも視てしまう。見ないように意識しなければいけない。アーヴィンは初日、本来の土地にある魔力と、実際ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 で見た魔力のあまりの違いにめまいを起こしたのだ。

「師匠せんせい、だから、アーヴィンの視る目は確かです」

自分だけなら一も二もなく彼の言葉に従うが、今はアーヴィンのことを知らないホレスを納得させなければならぬ。サミュエルは、イルマが行くと言えは行く。

「私は大丈夫です。待ち伏せされている可能性が少しでもあるなら、彼の言う安全な道を行きましょう。ここまで来て彼らに気付かれるわけにはいきませんから」

イルマがさらに言いつのろうとしたところを、ホレスは杖を軽く上げて黙らせた。

「わかりました。イルマが薦める彼の言葉です。従いましょう。ただし、砂避けの結果は私があります。イルマは先視の魔法に専念なさい。レケン君のカメルが先頭です。指示をお願いします」

イルマの背後で頷く気配がする。彼はつい一週間前まで馬を操ったことがないというのが嘘のような手綱さばきで、方向を変えるとゆっくりカメルを進ませた。

ホレスの張った境界は、それはもう見事なものだった。

せんせい 師匠とアーヴィンだったらどちらがよりきれいな境界を編むのだろうなと考えながら、イルマはもしもでなくなってきた魔法を使える敵の存在に肝を冷やした。アーヴィンの言葉が本当ならば、いや、本当だ、この先に魔法を使うことのできる人間がいる。

アーヴィンとイルマの先導で、敵に遭遇することなく砂嵐を抜け、当初の予定よりもだいたい遠回りとなったが、無事目的の地点まで移動することができた。予定では昼過ぎだったのが、空には星が輝いている。

干し肉と乾燥させて堅くなったパンを、魔法で暖めたスープに浸して食べる。普段とはまるで違う食事だが、空腹は最高の調味料とはよく言ったもので、とても美味しく思えた。体の中から暖まり、少し不安だった気持ちも落ち着く。

食べ終わると、昨日野営した場所よりも建物の残骸が多く、風よけとしてその側に張った天幕へ、そうそうに引込込む。明日は朝早く、日が出きらないうちにここを発つ予定だ。

今夜も先に番をするホレスに見送られ、イルマは一人天幕の天井を眺めた。

魔法を使うのは集中力を要する。眠らなくてはと瞼を閉じるが、どこか落ち着かなくてそわそわしてしまう。

そこへ、また地鳴りだ。

横になっていたせいかわ、いつもよりひどく感じる。周りの残骸に

は補強の魔法をかけてあるので、倒れてくる心配はないが、それも気になり起き上がった。

外套を掴んで被ると、外へ顔を出す。

だが、そこにいるはずのホレスの姿が見えない。おかしいなと、そのまま表に出ると古びた煉瓦の向こうに頭が見えた。

月が空高く輝いている。そのおかげで灯りを点さずとも影だけは追うことができる。

もしか敵ではないかと、杖を握りしめ、自分の周りに人目から隠れる結果を張った。そうして影の後を追う。

月明かりに照らされた姿は、自分の知っている人たちとは違っている。これは間違いないと思い始め、引き返すべきか悩み始めた頃、突然肩を掴まれた。そのまま地面へ引き倒される。

「何をしてるんだ！」

突然のこととされるがままのイルマの耳に届いたのは、よく知るアーヴィンの声だ。それでほっとしつつも、次第に怒りがこみ上げる。

だが、彼の声が極限まで音量を抑えたものであったので、今騒ぐことが得策でないことはわかる。だから、瞳には険しい非難の色を乗せる。

その厳しさに気圧されてか、周りの状況が許したのか、アーヴィンは目をそらして、結局諦めのため息をつく。

イルマの腕を取ると、彼女の体を引き起こす。だが、相変わらず立て膝の状態で、立ち上がることは許されない。

指を唇に当てて、とにかく静かにと身振りで伝えてくる。状況がなにやら緊迫しているのはわかった。自分の唇に人差し指を持って行き領くと、彼はようやく体を離して少し先の古い煉瓦でできた壁の陰に身を潜めた。すぐ後を追う。

「どうしたの？」

掠れたような声でそう訊くと、彼は少し困った顔をした。

「君は、なんでここに？」

「知らない人がいた」

彼の顔が険しさを増す。

だからもう一度詳しく話す。

「さつき、また揺れたでしょ？ 外を見たら師匠がいなくて、で、遠くに人影が見えたの。追ってみたら師匠はもちろん、アーヴィンでも兄さんでもなかったから、ちょうど天幕に戻るうか悩んでいたところ。で、アーヴィンは？」

彼の瞳が揺れる。

「何かあったの？」

「……僕は、ホレスさんを追ってきた」

それは、と言ったつもりだったが、声にならない。アーヴィンの暗い顔が、月明かりに照らされている。

「彼は、どういった人なんだ？ 僕もあまり詳しくはないけれど、あの若さで教育係になっているのは、何か理由があるのか？」

自分の顔がこわばっていくのがわかった。

「師匠を疑っているの？」

彼は、イルマの瞳から逃れるように顔を伏せた。

「まさか、なんで、そんなわけない！」

声を荒げるイルマに、彼が慌てて手を伸ばす。彼女の口を塞ぎ、そのまま後ろの壁の壁に押し付けられた。アーヴィンの顔が近づくと、

「大きな声を出してはだめだ。向こうも魔法を使う」

「でも……」

ひどい。なぜそんなことが言えるのだ。アーヴィンは師匠を知らない。彼がいなければ、イルマは宮廷魔法使いの見習いを、誰の元で過ごしたかわからない。そしてそれは、あまり気持ちのよいものではなかっただろう。女性であるイルマへの視線は、同年代よりも年上の人間たちからの方が厳しい。女の癖にと内心思っているのが露骨に態度に表れた。ホレスに、どれだけ救われているかをアーヴィンは知らない。

「なぜ師匠が、敵国に力を貸すの？ そんなわけない」

誰よりも弟子に優しく、そして厳しい師だ。

「君が、あの人に心酔しているのは知っている。手紙に一番多く書くくらい好きなのはわかっている。それがどうというわけではなく、ただの事実としてね。……まあそれはいいんだ。好き嫌いの話じゃない。彼は嘘をついている。何か、よくない嘘をついていることは確かだ」

「よくない、嘘？」

アーヴィンはイルマの嘘を見抜く。そして、ホレスが沙漠には行かないと言った、あれも見抜いた。

「ところどころ、話に嘘がある。追求すればそれが何かわかるけど、そこまではできなかつた」

「そんなの……」

アーヴィンに視察のことを隠すために、それは数え切れない小さな嘘を重ねてきただろう。

「それだけじゃない。砂嵐のとき、確信した」  
心臓が跳ねる。

胸の前で握りしめた手の平に、じつとりと嫌な汗をかく。

「言ってたよな。あの砂嵐を通るルートに罠を張るなんて、ないだろうって。実際経験してみても僕も思った。間違いなく、人が来るとわかっていなければあんなところに罠を張るだけ損だと」

イルマも、思った。同じことを、まったく同じように思った。

「だけど、実際罠があつた。何者かが待ち構えていた」

どこかに反論したくて、必死に思いを巡らす。彼はイルマの左肩を掴み、右手は顔のすぐ横の壁についていた。こんなにも近いのに、目を合わせることができずにいる。

「それは、砂嵐を越えて僕らが来ると知っていたからじゃないか？」

「でも、そんなの……どうして、師匠せんせいだつて言えるの？」

めまいがしたと思ったら、また地鳴りだ。アーヴィンは一瞬上を見て壁が倒壊しないか確認するが、すぐまたイルマへ視線を戻す。

「イルマは違う。僕は……君がそうなら、僕は、諦める。でも、や

つぱり違う。君はそんなことをしない。それに、この僕に隠しおおせるはずがない。となると、サミュエルさんも違う。あの人は君が悲しむようなことはしない。だろう？」

「残ったから師匠なの？」

強い怒りが、一瞬首をもたげる。

「いや。僕はね、イルマ。魔力の流れがよく視える。それはいいよね」

彼は開かれた子だ。普通の魔法使いより繊細にその形を見極める。「人の感情に、人をかたどる魔力も反応する。僕が人の嘘を見抜きやすいのはそのためだ。長年見続けていると、詳細はわからなくても大まかな感情は読めるんだ。僕が砂嵐の先に待ち伏せている奴がいると告げたとき、あの人の内側に、強い怒りが湧いた。憎しみや苛立ちの感情が現れた。表面上はあの通り困惑した様子だったけど、内面がまるで違った。そう、予定通りに行かなかったことに腹を立てたように」

「嘘っ！ 師匠は、絶対にそんなことは……だって、それじゃあアーヴィンは最初から師匠を疑ってたの？ 嘘をついてるってわかっていて、ついてきたの？ なんでよ！」

「それは」

彼のどこか呆然としたような表情に苛立ちが募る。

「師匠の話がおかしいと、嘘をついてるとわかったっていうなら、なんできたのよ。フェンデルワースの宿屋で、随分長いこと今回の調査について話していたじゃない。すでにそこで細々とした嘘はわかっていたんでしょ？ ならなぜ来たの！？」

目の前で、歪む顔。こんな表情をさせてしまったと、自分の中の誰かが泣く。

「あなただつて、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 に惹かれて、今回の仕事に興味を持ってやってきたわけでしょう！？」

ああ、自分はいったい何をこんなに悲しんでいるんだろう。何に怒っているんだろう。



「誰もが君のように考えるとに限らない！」

とうとうアーヴィンも爆発する。

「君はいつもそうだ。自分の考えがすべて正しいと、そう信じて譲らない。そうやって、押し付けて、相手が諦めるまで周りの意見なんかそつちのけじゃないか」

「そんなっ！」

そんな風に思われていたのか。

怒りが一気に萎む。胸が苦しい。

「だって、押し付けなきゃアーヴィンは何も、何も言ってくれないじゃない！」

そうか、言ってもらえなかったことが悲しかったんだ。

すっと降りてきた解答に、そうかと納得する。

溢れてきた涙を見せたくなくて、彼を押しつけ、立ち上がろうとする。だが、手を突いた場所がぐにやりと沈む。

もう一方の手が宙を搔く。地面が揺れた。

膝が力が抜けたように折れる。いや、膝でなく、足下が。

固く確かな地面が砂とともに流れ出す。

「イルマ！」

アーヴィンが彼女の腕を取った。

だがそこで、イルマの意識は途切れる。

どこか遠くで声がする。

鳴き声だ。

いや、泣き声だ。よく知った泣き声。自分が、声を殺して泣く声だ。

サミュエルはイルマを執拗に女性として扱った。どんなに反発しても、彼女を守るべき対象としてどこまでも可愛い妹、可愛い少女と通してきた。兄のその態度が通常でないことがわかったのがフェンデルワースに入学してすぐ。

そして、兄の力が絶大だったと知るのには、彼が卒業した二年のとき。十四のときだった。

今思えば当然のことだが、なんでもはつきりと言ってしまうイルマが、すべての人間に好かれるはずがなかった。実技も、筆記も、すべてにおいて全力を尽くし、それに伴った成績を打ち出す彼女は、羨望的であり、また嫉妬を一身に受けることになる。

それでも、男子生徒は女子に負けたという事実が根底にあり、だからといってそれに嫉妬していると周囲に思われるのは自尊心が許さない。表だってイルマにつつかかるような者はいなかった。むしろ、積極的に関わってくる。イルマを認めたいという心根の広さを周囲に知らしめる。

だが、いつの世も、女性の執念深さは常軌を逸する。

細々としたことは、確かに一年のうちから始まっていたと思う。二年になり、それがあからさまになった。けれど、正面切ってつかかってくるような女子生徒はいない。

困ったなと思いつつも、気にしないでおこうと放置してた。同時に、はつきりと言われれば言い返してやれるのにと腹も立てていた。そんな態度が見え見えだったのだろう。状況は悪化し、とうとう、望み通りはつきりと正面を切って言われた。

要約すれば、同じ女子であるイルマが頑張れば頑張るほど、自分たちも本来は女だから手を抜けることが抜けなくなってしまう。余計なことをするな。また、そうやって健気に頑張っている演技をして、男子に媚びているのが腹立たしいと言ったことだった。

前半の主張と後半の主張で、イルマは結局頑張っているのかいないのかよくわからない。

ただどちらも彼女たちの本心なのだろう。

つまり、イルマの存在に苛立ちを感じているわけだ。

どうしようもないその事態に、言い返してやろうと思っていた言葉が消えた。

あなたたちの言いたいことはよくわかったと、それで終わった。わかったがどうしようもない。けれど、言ってすっきりしたのだろう。泣きも喚きもしないイルマに、居心地の悪さを感じながら、それでも彼女たちは満足して去って行った。

残されたイルマは、初めて向けられた苛立ちを、どう処理しているかわからずに立っていた。

他人から見れば、険しい表情のまま。

こんなとき普通ならどうするのだろうと考えて、兄の言葉を思い出す。

何をしてもいいかわからなくなったらとりあえず泣いてみればいい、と。

それには常に、兄の胸で泣けばいいというおまけがつくのだが、彼は王都レグヌスセスにいる。フェンデルワースよりもずっと北だ。仕方ないので一人で泣いてみた。

そんな簡単に泣けるとは思ってもみななかったが、案外すぐに涙がこぼれた。一度こぼれ出すと止まらない。

寄宿舎の裏の木陰で、声をこらして泣く姿は、それは珍しいものだっただろう。

彼女たちに呼び出された場所から動いていない。だから、まさか誰かいるとは思ってもみななかった。すぐ後ろの茂みでがさりと人の

動く気配に涙が止まる。

振り返る。

普通なら、そう、その場から逃げ出すのが正しいような気がする。だが、そのときのイルマは、茂みに向かった。

「……アーヴィン？」

分厚い本の向こうから、藍色の瞳がちらりと見える。

「……やあ」

「……いつからいたの？」

「君らが後から来た」

つまり、全部聞いていた。その場を動くことができず、じっとしていたのだろう。

それまでアーヴィンと意識して話すことはなかった。積極的に人の輪に入ってはこないし、何か始めるとき、側にいれば誘う。そして彼は断らない。ただそれだけだった。

このまま立ち去ることもできず、少し悩んでイルマはアーヴィンの隣に座った。顎を膝に乗せて抱える。

アーヴィンも膝を立てて、その上に重い本を乗せて静かにページをめくる。

ぱらぱらと、紙の音だけがする。

かなりの早さでめくられていくページに、黙っていられなくなる。

「ねえ」

「うん？」

「慰めてくれたりしないの？」

「慰めて欲しいの？」

「全然」

「だろうね」

言い切られてむっとする。

「君が慰めて欲しいと思っていたら、本気で心配する」

またまたむっとする。

でも言い返せなくて、足下の芝生をぶちぶちと引き抜いた。

自分の周りの芝生がほとんどなくなって、再び手持ち無沙汰になる。

部屋に戻ればいいとはわかっている。アーヴィンは、イルマが泣いていたなんてことを吹聴しないだろう。けれど、なんと声をかけてその場を後にすればいいかわからない。

「何を読んでいるの？」

人を殴り殺せそうなほど分厚い本だ。ここまで持つて来るのも大変だっただろう。こういった類の本は持ち出し禁止が多いのに、珍しい。

「ウエトウム・テツラ 古王国 最後の王に関するの本だよ」

「ふうん。楽しい？」

「まあね」

また、会話が止まる。

続けようと思うのがいけないのだろうか。

「最後の王に関してなんて書かれているの？」

「諸説あるからね。ただ、常に言われているのは、最後の王の魔力が、他の人よりも少なかったから、ウエトウム・テツラ 古王国は滅びたということだ」

「……なんで？」

「さあ。王にふさわしくないと、争いが起きたからと言われているけれど、それが真実かは知らない」

「ふうん」

今日は授業も何もない。みんな好きなことをしている。イルマも午前中に課題を片付け、午後は何かゆっくりしようと思っていた。だが、結局こんな事態に陥っている。

どうしてこんなことになったんだろうなと思っていたら、自然とそれが口に出た。

「どうしたらいいんだろうね」

「さあ」

こちらから話が始まれば、それには答えてくれるようだ。

だが、欲しい言葉とは限らない。だいたい、イルマ自身がなんといつて欲しいかもわかっていなかった。

「ねえ、ちよつと冷たくない？」

「優しくして欲しいの？」

「そんなことないけど！」

「だろうね」

さつきとまつたく同じ会話が続く。

「だって、君へこんでないだろ」

ちよつと方向が変わってきた。

「慰めようがない」

「……そう？」

自分は、落ち込んでなかったのか？

「でも、ほら。私さつき泣いてたじゃない」

言つて、ちよつと後悔した。なんだか恥ずかしい。頬が赤く染まる。

だが、失礼なことにアーヴィンがくすりと笑った。

「あんな風に、よし、泣くぞつて勢いこんで泣かれてもね」

「……ほんとに、よく見てたのね」

じつと、本の切れ目から彼の顔を見つめる。

ふいと目をそらされ、彼は本を閉じる。パタンと、よい音がする。

「あら、読書は終わり？」

「落ち着いて読めない」

「私のせいね」

「でも君、悪いと思つてないよね」

「こんなときぐらい付き合つべきよ」

芝生の上に本が落ちる。

「いい？ 学校で一番の美人があなたの隣で泣いているのよ？」

「すごいね」

「そうよ、すごい状況なのよ」

「いや、その自信が」

「なによ、文句ある？ 事実じゃない」

「主観的な問題だ」

「じゃあ、アーヴィンから見た学校一の美人って誰なの？」

俄然興味が出て来た。

だが、彼はそのイルマの勢いに怯えて身を引く。ねえねえとせがむが、両手でぐっと肩を押され、元の位置に戻される。

「別に一番の美人と思う人と、恋する人とは別だから、主観でアーヴィンの好みを聞いたって特に問題ないはずなのに」

イルマはそういつて頬を膨らませるが、彼は首を前へ傾け頂垂れる。

「まあいいわ。それじゃあ、同級生のちょっと可愛い女の子があなたの隣で泣いているのよ？ 声をかけようと思わない？」

彼はため息をつく。なんとひどい態度だろう。

「何を泣くんさい？」

棒読みだが、少しましになった。

「それは」

ただ、答えられない。

返ってきた言葉が、予想外に深くて、考え込む。

沈黙だ。さつきは苦々しく思った沈黙を、今は自分が作り出している。なぜなら本当は、私が答える番だったのだから。

考えても、解答は得られない。わからないから泣いていたのだ。

「兄さんがね、とりあえず泣いてみるのも手だって」

「サミュエル先輩の言いそうなことだね。自分の胸でお泣きって」

「うん。まさにその通り」

「それで、泣いてみてどうだった？」

「それをアーヴィンが邪魔したんじゃない！」

いいところで止まってしまった。

「……悪かったね」

「そうよ、悪かったのよ。責任取ってね」

「どつやって」

「一緒に考えてよ。どうしたらいいか」

「どうしようもないと思うよ」

彼は本を持って立ち上がった。逆光で暗くなった彼の顔を見上げる。

「君は今のやり方を変える気はないだろ？ 努力し続けることをやめたら、それはイルマ・インプロブではない。彼女たちの要求と、君の生き方は相容れないんだ」

きよとんとして彼を見る。口が笑っている。

「今回で、溜まりに溜まっていた鬱憤も少しは晴れただろうし、しばらくは何もないんじゃないかな。君は彼女たちに何の不満もないんだし、一方的な不満はそのうちむなしくなるだけだ。今までは、言いたくても言い出せる状態になかったから、これからは小さな爆発がたびたびあるかもしれないけれど、君が気にしなければいいだけだよ」

気にしないでいいのだろうか。

「人の顔色を見て、自分の行動を決めるなんていやだろう？」

ああでも、と彼は続けた。

「泣きたいなら、思い切り泣けばいいと思うよ。その間見張っていると言うならそうする」

それが、そのときの彼の精一杯の優しさなのだと思った。長衣カフタンの裾についた芝生を払い、イルマも立ち上がる。

「次の機会にお願いするわ」

優雅に、そういつて微笑んだ。

彼のことを、同級生の一人、からアーヴィン・レケン一人と認識し始めたのは、まさにそのときだったかもしれない。



第五章 ウェトウム・テッラ 古王国 2

こぼした涙もすっかり乾いていた。指先でその跡をなぞる。頬がひやりとする。

名前を呼ばれる。

遠くで。ぼんやりと。まるで水の中にいるような具合に。

やがて呼びかける声が、だんだんと近づいてきた。うるさいなと顔をしかめる。と、鼻をつままれた。

冷たい指先。

「ふえっ？」

重い瞼を押し上げると、目の前に人の顔があった。全体的に暗く、はつきりに見えるわけではない。それでも、背格好でアーヴィンだとわかった。こちらが気付くとすいと体を離す。

「起きた？ 痛いところは？ 気持ちが悪かったり目が回ってたりしない？ 何本に見える？」

矢継ぎ早の質問と、右手の人差し指を立てて目の前で振る彼に、固まる。

「イルマ？」

何も答えが得られないのに焦ったのか、頬をぺちぺちと叩く。冷たい指。

「ここは？」

口がきけなくなつたわけじゃないと安心してか、彼にしては珍しく優しく微笑んで上を向く。

「随分落とされた」

砂のさらさらと流れる音がする。

同じ場所に月明かりが煌々と降り注ぐ。

「頭を打ってるかもしれないと思ったけど、砂を被り続けるのも辛いと思つて動かしてしまつたんだ。気分は？」

横になつたまま頭を振る。肘や踵が少し痛む。落ちながらどこか

へぶつけてしまったのだろう。だが、沙漠に入ってから常には張っている防御の結界のおかげで、致命的な怪我はしていない。

「……アーヴィンは？」

「ん？ ああ。僕も君の結界のおかげでたいした怪我はしていない。少し腕をすりむいた程度だよ」

不幸中の幸いと言う。確かに、あれだけの高さから落ちて、この程度なのはイルマの結界の能力を考慮しても、運がよかったと言えるだろう。

もう一度目を閉じて、体の隅々まで意識を巡らす。おかしなところは無いと思う。

そう判断を下して、ゆっくり上半身を起こした。

二人は落ちてきた場所より少し離れたところにいる。沙漠には似合わない固い石の床。そこへアーヴィンの外套が敷かれ、その上にイルマは眠っていたようだ。座ったままの状態で体をずらす。

「これ……」

「ああ。眠っている人は体温が下がりやすいつて聞いたから」

掛けるか敷くかで悩んだんだけど、ごにごによごによごを濁す。言い訳は照れ隠しだ。彼は受け取って、少し離れた場所で砂をはたく。「うん。ありがとう」

イルマもそう言って立ち上がった。月明かりはほんの一部を照らすに過ぎない。今いる空間が、どのくらいの広さがあるのかもわからない。

そこで、常に身近にある存在が欠けていることに気付いた。

「杖！」

振り返った先で、アーヴィンも肩を落として首を振った。

「探してみたけど、どちらのものもなかった。たぶん、落ちたとき上に置いてきてしまったか、途中で引っかかったか。ここは何層にもなっているようだよ」

彼はイルマの手を取り腕を引く。砂が落ちて来る側に立って指さした。

「ほら、まるで地中深くに建物を埋めたみたいだろう?」

「ほんとう……」

崩れて判別が難しい箇所もあるが、この空間の上に同じような高さのものが最低でも五つある。

「登って行くのは、無理そうね」

「うん。だけど、来て」

アーヴィンはとても楽しそうだった。それはとても珍しいことだ。口数も、普段より遙かに多い。

この状況で、どこに楽しむ隙間があるのかと訊きたい。なんだか楽しめないイルマが悪者のように思えてしまっくらい、彼の声は弾んでいた。

「僕もついさっき目が覚めたただだから、まだそんなに調べてないんだけど」

迷わず暗闇に進む。少し歩くだけで光が消えてしまう。

「アーヴィン」

不安になって名前を呼ぶと、彼は少し強く手を握った。冷たい手だ。

「大丈夫。ほら、目を閉じると形が見えてくるよ」

「私は、あなたほど上手く魔力の流れは見えないわ」

「そうか。なら、案内するからついてきて」

彼の歩みに迷いはない。

目が見えているかのようにすすいと進む。

「地下に埋もれた建物。何だと思う?」

「さあ……ただ、もし魔原石があるとすると、ウエトウム・テッラ 古王国 のものかな」

「僕もそう思う。ここは、上ほど魔力が流出していないんだ。ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 にあるのに、魔力が溢れてる。すごく、歩きやすいよ」

「アーヴィンだけよ」

だいぶ気を遣ってくれてはいるが、ところどころ突き出た石に足

を取られそうになる。

見えるわけがないのに、つい視線が下がりがちになった。もう先ほどの光は届かない。声の響き方をみるにどこか区切られた場所にいるようだ。

「覚えている？ 開かれた子がなんだって、君に怒鳴られた」ウイデ・リース

唐突な話に首を傾げながらも、沈黙が続くことが怖くて返事をする。

「そんなこと、言っただけ？」  
「覚えてない。」

「君っていつもそうだよな」

「……ごめんって、謝るところ？」

「いや、いつも真っ直ぐで、思ったことをすぐ口に出す。それがまた正論でさ、人間あんまり正論をぶつけられると逃げ道がなくて困る。あのときも、結局みんなが困ってたな」

「覚えてないんだけど」

「実習でさ、僕が開かれた子だからって生徒の一人が嫌がったことがあったんだ」ウイデ・リース

「おかしな話ね。反対ならまだわかるけど。ああ、それが、自分よりできる人間がいると嫌なタイプ？ でも私はその場にいたなら私が一番できたわけだからそうじゃないわよね、きっと」

「ほら、正論。まったく同じことを言ってたよ。性格が合わないってならわかるけど、開かれた子だから僕が嫌だっていうのは、筋が通らない。あのときもそう言って彼を叱ってた。だけどさ、それだけじゃ終わらないんだ」

「……思い出してきた気がする」  
そして、その状況なら間違いなく自分はアーヴィンにも言わずにはいられない。

「開かれた子だからなんて言われるのは、僕らが魔力の世界ばかりを視て現実を見ないからって。あれは確かに事実だし、誰だっと思ってることだけどあんまり面と向かって言葉をぼかすこともなく言

える人はそうそういないからね」

イルマと同学年の開かれた子ウイテ・リーベはアーヴィンだけだった。だが、別の学年になら数人いた。その誰もが一人ぼつんと輪から離れたところにいる。だが、彼らはそれを改善しようとしないうし、他の生徒はどんどん疎遠になっていく。

「ああいうのはどちらにも腹が立つのよ」

「それはわかる」

「個人の好き嫌いはね、正直仕方がないと思うの。性格の不一致であるから。私だって苦手な人とかいるし」

先ほど見た夢を思い出す。あまりにも懐かしい。新学年が始まって、少し経ってからのことだったはずだ。

「でも、個人を見ないで大まかなくくりで嫌いだと、嫌いでいいんだってするやり方は」

女が、男より魔法使いとして優秀とは、とか、宮廷魔法使いを指すなんて、と散々言われ続けたそれが、そのままぴったり当てはまってしまう。

「嫌なのよ」

「うん。イルマが大変だったのは知ってる。みんな知ってるよ」

いつの間にか細い通路を通っている。肩が当たって、反対側へ逃げるとまた壁に当たる。とても、狭い道だ。話ながら、本来なら杖を握っている手を壁へつけてみると、案外しつかりしていて驚いた。砂の浸食もなく、いったいどれほど長い間こうやってあったのか。

「あのときはみんなお互いに気まづくなつた。だってさ、彼が僕につつかかってきたのは、本当は開かれた子ウイテ・リーベとか、そんなものは関係なかったから」

「え？ そうなの！？」

「そうだよ」

闇の中でアーヴィンが笑った。今日の彼は本当によく話す。落ちた衝撃で何か起こってしまったんじゃないかと心配してしまつくり。

「彼は、君が僕に構うのが嫌だったんだ」

「……それなら」

何かを言うなら自分にはないかと言いかけて、彼の言わんとするところよようやく飲み込める。

「本当のことを言いたくても、なかなか言えないこともあるよ」

でも、とかだって、と心の中で文字が浮かび上がり、そして消えていく。

この話の先が、どこへ届くのかもわかってきた。

「アーヴィンも、言いたくても言えなかったと？」

「だって、どうなるか目に見えてるだろ？ 言っても無駄というより、状況が悪くなりそうだったから」

「そんなことないわ！」

「それなら、君はホレスさんのこと、今はどう思ってるの？ 僕からあんな話を聞いた今、君はどんな風に考えるの？」

「それは、何かの間違いよ。だって、師匠せんせいはとっても」

「ほら。間違いだと言って、彼がそんなことをしていないと言える材料を探し始める。サミュエル先輩に相談して、あまつさえ本人にそれとなく探りを入れたりするだろ？ こちらが気付いてるってのが、きつとばれるよ」

「じゃあ、なおさらよ。なんでアーヴィン、ついてきたの？」

「……たまには自分で考えてみるといいよ。君は頭がいいんだからとても嫌味に聞こえて、彼の手をぐつと力を込めて握る。が、ほら、と言った。」

「あれなら見えるだろ。あの、床に落ちてる物」

アーヴィンは彼の元にイルマを引き寄せると、肩を両手で掴み体の向きを変える。

「もつと顎を上げて。そう、それくらい。真っ直ぐ先にある」

「何も……」

闇に目が慣れてきたとしてもそれは微かな光がある場合だけ。月明かりさえ届かない完全な暗闇では、見るも何も、すぐ前にあるア

「ヴィンの背中さえ判別がつかなかったのだ。肩に置かれた彼の手だけが、夢ではないのだという実感をもたらしていた。」

「そうじゃなくて、魔力だよ」

ああそうかと両目を閉じる。これは気分の問題だ。眉間に意識を集中すると、辺りが一気に明るくなる。だが、イルマではこの中を自由に歩くのは少々難しい。どれが何を構成しているかがいまいちつかめないのだ。

「ほら、奥にひときわ輝いてる。カンテラだよ」

「カンテラ!？」

「うん。魔力がかかっている。油が蒸発しないように、古王国からの骨董品だ。でも使えるね、これは」

近づいて、彼は靴から燐寸を取り出し擦った。その明るい光に目がくらむ。暗闇に慣れてしまったイルマには、痛みのようにも感じた。

イルマがあわてて瞼を下ろしている間に、アーヴィンはカンテラに火をつけた。瞼の裏がオレンジ色に染まる。

「もう一つある。こっちは後でつけようか」

そう言っただけ目を閉じたままのイルマについていないそれを渡す。金属のひやりとした冷たさと、長年放置されていてさび付いたのだろう、ざらざらと金属が皮膚をこする感覚が時を感じさせる。

ようやく慣れて開いた目に映ったのは、明かりに照らされたアーヴィンの顔だった。先ほどは気付かなかったが、頬に傷がある。

イルマの視線に直前まで握っていた手がそこを押さえる。

「もう痛くないよ。顔に傷がついたのが、僕でよかった。これがイルマだったら、後でどうなったことか」

「兄さんに、問答無用で殴られるわ」

「だろうね。この傷よりひどいことになりそうだ。さあ、行こう」  
明かりがあるので先導は必要はないのに、彼はまた同じ手を差し出した。イルマもそれを黙って握る。

「適当に歩いていたんじゃないやなくて、一応魔力の崩れがましな方へ来

ていたんだけど、この先何かあるね」

アーヴィンがそういつて腕を上げた。カンテラの明かりが揺れる。奥の奥まで照らし出すことはできないが、道が途絶えている。

突き当たりに何かがちらりと映った。

「行き止まり？」

「みただね」

突然途切れてしまった通路に、二人は顔を見合わせる。

「でもここが一番魔力が集まってる」

慌ててイルマも両目を閉じた。辺りが一瞬暗くなり、そして輝き出す。確かに彼の言う通り、両側の通路の壁をかたどる魔力よりも、目の前の壁の魔力の方が整然と並んでいる。いや、並びすぎていた。これはさすがにおかしいとイルマでも気付く。

「何か仕掛けがあるのね」

イルマが手を壁に伸ばす。

指先が触れるか触れないかの距離だった。爪に、ぴりつと何か走った気がする。

慌てて引つ込めると、自分の手をまじまじと見る。アーヴィンがカンテラの明かりで照らしてくれたが、特に異常は見られない。

気のせいかともう一度伸ばそうとすると、今度は止められる。

「あまり不用意に触らない方がいいよ。今で壁の魔力が少し動いた。間違ひなく反応している」

「でもそんなに悪い感じはしなかったから……わかったわよう」

睨まれた。明かりの当たり方が表情をより険しいものにしていて、しぶしぶ引き下がる。

その様子に頷いて、アーヴィンは壁を入念に調べだした。触れないうちに細心の注意を払い、何かこの謎を解く手がかりを探す。

この通路はそれほど大きなものではなかった。真つ直ぐ手を伸ばして背伸びをすれば天井に指先が触れる。道幅も、両手を広げてくると回るのがギリギリできるくらいだ。

熱心に壁を見るアーヴィンを置いて、イルマは来た道を数歩分戻



る。少し離れた場所からカンテラの明かりに浮かび上がる壁を眺めた。

完全に探索モードに入ってしまった彼の邪魔にならないよう、その姿をぼんやりと見る。

明かりを灯し、両目を開くとすっかり忘れていた心配事が首をもたげてきた。

上はどうなっているのだろうか。

サミュエルが、アーヴィン不在に気づけば、同時にイルマがいな  
いことも知るだろう。搜索を始めてさえくれればすぐに迎えに来て  
くれるはずだ。魔法を使えば、それくらいいけない。

感覚でしかないが、まだそれほど時間は経っていない。長くて一  
刻程度だろう。先ほどの地震は大きかったが、ここに来てから何度  
も遭遇しているサミュエルが、いつものことと目を覚まさなくても  
おかしくはない。交代の時間まで、気づかなくても致し方のないこ  
とだ。

そう無理やり信じたい自分がいた。

そうでなければ、今の今までサミュエルが現れないのがおかしい  
やあ、待たせたねと軽口をたたきながら、イルマを抱きしめない  
はずがない。

兄の身にも何かが起こったとしか思えないのだ。

アーヴィンの指摘を、胸のうちで繰り返す。

もし師匠せんせいが本当に、そう、ならば、自分はどうするのだろう。

まさか、という思いが湧き上がり、考えることをやめてしまう。

ホレスに対して、信頼以外の感情を持つことはない。疑うという  
行為が驚きの対象だ。

それを、アーヴィンが打ち砕いた。

自分は疑い始めているのだろうか？

信じたくないと否定するのは、そうしないと肯定されてしまうよ  
うな材料があるからなのだろうか？

だめだ、と頭を振る。自分がどんどん落ち込んで行っているのが

わかる。目の前のことに集中しよう。杖無しで地上への道を探すのは困難極まりない。

もしかしたらこの先に出口につながる道が隠されているのかもしれない。

閉じていた両目を開く。そう。理性の目だ。人は竜とは違う。ひと時の感情に押し流されて、理性を失ってはならないのだ。

と、壁の上部に何かが見えた。

煉瓦が組み合わさっている壁は、側面のものと変りない。そう思っていたが、質感の違う石がはまっている。

「アーヴィン、上を照らして」

数瞬遅れて、こちらを振り返りながら腕をできるだけ伸ばしてカントラを頭上へ掲げた。

「鳥？」

彼のつぶやきに、イルマも目を細めてそれをじっと見つめる。

煉瓦ちようど二つ分の大きさの石だ。周囲とは材質が違う。ずいぶん剥けているが、色石を張り合わせて基礎となる白い石に、鳥の形を作っていた。

「アーラドリじゃない？」

つい先日見た、波の模様の羽がそこにはあった。飛び立とうとしている姿がそっくりだ。

「……アーラドリ。そうか、そうだよイルマ。記録の間だ！」

「きろくのま？ 確か、スベキリへみんなで見学に行った？」

「そうさ。ここは記録の間への入り口だ！」

「入り口って、壁しかないじゃない」

「確かにそうだけど、前に本で読んだことがある。記録の間は初めは封じられているんだってね」

記録の間とは、ウェトウム・テッラ 古王国 で行われる大規模な魔法陣の模擬を行う場所であった。今もいくつか遺跡として残っている。

規模が大きくなれば大きくなるほど方程式は複雑化し、手順を魔法使い同士が確認し合うために図形を床と天井へ書き記した部屋が記録の間だった。

が、次第にそれだけの規模の魔法陣を執り行うことができるとい

う権力を現す場にもなつていった。

「模擬を行うから、なるべく邪魔が入らないようにするのが自然なんだ。その一番簡単な方法として、出入口をなくした」

「それじゃあ、入れないの？」

「いや、それは困るだろう？ だから仕掛けが施されている」

そう言つて、彼は先ほどイルマを止めたにも関わらず扉へ手をつく。

だが何も起こらない。

「やっぱり僕じゃだめだ。薄き血ヒフリダ如きでは受け入れる価値がないんだろうね」

そう言つて、目だけでイルマを促した。薄き血ヒフリダではだめだと言うならば、ウエトウム・テツラ 古王国 の血を濃く受け継いだ者が触れればどうだろう。

そんなアーヴィンの心の声が聞こえてくるようだ。

けれど、こんなことをしている場合なのか？ 閉鎖された空間だというのならば、地上への出口など見つかるはずもない。

単なる視察で来た末に見つけたと言うならば、喜んでこの記録の間の謎に挑戦したいと思うが。

思ったことをそのまま口にする、アーヴィンは頷く。

「確かにそうだね。まあでも地上への道はさほど心配することはな  
いと思う。それよりも、記録の間に出入り口がない状態のままだ  
というのが異常なんだよ」

「なぜ？」

「それはつまり、儀式が完成してないってことだ。儀式が完成すれば、出入り口が設けられ、秘術の部分はまっさらにされてここで何を行ったかを記すだけの空間となっているはず」

「儀式が始まる前に何かあったかもしれないってことでしょ？」

「いや、むしろ、まだ途中なんじゃないかってことだよ」

もどかしそうに空中へ視線をやりながら、言葉を探している。

「ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の魔力の抜け落ち方は異常だ。それ

は言ったよな？ こんな状態で物が存在してられる方がおかしいんだ。普段魔力と言ってるのには二通りある。僕らが魔法を使うための魔力と、物がそこに存在するための魔力だ。後者は誰もが備えている。だから普段はそれを魔力とは呼ばない。魔力がないことなのは前者の魔力がないことを指す。それは、後者の魔力がないことなんて絶対にありえないからだ。魔力なしに物質は形を保っていることができないんだ。なのにこのニヒ・ラルゲ 荒れた土地 では、本来砂の一粒一粒にあるはずの魔力すら、ほとんどないんだよ」

彼は真剣にそう訴える。

「つまり、このニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の異常にこの儀式が関わっているんじゃないか、ってこと？」

「そう。もしかしたら、途中で放り出された儀式がニヒ・ラルゲ 荒れた土地 を作りだしている原因なのかもしれない」

ちよつとした興奮状態だ。それは結局ここを抜け出して地上の様子を窺いに行くことを優先しない理由になっていないわけだが、彼はもうそれに気づいていないのだろう。確かに興味がわかないわけでもない。

諦めて壁の前に進み出ると、アーヴィンがとても嬉しそうな顔をする。感情の起伏が緩やかというかほとんど変化を見せない彼が、それほど夢中になるといふならば、少しくらい協力したいと思う。ゆっくり右手を伸ばす。

指先が軽くしびれるような感覚。まるで壁と指の間に電気が通っているかのようだ。

そう思った瞬間、手が引つ張られた。壁へ吸い寄せられる。

「アーヴィン!？」

あつと言う間の出来事だ。手は壁を突き抜け、長衣の袖ごと肘までめり込む。そこに壁などないように。

「そのまま進んで」

カンテラを持った左手を、アーヴィンが手を伸ばして掴む。体が煉瓦を通り抜けるときはさすがに目を閉じた。

そして、空気が変わったのを感じる。

「イルマのカンテラも点けよう。ほら、この台に二つを置くようになってるから」

やたらと響く彼の声で目を開く。あたりは真つ暗だ。アーヴィンが持つカンテラだけが二人の間で揺れている。

靴から燐寸を取り出すと、彼がもう一つに火を点す。照らす範囲は二倍になるが、周りはその分さらに闇を濃くしたように思える。

「見学のときは、魔法を照明の変わりにしたけれど、実際はたった二つの小さなカンテラで巨大な空間に明かりをもたらした」

そう言つて、彼が二つの明かりを、すぐ目の前にあつた白い石の上に据えた。石には四角い溝が彫られている。ちょうど、カンテラの底がはまるようになってる。

イルマはスペキリの見学時に、教師が言つた言葉を思い出していた。

記録の間は、明かり取りなどを設置できず、そのため照明を持ち込むことになるのだが、魔法の演習を行う場所として他の余計な魔法を使うことが基本的には禁じられている。そうなると部屋全体を明るくするのが難しい。あまりに大量の松明を持ち込めば、空気の循環もままならない部屋はすぐに息苦しくなってしまう。

そこで取り入れられたのがこれだ。特別な技術で作られたカンテラは、絶妙な位置に置かれた水晶や鏡によって光を反射し、部屋全体を昼間のように明るくすることができるのだ。

現れた空間に、二人は息をするのも忘れてしまう。呆然と上へ下へと目を走らせる。

ここが砂の下であることが信じられない。それほどに広い。

壁が光り出す。だが、明かりがちらつて眩しいなどといったこととはない。すべては計算されている。

「アーヴィン……」

「すごい、すごいよここは、これが本当の記録の間なのか　ほら、天井と、床に方程式が記されている。やっぱりここは未完だ」

儀式が完了すれば消されるはずの方程式がそのまま記されている。イルマはアーヴィンに手を引かれてさらに進む。

小さな音もこの巨大な空間にこだまする。声がぶつかるものがない、どこまでも遠くへ響いていく。

「ここが中央かな」

彼は足元と天井を交互に見て言った。

丸い円が描かれている。

「違う、球ね」

「ああ。その隣のはコクレアの方程式だ」

魔法の難しさは、それを紙面で伝えられないことだ。魔法は三次元であり、それを正確に二次元で表現するには限度があった。立方体は描けても、それがいくつも重なり合うことを表現するのは難しい。一応表現するための記号や書式はあるのだが、それも正確ではない。

コクレアの方程式は螺旋を作り出す基本の方程式だ。下の渦が上の渦より小さいので、下から上へ方程式を展開していた。球はグロブスの方程式によって作られる。描かれている円の中心に の文字があった。これが基準となるという知らせだ。

渦の中心には2とあるので球より二倍の大きさで方程式を解くようになっていた。他にも立方体や円柱、円錐に半球と基礎の方程式がたくさんちりばめられている。そのすべてに数字が添えられているが、2なんて整数はめつたにない。小数点が、細かいものでは三桁まである。一回見ればだいたい覚えられるが、頭の中で想像して、とんでもなく大きな布陣になるなと驚いた。

「すごいわね。いったい何の魔方陣になるのかしら？」

そうイルマが話しかける。しかし、返事がない。

背後に立っているはずの彼に聞こえないわけがない。振り返りざまに顔を覗き込むと、目は開いていた。

「アーヴィン？ どうしたの？」

彼は、頭の上と床を見ているのではなかった。入ってきた方から

見て左手にある壁を、眉をひそめて見入っている。

イルマもその視線を追う。

「ああ。竜ね」

壁一面を使つて描かれているのは黒い竜の姿だ。その竜は、かなり広めの応接室二つ分はあった。ただしそれは絵の部分だけ。その周りにびっしりと文字が書かれている。魔法で彫られたものなのだろう。もし手彫りだしたら、どれだけの日数がかかるか想像できない。

竜の絵の下には、その細かい文字よりもずっと大きな字で何か書かれていた。絵の説明かもしれない。ところどころ崩れ落ちてしまっているの、全部を読むことはできないが、ウエトウム・テツラ 古王国 で使われていた一般的な文字だ。

「目？ 目の儀式って書いてあるのかしら？ なんだか変ね」

大きな竜の絵と、小さな三人の人。たぶん魔法使いだろう。その一人が雷に打たれている。

「まさか、そんな……」

あらためて彼を見ると、紺色の瞳が大きく見開かれ、口が開いている。わかりやすい驚愕の表情だ。

「何？ どうしたの？」

「だってイルマ、この絵」

「竜の絵でしょ？ 火は噴いていないみたいだけど、翼は案外小さいのね。ああ、でも考えてみたら彼らは魔力の塊なわけだから、きつと魔力で浮くのよね」

疑問に自分で解答を述べ、うんうんと満足げにうなづく。そんなイルマをアーヴィンはまじまじと見ている。

「君は……、なんでそんな簡単に受け入れられるんだ！」

「えっと、何が？」

信じられないと彼はつぶやき、真っ直ぐ絵に指を向ける。

「竜だよ！ もし、もしこれが本当にウエトウム・テツラのもので、本当にここが記録の間だしたら、竜がいたってことになるんだぞ



!？」

最後は声が裏返っている。

しかし、そんなに慌てる理由がイルマにはよくわからなかった。

「だって、竜はいたもの。でしょう？」

驚く理由がわからない。昔から話によく出てくるではないか。

「確かにいたという物的証拠はなかったけど、ウエトウム・テツラの人と竜の話は昔よく兄さんがしてくれまし。結構お気に入りよ？」

「それはどんな……」

「どんなって、たくさんあるけど。……だって、私たちが魔力を見る目だって、もともとは竜と人がそれぞれ道を別った原因になっているわけだし」

「待ってくれ、何か話が」

「私たちのこの眉間にある力の目は、本来は人が捨てた目なわけでしょ？ 壁画はちゃんと竜が三つ目だわ。額のものが力の目ね。で、竜は両の目を閉じているでしょう？ それは彼らは理性の両目を捨てて、力の目を取った。だから大きな魔力を持ったわけだけど、理性が薄れてやがては滅んでしまった。人は力の目を捨て、理性の両目を手に入れ地上に栄えた。ってやつ」

「そんな話聞いたことない」

アーヴィンは気の抜けたような声でつぶやいた。

「そうなの？ 王都で流行っていたのかしら。アーヴィンはゲナの生まれだったわよね。だから小さい頃にあまり聞く機会がなかったのかも。竜の話って不思議と大人はしないし。私も兄さんから聞いたくらいなもの」

アーヴィンは口元を押さえて考え込んでしまった。こうなると話しかけても無駄だ。方程式を熱心にいじっているときと同じ状態だった。イルマは肩をすくめて他の壁を見るため歩き出した。

天井と床は方程式を表す場所と決まっていたが、他はこれと決まった形式はない。ただ、後年儀式に関するものや、その年起こった出来事、またはその大きな儀式を執り行う人物について書かれてい

ることが多い。つまり、権力を誇示するためだ。竜に関わる目の儀式とやらが、ここで行われようとしていた。もしくは行われている途中だった。その竜の絵の向かいの壁には三色の丸い色硝子がはめ込まれていた。ただし、一つがイルマの背より大きい。硝子はもろい。割れてしまわないように補強の魔法がかけられている。それくらいなら、イルマでも目を閉じればわかった。

その赤と緑と青の円の中央にひとときわ大きく文字が彫りこまれている。

「クリユ……なんて発音するんだっつけなあ」

ウエトウム・テツラ 古王国 のこういった場所ですわられる形式的な飾り文字は組み合わせでかなり音が変わる。学校でも一例を習っただけで、詳しくやれば一生かかってしまうほど奥の深い学問だ。結局、赤い硝子がなんとかブंकか、又で、緑がクリユなんとか青い硝子にいたっては、なんとかヒしかわからなかった。

あまりに情けない結果に肩を落とす。

近づいて、硝子の周りに書かれた文字を見る。文字はイルマの手のひらよりも小さかった。硝子へは背伸びをしないと手で触れることはできない。

文字が欠けてしまっているところも多く、単語の意味をとっていかがおぼろげにしかわからなかった。どうやら過去の目の儀式について書かれているらしい。年号も書かれているが、王が変わるたびに年号も変わるのでそれがどのくらい前のものなのか、思い出すのに一苦労だ。アーヴィンなら即座に答えてくれそうだが、今の状態では無理だろう。

保留して次へ行く。

イルマたちが入ってきたちょうど正面の壁には、色つきの硝子で一人の人物があらわされていた。細かく砕いた硝子の破片を組み合わせた、大きな絵に仕上げている。

これはさすがにイルマもわかった。

ウエトウム・テツラ 古王国 最後の王。マニユス・セプテント

リ三世だ。

あの夢の出来事後、彼が読んでいた本を、イルマも読んでみた。マニユス・セプトントリ三世は、政治的能力に長けた王だったという。彼の行った政策はことごとく的を射ており、人々の暮らしが目に見えて向上したそうだ。ちょっと褒めすぎじゃないかと思うくらい、そういった内容が書かれていた。

だが次の瞬間その褒め上げたセプトントリ三世を蹴落とすのだ。魔力が少ない、と。

魔力は血筋が絶対だ。そして、それでも、たまに量の少ない子供や、反対に多い子供が生まれることがある。今の世でも同じだった。どれだけ金髪碧眼の貴族的容姿をしていようと、魔力の量が少ない者はいる。

他でどんな風に頑張ろうとも、最後には惜しむべきは魔力の少ないことだとまとめられるのがセプトントリ三世だった。

それでも、今のイルマたちよりもずっと多い。それは比べ物にならないほどだ。

「そんな王様がいったいなんの儀式をするつもりだったのかしら」と、遠くで音がした。

とても小さな響きだったが、まったく無音であったこの空間で、それは予想以上に大きく耳に届く。

「何かな？」

アーヴィンもようやく抜け出したのか、入り口へ向かう彼女に追いつく。

「音、したよね？」

「うん。聞こえた」

二人は顔を見合わせる。それぞれカンテラを取ると、途端に記憶の間が闇に沈んだ。

出るのは入るときより簡単だった。こちらから見ると通路は隠されていない。普通に、真っ直ぐ進むだけだ。

「砂が落ちてきたとか？」

「いや、揺れはなかったし……だけど、確かにその可能性はあるな。気をつけて」

先を歩くイルマに、アーヴィンが注意を喚起する。歩いてきた道を、さっきよりもずつと速い速度で進んだ。

「イルマっ!」

できうる限り声を抑えたのだろうが、狭い通路にはそれが大きく響いた。どうしたのと返すよりも先に、前方に白い姿が揺れた。

「せんせい師匠!」

暗闇に浮かぶのは、杖の先に明かりを点して歩くホレスの姿だった。あちらもイルマを見つけると、笑顔を浮かべる。

「無事ですか?」

「はい!」

嬉しくて駆け寄ろうとする。が、イルマの腕を引く者がいる。

「アーヴィン?」

「だめだ、イルマ」

「だって……」

「引き返そう」

「でも、一本道だったじゃない」

「大丈夫だから」

さつき彼が話していたことはわかる。だけど、それならそれで平静を装わなければならぬのではないか? まあ、イルマは純粹にホレスが現れて嬉しくて、最初の一步はそこまで考えていない。

「イルマ、どうしたんですか?」

ホレスは不思議そうに首を傾げる。アーヴィンとせんせい師匠を交互に見つめて困っていると、後ろの彼が口を開いた。

「ホレスさん、その人は誰ですか? サミュエルさんではありませんね」

「え……?」

明かりを点している杖ばかりが強調され、その後ろにある人影が誰の者なのか判別がつかない。

そう、確かにホレスの後ろには人がいた。

サミュエルだと思ったが、もし兄なら、イルマの姿を見つけ次第飛びついてくるだろう。兄ではない。

「レケン君は、本当によく気がつきますね」

ホレスの笑顔は崩れない。だが、彼の周りにみるみる魔力が集まった。方程式を解いている。

「けどね、魔法使いの前で杖を持ってもないくせに、そういった態度はいただけません」

「師匠せんせい!?」

「イルマ!」

声が交錯する。

アーヴィンはイルマの外套を強く引くが、その彼があつという間に後方へ吹き飛ばされた。

「アーヴィン!」

駆け寄ろうとするが、今度は自分の体が浮く。足下がすくわれる。苦痛に呻く彼の声がこだました。手からカンテラが落ちる。高い音を立ててわずかに残っていた油が石畳にしみていく。

「師匠せんせい何を!」

そのままホレスの元へ運ばれ、後ろにいた男に両腕を取られる。

その顔には見覚えがあった。

「お前は!」

体の後ろに隠し持っていた杖には、期限切れの印が輝いている。

「やあ。お嬢さん」

「気をつけて。彼女は体術もなかなかのものです」

「師匠せんせい!」

悲鳴のような呼びかけに、ホレスは紫の瞳を細める。

「大きな穴の横に、あなたたちの杖を発見したときは肝が冷えまして。ですが無事でよかったです」

彼の大きな手がイルマの頬を撫でた。

普段なら安心する仕草だが、なぜかぞくりと鳥肌が立つ。

「レケン君はここでさよならです」

ホレスが式を解く。

「フィニス  
解」

両側の壁が崩れ出す。

「アーヴィン！」

狭い通路はあっという間に砂と石が積み上がり、彼の姿がその向こうへ消える。

「せんせい  
師匠、何が！ なんで？」

「しばらく眠りなさい」

杖の先の魔石が、紫色の光の帯に包まれる。イルマの意識は光の中に埋もれた。

## 第六章 竜と魔力1

次に目を覚ますと見慣れない場所だった。天幕の中のようなのだが、イルマの使っていたものではない。両手を後る側で縛られているので、体を起こすのも一苦労だ。少し頭が重い。

だが、なんとか肩と腹筋を使って起き上がり座る。足が縛られていないのがせめてもの救いだ。

何が起こったのかと自問して、あの情景を思い出す。

「アーヴィン」

「起きたか。早いな」

天幕の裾が持ち上げられ、ホレスが現れた。彼の手にはもちろん彼の杖が握られている。あの紫の光が目の前にちらついていた。

「師匠せんせい」

「まだ師匠せんせいと呼んでくれるか」

どこか安堵したような響きを含んだ言葉に、自分の顔がこわばるのを感じた。

何かの間違いが連続して続いた。イルマの知らぬところで誤解が誤解を呼んだのかもしれない。

そんな淡い期待を打ち砕く彼の台詞。つまり、彼の行いはイルマから見れば許されたものではない。そう認識されても仕方のないことだったと証明されてしまう。

だが、それ以外になんと呼べばいいのか。

「そんな泣きそうな顔をしないでくれ」

地下でそうしたように、ホレスはイルマの目の前で膝をつくこと、そつと手を伸ばし頬に触れる。

「何が起こっているのか、私にはよくわかりません」

「そんなことはないだろう。お前は私の自慢の弟子だ。優秀で頭の回転も早い。レケン君に何か言ったのだろうか？ 頭のよいイルマがわからないはずない」

アーヴィンの名に、イルマは顔を歪める。

「彼を、地下へ閉じ込め置き去りにした」

「開かれた子との調べはついていたが、まさかあんな風に魔力を視る目があるとは思ってもみなかったよ。他にも色々思うところがあるってね。予定外の異分子は、計画に支障をもたらすから」

「計画？」

「後で落ち着いたら見せてあげよう。魔原石を無事オキデスに移し終えたらね」

「魔原石……やっぱりあるんですか？」

「ああ。透明で大きな石だ。魔力に溢れている。私の知ってるゲナのカルブクより少し魔力が安定していないように思えるが、移動させてからゆっくりそこら辺は調節するよ」

「せ……なんで、何をしようとしているの？」

「せんせい師匠と呼びかけてやめる。」

目の前の、彼の紫の瞳が微かに揺れ、薄い唇に笑みがこぼれた。自虐的なそれにイルマは目を伏せる。

「女だから、そう言われ続けて何も思わなかったか？」

突然の話に眉をひそめた。

「レグヌス王国の根底にある差別。魔法を取り巻く差別に、私はもううんざりなんだよ。ウェトウム・テツラ 古王国 の人々の血を多く受け継いでいるために、貴族には魔力の強い者が多い。そういった人間が国の中枢を動かすようになる。方程式が少し難しくなっただけで、悲鳴を上げるような、無能な輩があそこにはわんさかっているんだ。魔力魔力と、すべてを魔力で推し量る。魔力の量がなんだというのだ。生きている間に魔力が枯渇するのが困るなら、魔力の消費を押さえた方程式を上手く使えばいいんだ。その努力を惜しんで、生まれたとき無条件に与えられた魔力をかさに着る連中」

彼の目はイルマに向けられてはいたが、イルマを捉えてはいなかった。そのずっと遠くを見ている。イルマも貴族で、彼女の内にあ<sup>テルティウム・オクルス</sup>る魔力を第三の目で見ているのかもしれない。



「まあ、彼らが魔力に固執するのも少しはわかるんだ。私も魔力を抑え、より早く方程式を解けるよう努力を続けた。そのおかげで宮廷魔法使いにもなれたしね。だが、常に陰口は聞こえてくる。薄き<sup>リダ</sup>血と、努力すればするほど努力を馬鹿にし、蔑んで呼び続ける。私も劣等感があつた。確かに魔力が貴族たちのそれよりは少ない。重要な役職に就けば就くほど魔力の消費は日々上がる。それならとね、研究したんだ。魔力がないなら補えばいい」

「それはだめよ！」

思わず声を上げるとホレスの顔色が変わった。

穏やかで、笑みを絶やさないうその顔に怒りがのる。初めて見るホレスの激情に身を硬くする。頬に添えられていた手が、イルマの肩に触れ、指が食い込む。

「お前までそんなことを言うのか！ やつらと同じように、それは愚かなことだと。間違つても考えてはいけない危険なことだと！

その愚かな考えを抱かせるほどに、魔力を求めたくせに！」  
痛みに涙がにじむ。

それでも、だめだ。魔力は生まれたときに持っているもので、人が後から取り入れてそれを振るうのは絶対にやってはいけないことだ。

イルマの苦痛に耐える表情に、ホレスはハツとして手を離す。

「研究し、当時私の教育係でもあつたメルヴィンにそれを話し、見せた。その場に他の教育係がいたのも災いして、その話があつという間に宮廷魔法使いの上層部まであがつた。私は危うく宮廷魔法使いの地位を失うところだったよ。メルヴィンが四方へ手を尽くし、なんとかそれは免れたが、それ以来私がどんなに優秀な成果をあげようとも、与えられるのは閑職でしかなかった」

ホレスが教育係に任命されたのも、教育係は引退間近の魔法使いが最後に回される役職だからだった。

「だめです。だって、人は本来魔力を捨てたんです。もう一度手に入れようとし、手に入れて、やがてウェトウム・テッラ 古王国

は魔力におぼれ滅びたんですから」

必死で自分の知っているホレスを取り戻そうと訴える。肩が疼き、自分の声に痛むので途切れ途切れになってしまう。

「魔力は、今あるものを大切に使うしかないんです。新しく手に入れようなどとすれば、ウエトウム・テツラ 古王国 と同じ道をたどることになってしまう！」

だがホレスは怒るでもなく、笑うでもなく、不思議そうな顔をする。

イルマを見て、何を言っているのだと理解に苦しむ顔をする。

「魔力を捨てた？ いったい何の話だ」

それにはこちらが驚くしかなかった。

ホレスも竜と人間の話を知らないというのか。

これで二人目だ。ホレスは出身校がゲナの魔法学校だと言っていた。生まれもそちらの方がもしれない。フェンデルワースが一番学校の地位としては高いが、その分貴族が集まり、入学金や寄宿学校代は一律としても、他に細々金の要求があるらしい。一般市民出の魔法使いはゲナやスペキリに行くのが普通だった。

ただ、幼い頃王都やフェンデルワースに関わっていないからと言うのは、違う気がする。

そういえば、学校で例え話に竜の話を持ち出したことがあった。

そのとき初めはみんなぼかんとして、最後はなんとも言えない笑みを浮かべていたではないか。例えの仕方が悪かったのかと思っていたが、違う。彼らは竜などいないと思っていた。一人、はつきりと竜はお伽噺でとイルマに言った。竜の話をみんなは知らないのかもしれない。

「出会いはい偶然だったのか、はめられたのか。オキデスの人間は昔から魔法を研究しようと、モンス山脈を越えて魔法使いをさらっていた。それは知っているだろう？」

「……はい」

再び語り始めたホレスに、イルマの思考が中断された。

ひどい話だ。

魔法使いをさらい、それを研究するという噂がまことしやかに流れていた。

「実際事実らしい。魔法はそれだけ脅威だ。私は、ティルムに一時期身を置いていたが、そのとき彼らに出くわしてね。魔法は稚拙だった。魔力を持っていても使い方がわからないんだ。ただ、恥ずかしながら自分の置かれていた状況にくさっていた頃だった。彼らは何をしに来たか、魔力を手に入れた方法と、その場所を、今考えるとかかなりひどい方法で聞き出した」

人に影響を与える魔法は褒められたものではない。しかも魔力に耐性のない者たちなら、あつという間に口を割っただろう。

「彼らが魔原石らしきものをニヒ・ラルゲ 荒れた土地 で見つけていると知った。そして、それを使って魔法使いを作ろうとしていることもね。こんなニヒ・ラルゲ 荒れた土地 の奥地まで入ってくる人間はそうそういない。彼らも以前こちらへ侵入し、見つかって逃げ込んだとき偶然発見したそうだ。幸運なことにそこから生きてオキデスへ帰ることができた。だから沙漠に魔原石があることを知っていたんだ。私は、彼らの国に手を貸すことまでは、正直あまり考えていなかった。ただ、自分の研究の成果を試してみたかっただけなんだ。本当に魔力を移し替えることができるか。それだけだ。初めメルヴィンに提案したときも、魔力の宝庫である魔原石から魔力を人に移し替えるという話だったんだが、望みは潰され、自分で試そうにも移してみるための魔力がない。天の采配だと思つたよ」

その顔が本当に嬉しそうで、内容がこんなものでなかったら、ホレスが喜ぶ姿にイルマも喜んだだろう。だが、その内容はイルマの気持ちを重くさせる。

「そんなにレグヌス王国が、私たちが憎かつたんですか？」

なんとといえば彼をこちらへ引き留めることができるのかわからない。国とか、そんなものは正直どうでもよかった。ただこのままでは完全にイルマの敵になってしまう。ホレスを、そんな風には思い

たくなかった。彼のいたわりの言葉の数々。あれはすべて嘘だったというのか。

「貴族ではない魔法使いや、魔力の少ない魔法使いを薄き血ヒフリダと呼ぶ。どんなにその人物が優秀であろうとも。それは、君が女であるからと決して認められないのと同じだと思わないか？」

はつと顔を上げる。紫色のホレスの瞳と視線がぶつかる。

「いつも、一番近くでお前の努力を見ていた。私はその姿に感動さえした。だが、その努力がどう評価されるか、それも痛いほど知っているんだ」

ホレスはぐつと拳を握りしめ、立てている右膝の上に置く。力を込め過ぎて白くなる右手に、彼の苦しみが詰まっていた。

「同じように薄き血ヒフリダと蔑まれて生きてきている魔法使いがたくさんいる。ほら、拷問の末死んだ彼もそうだ。私は聞いてしまったんだ。死んだという知らせと同時に、『薄き血ヒフリダなら仕方ない』と言い放つ貴族の声を」

「ひどい……」

「そのときに決心した。今の魔法使いたちの体制を変えるしかない。それまでは、オキデスの申し出に迷っていたが、私の名を出すことなく死んだ彼の想いに報いるには、こうするしかない」

薄き血ヒフリダという言葉は知っている。だが、イルマの周りでそのようなことを言う人間は一人もいなかった。それはつまり、魔力が少ないからと貶めれば、女であるからとイルマを貶めることと同じ行為になると、誰でも気付いていたからだ。そして、それがイルマの耳に入れば、アーヴィン曰く、正論で攻め立てられる。そんな目に遭いたいと思う者は少ないだろう。

「でもやっぱり、だめです師匠せんせい」

師匠せんせいと呼びかける。どんな状況にあっても、やはりホレスはイルマの師匠せんせいなのだ。

「こんな風に女だと散々痛めつけられても、それでもやはりあの魔法使いたちを庇うのか？」

怒ってはいない。イルマが感情のまま思わずやってしまった失敗に対してする、少し悲しそうな顔がある。

「違います。師匠せんせいの、今の体制を覆さなければいけないというお話には、私正直大賛成です」

ホレスの表情に明かりが差す。彼の硬く握られていた拳がほどかれて、再びイルマの頬に添えられた。

「だけど！ やっぱりだめです師匠せんせい。魔力を魔原石から取り込むなんて、危険過ぎます。ウエトウム・テツラ 古王国 の二の舞です。それは、国を滅びに導く方法です」

ホレスは怒らなかつた。

残念そうにため息をつく。

「私は君を、とても可愛がってきた。自分が受けた苦しみからなるべく遠ざけ、少しでも軽減されればと思ってきた」

「師匠せんせいのおかげで、私、すぐ救われていました。師匠せんせいがいたからこそ、今までやって来られた」

その次の彼の行動は、イルマの理解を超える。

突然彼の顔がぼやけて、唇に柔らかいものが触れる。何が起きたのか、考える間もなく、ホレスは立ち上がり天幕の外へ向かった。

「愛してるよ、私の可愛い弟子イルマ。オキデスへの旅は海路に行く。しばらく窮屈な思いをさせるだろうが、我慢してくれ」

一方的な言葉を投げかけ、立ち去る。

天幕の中に独りになって、ホレスの言葉を反芻して、かなりの時間を要した後、ようやく事態を飲み込む。

「あれ、え、だって」

体中の血液がすべて顔に集まったような感覚に陥る。  
「だって！」

膝の間に顔を埋めて絶叫したいのを必死に抑える。今何かすれば、すぐそこにいるであろうホレスが飛び込んでくる。それだけは絶対に嫌だ。

「っていうか、私、き、キスされたの!？」

あくまで心の中で大声で喚く。

確かに、師匠せんせいは憧れた。大好きだけどそれは、そうじゃなくてこ  
うでもない。

興奮が収まると、今度はとんでもなく泣きたい気分になった。悲  
しくてたまらない。

どうしてこんなことになったのかと、激しく落ち込む。

「師匠せんせいのことは好きだけど、でも、こんなこととして欲しくなかった」  
相変わらず手は後ろ。顔を覆うこともできない。両目が熱くなっ  
てきたので下を向いてぎゅっと目を閉じた。

誰もが君のように考えるととは限らない。

なぜか、アーヴィンのあの言葉が思い出される。

「アーヴィン」

口に出してみると、涙が倍増した。さらに固く目を閉じる。

あの地下で生き埋めになった彼にはもう会えない。それをあらた  
めて思い出して、涙がこぼれる。

「アーヴィン、助けて」

絞り出したイルマの言葉が天幕の中に響く。

同時に、場違いな明るい声が聞こえた。

## 第六章 竜と魔力2

「ああ！ 愛しの我が姫君！ 今ここに助けに参りました」  
驚いて振り返ると、入り口とは反対側の天幕の裾を持ち上げて、  
這うようにして現れた兄の姿がある。

「寂しかっただろう、可愛い妹よ。もう大丈夫だ」

頼りがいのある笑顔。だが、口を突いたのは別の言葉。

「なんで兄さんなのよっ！」

「ええっ!？」

その後は決壊した涙が滝のようにこぼれ落ちた。

落ち着くのにしばらくかかる。手の縄を解いてもらい、小さな頃  
されたようにぎゅっとイルマを抱きしめるサミュエルの胸で泣く。  
途中つつかえつつかえそれまでのことを話すが、兄の相槌が次第に  
怒りを帯びていった。

「へえ。あの野郎め。俺だっけしたいのに我慢してるっつう口にキ  
スをまんまとさらったと。ほーおー」

「アーヴィンが言ってたの。私と同じように、誰もが考えるわけじ  
やないって。師匠せんせいは私が喜ぶと思っただかもしれないけど、でも、全  
然嬉しくない。私、今までいっぱいいろんなこと言ってきたけど、  
でも、相手にとっては嬉しくないことだったのかもしれない」

「イルマお前、ちょっとそれは違うと思うんだ」

「でも……」

「とりあえず、その件は保留しような。どこで間違ったのかそんな  
風に考えたらあの坊やが救われん。今はいったん引いて体勢を整え  
よう」

「うん」

素直に頷くと、いい子だと頭を撫でられた。

だがそこで、ふと気付く。これだけ騒いで誰も見に来ない。外を  
ちらりと気にすると、サミュエルは大丈夫とイルマの肩を両手で叩

いた。それを見て、さらに驚く。

「兄さん、杖は？」

「ん？ ああ。取られた。俺だってなあ、捕まっただぞ。あの人がいきなり天幕に入ってきてさ、不意打ちだよ。それでも防御の結界が働いたから俺の顔に傷はつかなかったけどな」

「魔法もなくて、どうしてこの天幕に入れたの？ しかも気付かれてないわ」

杖がなくとも魔力の形は見える。天幕には外からも中からも、許可された者しか出入りできないように結界が張り巡らされている。魔法なしで気付かれずに来られるはずがないのだ。

そして、兄には確かに魔法の加護がある。

「杖ね、杖。そのなんだろうな……。父さんには絶対内緒だぞ」  
珍しい兄の真剣な顔に気圧され、頷くと、右手の人差し指にはまっている指輪を見せられる。それはインプロブ家に伝わる大切な家宝だ。蛇を象った家紋が台座に彫られている。父親は入り婿で、母が渡したこの指輪を一度も身につけることなく、兄に譲った。

「実はな、入学の儀に準備していた魔具コルを忘れて行った」  
「なっ！」

慌てて自分で自分の口を押さえる。

入学の儀には、自分の魔石の元となる魔具を持って行く。ペンダントだったり、ブレスレットだったり。そのどれにも透明な水晶か金剛石がはまっついていて、魔石の元となる。そこへ校長が直々に魔力の種を植え付けた。

魔具を持っていかなければ、入学資格を失ってしまうのだ。

「さすがに校長も慌てててな」

「校長じゃなくて！ 兄さんが慌てるんでしょうよ！」

「な」。参った参った。もうびっくりだよ。で、これに気付いたんだ」

「……兄さん」

家宝だ。それは代々受け継がれる物だ。



「ね。困っちゃうだろう?」

つまり、本来学校を卒業したら杖にはめるはずの魔石だが、家宝をそんな風にするわけにいかず、杖の石は偽物というわけだ。

「毎日必死だったよ。色つくな、つくなくてな。願いが通じて、俺の魔石は珍しく透明のまま。誰にもばれないよう、偽の魔具にも魔法で魔力が通っているようにしてさ。そこら辺は校長が手伝ってくれた」

「……校長先生に、本当に感謝しないと」

父が知ったらどんなことになるか。

でもそのおかげで今こうやってサミュエルは魔法を使える。

「卒業の儀で魔石の魔力を固定したら、杖にはめないと魔法がすぐ使いにくくなるだろ? 大変だったんだこれがまた。でもまあ、人間死ぬ気でやればなんとかなる。さ、とにかくここから出よう」  
「うん」

二人はこっそりと天幕を離れる。サミュエルは隠れて行動するのが得意だった。色々な敵の目を欺く方法を知っている。それを何に使っていたかは追求したくない。とにかく、この状況にはそれらがとても役立つた。

ある程度離れると、今度は魔法で自分たちの周りに結界を張る。彼のそれは、結界がそこにあることを知られないよう複雑にいくつもの方程式を組み合わせる。

「さて、どうする」

人の横をすり抜ける、そんな緊張の連続ですっかり息が上がってしまったイルマは、砂の上へぺたりと腰を下ろして兄を見上げた。

「どうするって?」

「俺の希望を言おう。このまま東へ沙漠を抜けて、王都へ帰る。俺には、ホレスの魔法の目をかいくぐって伝令を飛ばすのは無理だ。必ず見つかる。警戒しているだろうからな。ただ、俺たちが沙漠を抜けるのは可能だ。二日で行ける」

「でもそれじゃあ、魔原石は移動されてしまう」

それがどれほど恐ろしいことか。

イルマとサミュエルの姿が見えなくなったとしたら、今以上に急いで作業を進めるだろう。魔原石の移動に間に合わない。

「だめよ」

イルマの反対に、サミュエルは空色の瞳を細めた。

「絶対ここで止めないとだめよ」

「なぜだ？ ホレスのその研究とやらがどれだけのものかは知らないが、あそこにいるやつら、確かに魔力は持っているが、まともに魔法を使えるやつなんていなかったぞ？ 手に入れた魔力と付き合うのが精一杯だ。実戦に耐えられる魔法使いを作るには早くても半年はかかるだろう」

「そうだけど」

何か引つかかっている。焦りにも似たこの感覚は、イルマに考えろと呼びかける。

「移動させるのは絶対にだめだわ」

そのつぶやきに、サミュエルが首を傾げる。

「いやに魔原石にこだわるな。そこから戦争になるのが拙いってわけじゃなく、魔法使いを人為的に作り出すのがいけないという話でもなく、魔原石を移動するのがだめなのか？」

「……うん。そう。それがだめ。なんで、何が」

『ゲナのカルブクよりは少し魔力が安定していないように思えるが』ホレスは確かにそういった。

「カルブク……クリュソプラにサツプーヒ」

「学校にある魔原石か？」

「赤がなんとかブクか、又……ゲナのカルブクは赤、フェンデルワースのは緑で、スペキリにある魔原石は青だわ」

あの、地下の記録の間にあった円。あれは、現存する魔原石を表していたのか。となると、記録の間は四つ目の魔原石を作る儀式のためのもので、さらにそれは完成されていない。あんなにしっかり儀式の形を残しておくはずがないからだ。

「目の儀式……」

「何？」

「だめよ、絶対だめだわ！　兄さん、絶対に止めないと！」

「落ち着けイルマ！」

両頬を手の平で挟まれ、瞳の行き先をしつかりと固定される。自分のものと同じ空色の瞳が、真っ直ぐイルマを射貫く。

「深呼吸だ。そして、　話せ」

サミュエルの魔法　本人命名：恋人たちの沈黙のヴェール

は、確かにすごかった。ホレスが張り巡らしているであろう、いくつもの結界を難なくすり抜け、一番大きな天幕に苦もなく近づけた。普段ならここで、いかにこの結界が女性の寝所へ潜り込むのに役立ったかと話し続けるところだが、今日はそんなわけにはいかない。

「動かないで！」

途中で拾った剣をホレスの首筋へ突きつける。魔法と剣、どちらが早いのか、それは意見が分かれるところなのだが、魔法使いが方程式を解くその瞬間を見逃さなければ勝機はある。

剣も、防御の結界を突き抜けられるよう、魔法がかかっていた。

「せんせい師匠、話を聞いてもらいたいです。でも方程式を解く素振りが見えたら、容赦はしません」

イルマは己の腕と剣の長さを十分に考慮した距離から、ホレスの首筋を狙っていた。腕が疲れたり、ほんの少し前に傾くだけで頸動脈を傷つける。

ホレスを止めるための手段を考えたとき、魔法では到底敵わないと結論が出た。たとえイルマが杖を持っていたとしても、あの方程式を解く早さには追いつけない。それは、彼が努力してきた結果であり、彼が魔法に没頭してきた年月の結果でもあった。また、人数でも圧倒的に不利だ。そうなった場合、取る行動は一つ。頭を押さえる。あくまで一時的に。時間が経てば形勢は逆転するだろう。不意打ちでホレスの注意を引き、話をする機会を得るのが精一杯だっ

た。

第一段階は成功した。

「聞こう」

目で周りの人間たちに合図し、武装を解かせた。

ホツと息をつきそうになり、それを飲み込む。まだだ。気を抜いてはいけない。

「魔原石の移動はやめてください」

「イルマ……」

「いえ、わかっています。師匠せんせいが何を思い、行動に移したか、理解はできなくともわかっているつもりです。それでも、魔原石を動かすのは危険なんです」

ホレスの周りの魔力の動きに細心の注意を払いながら、問題の魔原石へ目をやる。

天幕は、イルマがここまでに使っていたような小さなものでなく、何十人もが生活できそうなほどの大規模なものだ。

その中心に透明な石が地面から顔を出している。

拘束されていたときから強大なプレッシャーを感じていた。学校で触れた魔原石よりもずっと活発で活動的な魔力が詰まっている。

「古王国の人々は、師匠せんせいと同じように魔力を手に入れるために魔原石を作りました。でも、考えてみてください。どうやってこれだけの魔力を集めたか。王都の、魔力の豊富な貴族が何十何百といってもあれ一つに到底足りない。それほどの魔力がどこにあったか」

「魔力を集める方法を知っていたのだから」

イルマの剣などないもののように、平然とホレスは振る舞う。声に怯えの色など微塵も見られない。

「そのような話を聞いたことはありませんか？ 古き歌や、古文書に、魔原石が放つような強力な魔力を溜める魔法を、ウエトウム・テツラ 古王国 の人々が知っていたと」

「秘術中の秘術だったのだろう。今は失われた。それだけのことだ」  
「違います師匠せんせい。彼らは強大な魔力を持つものを知っていたのです」

ホレスの眉がぴくりと動く。平然として見える彼の心に興味が宿った。

「魔原石は、あの力の源は 竜です」

途端に、弾けるように笑う。こちらが切っ先で彼の喉を傷つけないうちを遣わなくてはいけないほど、声を上げて笑う。

「イルマ。竜などというものは、お伽噺の産物だ」

「いいえ、せんせい師匠は貴族ではないから、それも六貴族ではないから知らないだけです」

笑いはぴたりと止み、彼の顔に嫌悪の表情が浮かぶ。貴族はホレスにとつて憎むべき相手でしかないのだろう。イルマも貴族だ。憎むべきウエトウム・テツラ 古王国 の血を濃く引く六貴族だ。それをあらためて思い出したのかもしれない。

彼に触れられた唇を噛む。

「竜の話、私は兄から聞きました。兄は母から。お話として受け継がれています。でも、そういえば父は知らなかった。学校の友人も、せんせい師匠も、方程式の研究をしていて文献や歌、古くからの言い伝えに詳しいアーヴィンでさえ知らなかった」

彼の名を呼んだとき、胸がずきりと痛んだ。その苦しさを吐息の中に紛れ込ませる。ここに来る前、心の中で遙か地中の彼へ言葉を投げかけた。見ていてくれと。

「それは、魔原石から魔力を取り出し力を手に入れた、ウエトウム・テツラ 古王国 の人々の所行を隠すため」

周囲の男たちはオキデス帝国特有の肌も髪や瞳の色も濃い色をした者が多かった。だが、中にはレグヌス王国の魔法使いもいる。杖を持って、イルマの話に眉をひそめている。

「それでも、絶対に忘れないように六貴族にだけは伝わっているんです。だって、ウエトウム・テツラ 古王国 が滅びたのは、その魔原石を作る目の儀式のせいだったんですから」

「目の儀式？」

「はい。地下の遺跡に記録の間がありました」

イルマの推測がかなり混じっているが、それをあたかも事実のように話す。たまにはこんなはったりも必要だ。

「目の儀式は、竜を捕らえ、我々が力の目と呼ぶ魔力の詰まった目を魔原石に変える儀式です。ウエトウム・テツラ 古王国 ではそこから魔力を取り出し、魔力のない人々に移し替えていたんです。ですが、最後に失敗しました。何が原因かはわからないけれど、記録の間は未完で、その魔原石も他の三つの魔原石のように完全な姿にはなっていないません」

ここで後ろを振り返る。剣がぶれないように、だが脅威が薄れないように気をつけながら男たちを見る。天幕の中には三十人ほどがいた。

「魔法学校があんな風に小高い場所にあるのはなぜだと思う？」

フエンデルワースはどちらかと言えばなだらかな土地だ。そこに突然丘があり、その上に魔法学校が建てられていた。魔原石はその地下深くにある。入学の儀を執り行うとき、初めて丸く掘られた学校の地下へ降りて行くのだ。あれは竜を封じている。

「魔原石の、竜の目を移動しようとその周りを掘り起こすことにしたのよね？ でも、地面があまりに固くてそれが叶わなかった。おかしいと思わない？ ここは砂地。沙漠よ。こんな表面が固いなんて。でもね、それは仕方ないの。掘削の道具がぶつかったのは竜の鱗。竜の表皮は硬く、どんな鋭利な剣でも貫けないと言われている」

ざわりと彼らの間に動揺が広がった。  
うち捨てられた、先の曲がった工具。彼らもまたおかしいと感じていたのだろう。

「<sup>せんせい</sup>師匠。ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 がこんなに魔力のない土地になつていったのも、この竜がまだ生きているからだと言えませんか？ どちらかと言えば魔原石のある土地は魔力に溢れている。それなのにここは、草木も育たぬ不毛の土地」

長い間国が研究し続け、そして原因がわからなかった仕組み。砂嵐を越えてようやくたどり着いた魔原石。

「竜は生きています。下手に刺激して目を覚ましたら、これだけ広範囲の魔力を吸い取ってきたんです。力は十分回復している。捕らえられていた怒りに、レグヌスどころか陸続きのオキデス帝国だつてどうなるかわからない。だって、竜は力の目を手に入れる代わりに、理性の両目を手放した、魔力の塊、感情の塊のようなものなんですから」

重い沈黙が降りる。

ここで作業していた者たちにも思い当たることがあるのか、不安そうにちらちらとお互いを見やる。

「師匠！」

イルマの呼びかけにホレスはふっと口元を緩めた。

その瞬間、また地面が揺れる。

とつさにバランスを取るが、剣がホレスの首を傷つけないように必要以上の距離を取った。

彼はそれを見逃さない。

右手を伸ばしイルマの手首をひねる。そのまま杖を器用に脇へ挟むと、もう一方の手で喉を掴み、地面に押し付けられた。そのまま馬乗りになり体の自由を奪われる。剣を持つ手が地面に叩きつけられ、その容赦ない痛みに柄を放してしまう。

「ぐうっ」

衝撃と、己の失敗にうめき声が漏れた。

「サミュエル出て来い！ 近くにいるのはわかっている。私は魔力に敏感だぞ。お前が方程式を解き私を攻撃するのが早いか、それともお前の愛しい妹の首がへし折れるのが早いか。試してみるか？」  
本当にすぐ側で空気が揺れる。

周囲に動揺が走り、苦渋の表情でサミュエルが立っていた。

「素直ないい子だ。その結界は本当に素晴らしいな。後で方程式を調べてみよう。……杖もなしでと思ったが、そうか、お前は家宝を魔具にしたのか」

「諸事情により」

「ふうん……杖の補佐なしであれだけ上手く魔法を使い、またそれを周りに悟らせなかつたとは。私はお前を侮っていたようだ」

ホレスは慎重に杖を握り直し、立ち上がる。サミュエルの側の男が指輪を奪おうとするが、ホレスがそれ止め、落ちていた剣を捨てた。

隙を見て身を起こそうとするイルマの胸を、足で踏み阻む。

「本当に惜しい男だ。ぜひ一緒に連れて行きたいと思うが、その眼では無理だな。第一お前は貴族だ。しかも六貴族インプロブ家の次期当主。私の考えなど一生わからぬだろう」

そういつて剣を構えた。

男たちが無理矢理サミュエルを跪かせる。兄の顔が、仰向けに倒れたままのイルマのすぐ近くにある。

「手に入らないのならお前は危険だ。さよなら、サミュエル・インプロブ」

「兄さん!!」

イルマの絶叫とホレスの怒号が同時に起こった。

剣を振り上げた格好のまま、ホレスは魔原石の方へ吹き飛ばされる。

胸の上の重圧が突然消えて、激しく咳き込んだ。

「なに……」

「魔法を使いたくないのは、人を傷つける魔法があるから。……でも、魔法を使わないで大切な人が死ぬのをこれ以上は見たくない」肘を突いて、体を起こしかけたまま呆然とそこに立つ人を見る。

「アーヴィン？」

「だから大丈夫だって言ったろ？ 一見わからない抜け道がそこかしこにあったんだから。僕は暗闇でも移動できる」

飄々とした笑顔で笑う彼に、イルマは泣きたいのか一緒に笑ったのかわからなくて、ひどく間抜けな表情をさらす。

「貴様はっ!」

怒りに顔を赤くしたホレスが起き上がり、彼の周りに魔力が集ま



つていく。

「僕はイルマを、ついでにサミュエル先輩を回収しに来ただけですよ。あなたたちの相手はそれだ」

真つ直ぐと杖を向けた先、ホレスのさらにその後ろ。

透明な魔原石。だがそれが見あたらない。

地面が揺れる。

そして、再び魔原石が現れる。

「う、うあああああ！」

一瞬消えた魔原石。それは瞼が下ろされた、竜の目だった。

「自分たちのしたことです。後始末はよろしく」

アーヴィンが準備していたのだらう、二人を連れてその場から消える。かなり高度な転移の方程式だ。それをこともなげに操る。

一人が恐怖におののいた叫びを上げると、次々に伝染した。彼らの声が響き渡る頃には、三人の姿は天幕から消え失せていた。

そして、大地が動き出す。

## 第七章 目の儀式 1

「アーヴィン、アーヴィン！」

涙で濡れた頬を、彼の外套へ押し付けようにして腕を背へ回す。

「記録の間周辺の造りは、昔から結構複雑なんだよ。だいたい、上へ出られる算段がなかったら、悠長に調べ物なんてしてないし」

「だって、だって……」

「わかったから。ほら、泣き止んで。……サミュエル先輩の目が痛いから」

窮地を助けてもらった命の恩人に向けるには、少し剣呑過ぎる熱いまなざしを、アーヴィンは浴び続けていた。

「お前の本音が見え隠れする台詞のせいだ。まあ、無事でよかった」

三人はさつきまでの場所からかなり離れた位置にいた。あの大きな天幕が、手の平と同じくらいになっている。

古びた煉瓦の壁の陰からアーヴィンが杖を持って来た。イルマとサミュエルのものだ。

「先輩には必要ないかも知れませんが」

「うるさい。父さんにはねないためには面倒だが常に持っていないといけないんだよ」

「どこか歪んでるなっと思ってたんですけど、そのせいだったんですね」

「見てわかるやつなんてそうそういないからな。お前くらいだ。…

…黙っとけよ」

いとおしそうに自分の指にはまった石を撫でた。

「そりゃもう。サミュエル先輩の弱みなんてそうそうないですしね」  
サミュエルが短く舌打ちをした。

イルマも何時間ぶりに自分の杖を握る。手の平に吸い付くような感覚に、心が静まった。

だがそこへ、今まで聞いたこともない咆吼が響く。馬の嘶きや野

生動物の警戒音とはまるで違った、その声にすら魔力が含まれている、怒りの雄叫び。

とっさに防御の結界を張る。アーヴィンも、サミュエルも、同じように魔法を振るう。

そのおかげで音の後に来る突風は、なんとかしのぐことができた。砂が舞い、壁が音を立てて崩れた。

「竜だ……」

サミュエルがその音源に目をやり呆然とつぶやく。

今や天幕は跡形もなく吹き飛び、お伽噺と信じられてきた、お話の中にしか登場しなかった竜が、その一つ目に怒りをたぎらせ宙に浮いていた。

砂色の肌は、緻密に組み上げられた魔力を纏い、確かにあれでは単なる剣は傷をつけることすらできまい。

「鎮めなきゃ」

もしこのまま竜が街へ向かったら、どれだけの被害が出るかわからない。イルマたちだって自分を守るのに精一杯だ。

「どうやって」

アーヴィンが言う。当然の質問だ。

だが、実はさっきホレスに話をしていた途中で思いついたことがある。

「ねえ、アーヴィンは下の、記録の間の方程式図案見た？ 天井と

床にあったやつ」

「まあだいたい覚えてるよ」

「……すごいわね。ほとんど考え込んで見てなかったでしょう」  
聞いておいてなんだが、彼の返答に驚いた。

「でも、どんな順番で方程式を解いたらあなるかは全然わからない」

うんうん、と彼の答えにイルマは満足そうに頷く。

そしてにこりと笑った。

「ねえ、アーヴィン。もう一度力を貸して。あなたが必要なの」

彼は怪訝な顔をして首を傾げる。

「僕には、あんな魔力に溢れた存在を押さえる方法なんて思いつかない」

「うん。でも、アーヴィンは変数の方程式を使えるでしょう」

「何っ!？」

サミュエルと、アーヴィンが顔色を変えた。

「お前、あれを作ったのか!？」

詰め寄るサミュエルの手を振り払い、身をかわし、平静を装ったアーヴィンが笑う。イルマから見ればそれは苦し紛れの表情としか思えない。そうか、嘘はこうやって見抜くのか。

「何を言い出すんだ。そんなすごいものを発見したら、とっくに

」

「ニクス」

杖を突きつけイルマが宣言する。

「テイルムで拾った白い子猫。」

「宿の中庭で何をしていたか、私が本当に見ていないとも思っただろう? あんなにぐったりしていた子猫が、驚くほど元気で、傷一つなかった。アーヴィンは変数の方程式を使って治癒の魔法を施した。でしょう?」

彼は唇を噛む。

「いくらあなたでも、経験がものをいう治癒の魔法で、あそこまで回復させるのは、普通なら無理だわ。でも、その経験を補う変数の方程式があれば、可能。あのとき今まで見たこともない魔力の形が、あなたの手元に集まっているのを見たの。ねえ、竜を眠らせる手伝いをして」

「……独学で、短縮の方程式も何も作っていないけど、変数の方程式のたいはわかっているつもりだ。けど、それであれを鎮めることができるとは思えない」

空を飛ぶ竜へ杖を突きつけ、珍しく感情のままに話すアーヴィンに、イルマは余裕たっぷり首を揺らす。

「アーヴィンは私の方程式に合わせて、変数の方程式で相手の魔力のブレを相殺してくれればいい。そうすればしっかりと効くだろうから。反対に変数の方程式がなければ、竜の魔力の前にせつかくの方程式が崩れてしまう」

「君はいつたい、何をするつもりなんだ」

イルマはまた、にっこりと笑った。そして歌う。

瞼を閉じて 睡りの泉に身を浸せ

丸い月が 天を回る

無数の月が 世界を回る

天を貫く 四本の柱

円い柱が 空へと伸びる

強い力は 螺旋を描き

後を追うのは 陽昇る軌跡

世界を箱に 閉じ込めて

月の睡りを 誘い出す

二つの渦は 力の道筋

世界を巡る 力は大地へ根を下ろす

瞼を閉じて 睡りの泉に身を浸せ

渦は力を天よりくだす

アーヴィンが再び顔色を変えた。

「小さい頃よく歌ってやった子守歌だな」

「ウェトウム・テツラ 古王国 の末裔は、歌や物語で重要な方程式を伝えてきた。アーヴィンが知らない歌ってというのがおかしいのよ。これもまた、竜の話 みんなが知らなかったように、六貴族に伝わってきた秘密の歌だと考えたの。で、歌の通り方程式を解いていくと、記録の間に合ったような凶案に仕上がると思わない？」

父が、インプロブ家の家紋には竜が隠れていると言った。本人が知ってか知らずかは無事帰って聞いてみないとわからないが、今な

ら確信できる。それは真実だと。この歌は、もしかするとインプロブ家のみに伝わってきたのかもしれない。大昔、インプロブ家はこの目の儀式に携わって来たのではと、天啓のように悟った。家紋に竜を隠し、子守歌に秘術を隠して伝えてきた。

新しい発見に口元をほころばせてイルマが問うと、アーヴィンはもう同意するしかなかった。

「アーヴィン、お願い。手伝って。あなたの力が必要なのよ」

今まで、すべてを自分でやって、そうしてやっと認められると頑張り続けて来た。そのイルマが助けを求めて手を伸ばしている。

サミュエルも、そんな二人を見つめたまま黙っている。彼にも何か思うところがあったのだろう。

アーヴィンは諦めのため息をついて、彼女の手を取る。

「君はいつも強引だ」

「だって、強引にしないとアーヴィン動かないんだもん！」

三人は空に向かって吠える竜を鎮めるために、再び同じ場所へ移動を始めた。

竜の起こす羽ばたきに、視界を遮られながら、イルマとアーヴィンは魔法を使って前へ進む。サミュエルは少し離れた場所で大がかりな結界を敷き始めていた。儀式の途中、竜がその範囲から飛んで逃げないためにだ。

「アーヴィン、さっき来てくれたときに言ってた、その、大切な人って言うのは」

前に行くイルマの声がしっかりと耳に届く。魔法を使っていた。

この風の中の行軍で、そんな余裕があるのは羨ましい。

だが、彼女の問いかけはこちらを慌てさせる。

思わず口走ってしまった言葉に、今更突っ込まれても困る。

「大切な人って言うのは、その」

彼女から始めたくせに、言葉尻を濁してなかなかその先を告げない。ああ、君のことだよと少し切れ気味に言っただけで気が済むの

か。

「もしかして、ご両親のこと？」

「いまいちなんと口走ったか忘れたが、絶対にそんな方向に考えられないと思うのだが、彼女の鈍さは折り紙付きだ。自分の中でまた変な方向へ理解を深めてしまっているのだろう。」

「イルマは僕の両親のこと、何か聞いているの？」

「うん。あなたが小さな頃に両親を亡くして、それで十三歳よりもずっと早くからフェンデルワースに引き取られることになったって、それだけ」

嘘が入る隙間のない簡潔な内容だ。きっと他にも色々吹き込まれているのだろうが、それは彼女の検閲で削除されているのだろう。「僕の両親はゲナの魔法使いだった。あの日はティルムに用があつて、モンス山脈の裾野を馬車で走っていたんだ。僕は荷台に、父と母は御者席に。九歳のときだ」

すでに当時から開かれた子であったアーヴィンは、現実の世界と魔力の世界を交互に見比べ、その美しさを楽しんでいた。だが、そのとき視界に何かちらついた。

「魔法による攻撃だ。当時からオキデスに協力する魔法使いがいたそう。そして、オキデスの命により、さらなる魔法使いを手に入れようと狩る。そんなやつらに僕らの馬車は狙われた」

運がよいのか悪いのか。

二人とも対抗するが馬車が溪谷へ落ちてしまった。

もし、捕らえられていれば、アーヴィンは間違いなく両親を動かすための人質として辛い人生が待っていただろう。

馬車は深い谷底に叩きつけられ、両親は打ち所が悪く亡くなった。

「人はね、死ぬとあつという間に内の魔力を世界へ放出するんだ。それが、とてもきれいで、怖い。魔法は確かに役に立つし、よいことも多いだろうけど、同時に人を傷つける。僕はあんな光景二度と見たくなかった。だから、開かれた子だし、身よりもなくてフェンデルワースで暮らすことになったけど、最低限の義務を果たすだけ

で、それ以上魔法を使わないと決めた」

「……私のせいで約束を破ることになったのね」

ずっと前を向いていたイルマが、後ろを振り返る。眉が下がってとても悲しそうな顔をしていた。

「知ってる？ 約束は破るためにあるんだって」

「守るためじゃなくて？」

「昔君の兄さんが言ってたよ」

「もーっ！ あんな人の言うことなんて聞きちゃだめよ！」

「でも、頑なにそうやって魔法を使うことを否定し続けて、それで、誰かが死ぬのはやっぱり嫌だ」

「大切な人が死ぬのは嫌？」

やっぱりわかって聞いている。

だからそれには答えなかった。

彼女はふふんと笑ってまた前を向く。一人満足そうな顔が憎たらしい。

何か言い返してやろうと口を開いたところに、イルマの鋭い制止の声が響いた。

「竜が……」

宙で身もだえしている。サミュエルの結界に阻まれ、思うように移動ができないことに苛立っているようにも見えた。竜がぶつかるたびに、結界がその整列を崩す。すかさず補強の方程式が解かれてはいるが、かなりの重労働だ。そう長くは保つまい。

「始めよう」

「ええ！」

イルマの斜め後ろに控えて、まず二人を包む結界の方程式を解き始める。

「僕が他はすべて引き受けるから、君は眠りの方程式に集中しろ」

「ありがとう」

地下から戻ったあとのイルマは、なんだか少し雰囲気が変わった。前は、方程式を考えるのは得意じゃないとアーヴィンに言うとき



でさえ、どこかそんな自分に苛立っている様子が見え隠れしていた。だが今はそれが無い。

何があったのか、確かめてみたい気もしたが、今は先にやるべきことがある。

魔法を使わないと決めはしたが、方程式は、魔力の世界はとても魅力的だった。整然と並んだ、隙のない形。あまりにも美しく、その美しい形を作ることに没頭した。

魔力の世界に魅せられた。

結局それは、方程式の強化につながり、魔法の強さとなった。

魔法を使いたくない、人を傷つけるものを生み出したくない。皮肉な結果に悩んだこともある。だが、開かれた子の運命ウイテ・リーベとそんな言葉で片付けたくはないが、しかしやはり、そうとしか言いようがなかった。

変数の方程式に関わろうと思ったわけではない。初めは偶然の産物だ。

生物の魔力には、固有の波がある。一年ほど前、フェンデルワース魔法研究所に入ったばかりの頃、共同スペースで眠る先輩の姿があった。そのいびきがうるさい。気になって手元の仕事に集中できずに、魔力の世界を視ていると、彼のいびきと、魔力の増減が同じような幅で動いているのが見て取れた。常人にはわからない。アーヴィンだからこそその微妙な変化を見て取ることができたのだ。

つまり、音。音は、波だ。その波を打ち消すことができれば、いびきは消える。

試しに簡単な方程式でまったく逆の波を起こし、彼にぶつけてみた。すると、ぴたりといびきが止まった、だが、すぐに再開する。波がずれた。

生体であるから、どうしても波は不規則だ。それに対応するような方程式も持ち出さないといけない。なんとかして止めてやるうと試行錯誤しているうちに気付いた。

それが変数の方程式の始まりだと。

それ以来、仕事の合間にアーヴィンは変数の方程式について色々な文献を調べ、試してみた。

難しい問題は楽しい。それに集中している間は他の余計なことを考えなくて済む。そうやって完成したものを、先日初めてニクスに使った。動物実験は、やはり後ろめたさがあつて今までできなかった。だが、あのときは、小さな子猫から流れ出る魔力に恐怖を覚えた。目の前で、命の炎が消えて行く。それならばと、変数の方程式を使い、そして、治癒の魔法を使った。結果は、その後イルマと遊ぶニクスを見ればわかる。

だがそれを、世間に発表する気はなかった。変数の方程式は治癒にだけ使えるわけではない。人の魔力を打ち消すのだ。放たれた魔法同士ではなく、相手から、一時的に魔力を奪ってしまうことになる。それは、魔法が効きやすくなるということだ。間違いなく、アーヴィンが望まない方向へ利用されて行くだろう。

本当はこの場から逃げ出すべきなのかもしれない。竜が怒るのは当然だ。何百年も倒れたまま、魔力の回復をじっと待っているしかなかった。そんな目に遭わせた人間へ、報復に出るのは至極真つ当なことに思えた。たとえ、すでにそのころの人間は死に絶えていると言っても、彼らにわかるはずがない。ただ怒りを発散したい。それを、邪魔する方が悪い。

そんなことを考えながらも、方程式を解いていく。イルマの周りにも濃密な魔力が漂っていた。あの発想は本当に素晴らしい。昔から、着眼点というか、着目点というか、他とは違う斬新なアイデアに何度も舌を巻いた。

これが成功すれば、間違いなく世間に変数の方程式が流れてしまう。

だが、と自分の中の別の誰かが言う。

どうせいつかは誰かが見つける。作り上げられないことではないと、知っている。遅かれ早かれ世間へ流布するものなのだ。

サミュエルと別れる直前、耳元で囁かれた。

「イルマが助けを求めた。それがどういふことか、わかるな？」  
言われるまでもない。

そんな風に念を押されるほどに、自分は迷いを見せていたのだろう。それがまた、腹立たしい。

「アーヴィン、いい？」

「……ああ。行くよ」

二人とも、方程式を解き終わった、後は、発動の呪文を唱えるだけだ。

彼女の真つ青な瞳とぶつかる。歌で解く順番がわかっているとは言え、その大小の加減は地下にあった図面を頼るしかない。少し狂えばすぐに修正を入れる。その作業が複雑で難解だ。肩で息する彼女を安心させるように、笑った。

逃げ出すわけがない。

サミュエルに言われるまでもない。

アーヴィンが、イルマの頼みを断ることなどありえないのだ。

彼女が信じているから。それを裏切る気なんて、ない。過去も、

そしてこれからも。

「解！」  
ファイニス

声が、重なる。

目の前の大きな魔力の塊に放たれた二つの方程式が、真つ直ぐ宙を駆け抜ける。

そのときだ。

イルマの体が、横へ飛んだ。

## 第七章 目の儀式2

アーヴィンの強固な防御の魔法に阻まれて、イルマの体に致命的なダメージはなかった。だが、途切れた集中力は、発動後の修正を続行不可能にさせる。

なにより、体が動かない。

「アー、ヴィン」

「黙って！」

彼の周りに魔力が集まり、それがイルマへ流れ込む。

「なに、が？」

「ホレスだ」

生きていたのか。

最初に思ったのはそれだ。

「痛みは？ 息はできる？」

「うん。すごい、楽になった。本当に、変数の方程式ってすごいよね」

「僕が、すごいんだ」

見上げる顔が怒っている。

痛みに怯えながら、ゆっくりと体を起こす。彼が肩を貸してくれたので、素直に体重を預けて立ち上がった。

防御の魔法のおかげだろう。衝撃に一瞬からだが麻痺しただけで、頭も打っていないしおかしいところはなかった。

イルマの様子を見て手を放すと、彼は落ちた杖を拾って渡してくれる。

二人は無言でホレスを見た。彼もまた方程式を解いたところだ。

竜は、イルマとアーヴィンの魔法で地に落ちている。第三の目だけを開いてその大きな体を横たえていた。テルティウム・オクルス

そして、その力の目から螺旋のように魔力が空へ登っている。イルマの作った半球状の結界にそれがどんどん吸い取られていく。

ちょうど中央に、力が濃密に渦まく場所があった。ホレスはその真下にいる。

杖を頭上に掲げた。杖の先が紫色に輝く。

そして、雷のようにホレスの上に降り注いだ。

「師匠せんせい!!!」

イルマが走り出すと、アーヴィンも後を追った。最後の一步を踏み出そうとしたところを、強く腕を引かれる。

なぜ、と振り返る。

だが、アーヴィンの険しい表情に口をつぐんでホレスを見た。

魔力を一身に受けた彼は、大地に伏していたが、ゆっくりと立ち上がった。

二人の姿をみとめると、口の端をつり上げて笑う。

「見る！ 魔力だ。力だ。力を手に入れた！」

両手を広げ、二人へ全身に巡る竜の力を見せつけるように体を開く。

「これほどの魔力を見たことがあるか？ ないだろう？ 王都の、六貴族であっても、これほど力に溢れた人間はいない！」

だが、賞賛のまなざしがあつて然るべき二人の瞳に、その色が見あたらないとホレスは不快感をあらわに眉をひそめる。

「どうした？ 素晴らしいと素直に共感すればよいものを」

イルマは、恐ろしさに身を震わす。アーヴィンが彼女の肩を後ろから抱く。

その仕草に、ホレスは今度は顔をしかめた。端正な、美しい顔が醜悪な色に染まる。

「どうした、お前の自慢の師匠せんせいが、これだけの力を手に入れたんだ。なぜそんな顔をする」

アーヴィンでなくともわかるその変化に、なぜホレスは気付かないのかと戦慄を覚えた。泣きそうになるのを堪えていると、アーヴィンが彼女を後ろへやり、ホレスとの間に立ち塞がった。

「本当に、魔力を己のものにしたとお思いですか？」

静かな彼の言葉に、ホレスは不審そうな表情で目の前へ右腕を伸ばす。杖の魔石が光っている。

「そうだ。もう、魔力の消費に気持ちを傾けずとも、どれだけ大量の魔力を使う方程式であろうとも、好きなだけ、そしてより強力に振るうことができる！ こうやってなっ！」

魔力が濃密な塊となって宙に集まる。

「自分をよく見てみることです。今二つの魔力が体の中でせめぎ合っています。本来の魔力と、竜の魔力。人が、あの竜に勝てるはずがない」

「ふん。何を……解！」  
フイニス

ホレスの叫びのような解放の言葉と、彼の体に劇的な変化が起るのがほぼ同時だった。

突然胸を押さえて苦しみ出す。四肢を折り、地面に這いつくばる。

「師匠！」  
せんせい

駆け寄ろうとするイルマ。

だが、伸ばされた彼の手の甲に、あの竜と同じ鱗と、長く伸びた爪が見えて恐怖に後ずさる。

「さきほどイルマが講釈してくれたでしょう？ ウェトウム・テツラ 古王国 の人々は、一度無くした魔力を手に入れようと目の儀式をした。つまり、受け入れる側にもともと魔力はなかった。人体に自然と宿る、形を作る上での魔力以外はね。だからこそ、上手く行っていた。イルマが連れ去られたあと、遺跡をもう一度よく見ました。ウェトウム・テツラ 古王国 最後の王は、あなたと同じように魔力に取り憑かれていた。先の王よりも、魔力がかなり少なかった彼は、さらに魔力を手に入れようとあの儀式を行ったのです。そして、あなたと同じように、失敗した」

記録の間が完成されていなかったため、後半は推測に過ぎない。だが、目の前のホレスを見ればそれが正しいと確信できる。

「魔力が少ないとはいえ、あなたよりは遙かに多かったですでしょう。直系なわけですから。反発も強かった。竜の力に対抗できてしまえ

るほど。だが、勝つことはできない。そして、ウエットウム・テツラ古王国 は滅び、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 ができた。儀式は完了せず、竜は力を取り戻すための眠りについた」

淡々と語るアーヴィンの言葉を、ホレスはどこまで聞いていただろうか。体が見るみるうちに鱗に覆われていく。すでに喉はびつしりと砂色をした固い表皮に覆われていた。

「師匠が……」

「もう一度、さっきの方程式を」

「えっ!？」

「彼から竜の魔力を取り出すんだ」

確かに、それはできると思う。

「でも、取り出した魔力はどうするの？ 竜に返すわけにはいかないでしょ？」

イルマの指摘に彼もそうだと顔を歪めた。

アーヴィンの話で、あの壁画にあった竜の側に立つ人の意味もわかった気がする。彼らは目の儀式で竜を眠らせ、テルティウム・オクルス 第三の目からある

一定量の魔力を取り出す。そうすると、竜は安定し、目は魔原石となるわけだ。そして取り出された魔力を人が受ける。だがそれは、あくまで魔力をまつたく持つていない人間でなくてはならない。そうでなくては、反発が生まれて儀式が終わらない。

滅びがやってくる。

「そうよ、人じゃなくてもいいはずだわ。ほら、透明の石は魔石になる」

「それだ! ……けど、透明の石なんて、あ、サミュエル先輩の杖の石、先にあるのは、偽物だから使えるかもしれない」

「兄さんがいる場所は遠いわ」

ホレスは地面に伏したまま、もうぴくりとも動かない。急がなくてはい。

「そう、これ!」

イルマは首にかかっている紐をたぐり寄せ、胸元から引っ張り出

す。

「あなたがくれた石」

小さくはあるが、確かに透明で、魔力をまったく帯びていない。

「旅人を、私を護る石」

二人は頷くと、再び同じ儀式を始めた。

丸い月が 天を回る

丸い月、それは球。グロブスの方程式を送り出す。

無数の月が 世界を回る

グロブスの方程式を、次々と生み出す。複製の方程式を使い、空が球で覆われて行く。

天を貫く 四本の柱

円い柱が 空へと伸びる。

地下で見た。四隅にあった円柱の図案。円柱はキュリンドロスの方程式。地面から、空へと柱が伸びる。

強い力は螺旋を描き

ホレスから、魔力が立ちのぼる。このときひと工夫して、彼の魔力は残しておき、竜の魔力だけを吸い出すようにした。その判別は簡単だ。竜の魔力は人のそれよりも力強い。

螺旋はコクレア。渦まきながら天へ向かう。

後を追うのは 陽昇る軌跡

太陽が移動する軌跡のように、半球の結界を作り出す。

世界を箱に 閉じ込めて

ホレスを、立方体のクブスの方程式で覆う。もうほとんど、彼の魔力を感じられない。竜にあらがうために、残っていた魔力すべてを注ぎ込んでいる。

月の睡りを 誘い出す

二つの渦は 力の道筋

世界を巡る 力は大地へ根を下ろす

瞼を閉じて 睡りの泉に身を浸せ

渦は力を天よりくだす



ここからは一気に進む。魔力の渦が空に満ち、溜まりに溜まったそれが、一気に降りてくる。イルマが杖を投げ出し、天に向かって石を掲げた。透明のそれが、太陽の光を受けて輝く。力が、天からくだされる。

あの雷のような力。自分の腕が焼かれるほどの衝撃を覚悟していた。駆け寄ろうとするアーヴィンを退け、一人で石をしつかりと持つ。

だが、思ったような事態にはならなかった。

魔力が、光を伴って透明の石に注ぎ込まれる。額の目でそれを感じた。それでなくてもよく見えるアーヴィンにはどのように視えているのだろうと、そんなことを考える余裕すらあった。

空に渦まいていた魔力の最後の一欠片が、イルマの手の中に収まったとき、竜が鳴いた。そして、閉じかけていた力の目がゆっくりと開く。透明だったそれが、今は黄色に輝いていた。イルマの石も、同じ色に染まっている。

安定した大きな力。

手の平に収まるほど小さな石の中に、自分の魔力よりもさらに強大な力を感じる。

石に魅せられていると、彼女の肩をアーヴィンが掴んだ。

「おめでとう」

何百年も前に失敗した儀式を、今ようやく終わらせた。

笑う彼の瞳を見ているうちに、我慢できず飛びつくように抱きついた。アーヴィンもイルマを優しく両手で包み込む。

「あなたのおかげだわ」

「そうだね」

「……そこは、そんなことない、君の努力の賜だ！ とか言うところじゃないの？」

「君相手に謙遜しても意味はないって、学んだから」  
体を離して彼の瞳をのぞき込む。

それはどんな意味かと尋ねようとして、後ろであがったうめき声

に弾かれる。

「師匠！」

仰向けに倒れている彼に駆け寄る。体の変化は見られなかったが、体中を竜の魔力が駆け巡り、深刻な影響が出ていた。

同じようにホレスの横へ膝をついたアーヴィンが、すぐさま治療の方程式を解き始めた。だが、その腕をホレスの手が掴む。

「やめなさい。無駄です」

いいながら、咳き込み、胸を血で濡らす。

「師匠！」

声が震える。

「私は、欲張り過ぎた」

さっきまで鱗に覆われていた手を、握る。指先は驚くほど冷たかった。頬を撫でられたときの暖かさが失せている。そのまま脈へ指を這わせる。間隔が、とても長い。

「でも、欲しかった。あのあふれ出す魔力に身を浸したときの快感は今でも忘れがたい。自分にならないものを手に入れた瞬間のなんとも言われぬ幸福感……君も全能の者になれたかもしれないのに。何か工夫すれば、その身に力を宿すことも可能だっただろうに。女だ、非力だと蔑まれることもなかった」

こんな状態になっても諦められないほど、ホレスは取り憑かれていたのだ。

その事実にも胸を痛めながら、イルマは首を振った。

「私は女です。その事実は変えられない。腕力だって、どうしても男の人には劣ります」

だがそれは、仕方のないことだ。それがイルマなのだから。否定すれば自分を否定することになる。

そうだ、それをすでにアーヴィンは教えてくれていたのに、イルマは気付いていなかった。あの、学校で泣いている姿を見られた日に、彼ははつきり言っていた。

「問題に直面したとき、どうやって乗り越えるか。そうやって人は

成長して、また、成長すれば新たな方法も見えてくる」

ホレスは、その問題を解決する方法を誤った。

「確かに、成長しましたね」

握っていたホレスの手が、上がる。イルマの頬に添えられる。以前と違って、指先はかさかさとした肌を傷つけた。干からびたそれを、イルマの涙が濡らす。

「教育係失格です。君はもう、私の弟子ではない」

再び強い力で彼の手を握る。

「違います。私は、一生せんせい師匠の弟子です」

涙で世界が歪む。その中で、ホレスは笑った。

「さあ行きなさい。他の都市も何かしら騒ぎになっているでしょう。宮廷魔法使いとして人々を救わねば」

「……え？」

「レケン君が話してくれたでしょう？ ウェトウム・テツラ 古王国 最後の王は、己の身に竜の力を受け、そして暴走しこのニヒ・ラルゲ 荒れた土地 ができた。けれどそれが本当なら、各地に影響が出ているはずですよ。さもなければ、あのウェトウム・テツラ 古王国 がたかがこの一帯を不毛の土地にした程度で滅ぶはずがない。例えば、他の魔原石が共鳴し、魔原石ある都市に重大な被害が出ているとも限らない」

ホレスの話に二人は息を飲んだ。

「今回のことは、そこら辺に転がっているオキデスの人間を一人二人捕まえていけばいい。サミュエルにそこら辺は任せるといいでしょう。彼なら上手く立ち回る。妹の立場を悪くするようなことはない」

「でも、せんせい師匠……」

「私はこのまま砂に埋もれます。今レケン君が治療を施しても、半年保つ自信がない。その間、尋問の責め苦に遭うのは避けたい」

どうしたらいいかわからなくて、彼の手を離せずにいるイルマを、アーヴィンが立たせる。指の間から、ホレスの手が滑り落ちる。

醜悪な、歪んだ顔を見せていたホレスだが、今は以前と同じ穏やかな表情で目を閉じていた。

「イルマ、行こう」

「でも、でも……」

「目を閉じてごらん。力の目で彼を見るんだ」

深い海の色をした瞳が、イルマを促す。

理性の両目を閉じ、眉間の力の目を開く。世界が反転し、暗い中に魔力の光がきらきらと輝いていた。二人の方程式の名残が、空中に漂い、遠くの竜は、目だけが光り輝き他の部分は真っ暗に闇に溶けていた。あれならばもう動き出すことはあるまい。

「ホレスさんが、ほら」

ほとんど魔力が残されていない。人を構成し、形取っているそれが、消えた。

アーヴィンの外套をぎゅっと握ると、イルマの拳に彼が手を重ねる。

「ほら、見ていて。始まるよ」

消えたと思った魔力が、ぽつぽつと全体の輪郭に現れる。花開くように現れた魔力はやがて輝きを増し、彼が横たわっている大地に吸い込まれて行く。光の池ができたように、ホレスの周りを中心に煌めきが広がる。

「人が死ぬと、魔力が大地に還る。それはとても、美しい」

ホレスの命が、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 に染み渡っていく。

「彼は今、世界に還った」

美しくて怖い。アーヴィンの言葉に頷くと、溢れる涙を彼の胸に押し付ける。

そうやって、サミュエルが二人の元にやってくるまで、イルマはずっとアーヴィンの腕に抱かれていた。

## 終章

### 終章

『親愛なるアーヴィンへ。』

もう引越しの準備は終わりましたか？

いつ王都へ来るのでしょうか？ 今から楽しみでなりません。

住む場所は決まっていますよね？ どの辺りになるのかしら。ぜひお手伝いさせてください。日用品から魔法使いとしての道具まで、よい店を知っています。なるべく早めに案内します。隙を見て準備していかないと、仕事が忙しくていつまでたっても引越したときのままになりかねませんからね。

さて、こちらの近況です。

私もだいぶ落ち着いてきました。フェンデルワースへの出張はしばらくなくなりそうです。

あの方の言った通り、他の魔原石が共鳴し、各地がひどい状態になったときは、本当にどうなってしまうだろうと不安に思いました。

けれど、さすがは宮廷魔法使いたちです。日頃の鍛錬の賜でしょうね。どの地域でも、他の魔法使いと比べてめざましい活躍をしたそうです（もちろん、その中に私も入っていますよ？）特にひどかった魔原石を有する都市も、もうすっかり人々の活気が戻ったようです。

でもね、誰よりも活躍したのは、やはりあなたですよ。アーヴィン。

今までのことを考えると、あなたが進んで変数の方程式を使い、人々の治療に加わったと聞いたときは、本当にびっくりしました。でも、同時にとても嬉しかったです。何がと訊かれると困ってしま

うけれど、とにかく嬉しく、そして誇りに思いました。だって、今ではレグヌス国でも一、二を争うほどの有名人であるあなたと、私は旧知の仲なんですよ。

魔法医の長であるフィデス様と一緒に国中を回ってみて、どうでしたか？ だからあれだけ短縮式はこまめに作った方がいいと言っていたのに。

実はこっそりフィデス様とお話する機会があったの。あなたが教えようとした変数の方程式、正直あそこまで複雑だとは思っていなかったんですって。アーヴィンと一緒に行くことを同意してくれてよかった。胸をなで下ろしたとおっしゃっていたわ。あの、白い長いおひげを手でしごきながら、笑ってらしたの。

今まで魔法医はあまり興味なかったけれど（目指すは王属護衛官だからね！）、フィデス様の下で学ぶのならば、悪くないかもとちらりと考えてしまったわ。もちろん、考えただけですけどね。

ああだから。おめでとうと言わせて。本当に、嬉しいわ。

お祝いをしなければなりませんね。

王都へ来る日連絡ください。城門まで迎えに行くから！

それでは、会える日を楽しみにしています。

『

あなたのおき友 イルマ・インプロ

長衣カフタンの裾を茂みに引っかけてしまう。それでもイルマは止まらな

い。

「そんなに急がなくなっちゃって間に合うよ」

兄ののんびりとした声に、眉をつり上げて振り向く。気圧されてサミュエルは足を止めた。

彼の胸元には一位ワイヌスの印があった。見習いの銅に一本の線が記されている。つい先日与えられたものだ。

今回の活躍と、結界に関しての魔法方程式への造詣の深さが認め

られたのだ。一年も結界師の見習いとして働けば、一人前の宫廷魔法使いの印が送られるだろう。

イルマも三本線だったのが二本線の二位ニウオを手に入れていた。見習いの見習いは卒業ということだ。

この半年は目の回る忙しさで、本来なら行われるはずの試験がごとごとく中止となっていた。ようやく最近、位を進めることができたのだ。本当ならすでに一回、半年ごとの一位試験ウイヌスを受けることができたはずだった。しかし、なによりも可哀想なのはイルマの一つ下の魔法使いたちだ。宫廷魔法使いの試験もなくなつて、今は待機の身である。もう少ししたら臨時で試験を行うらしい。今、宫廷魔法使いの見習いに三位トリアはいない。これはイルマたちにとつても死活問題だ。面倒な雑用を押し付ける相手がない。

「私は、わざわざ連絡をちょうだいねつて言ったのよ？ 門番に頼んでおかなかつたら、今でもアーヴィンが来たことを知らずにいたわよ！」

杖を振り回して怒る妹に、兄は確かにと頷き、そして苦笑した。

杖の先にはイルマのオレンジ色の魔石とともに、もう一つ、石がはまっていた。

アーヴィンがくれた旅のお守り、そして、ホレスから取り出した竜の魔力が詰まった石だ。第四の魔原石、トパジウスと同じ黄色の石だった。

目の儀式を終え、王都に帰還したとき、もちろんイルマはこの石を国に差し出した。個人が持つていていい物だとは思えなかつたらだ。

しかし、この魔石から魔力を取り出せる魔法使いが、イルマ以外にはいなかった。

竜の魔力とともに、イルマの魔力も微量ながら石に含まれているからだとみられている。

まさに、儀式を行った者が力を入れたのだ。

「っ！ いた！！」

教育係の塔に向かって足早に進む彼の姿を見つける。藍色の魔原石が彼の歩みに合わせて揺れている。

少し髪を切ったようだ。あれから何度か会っているが、いつも伸びた髪をうっとうしそうにいじっていた。髪を切る暇すらないようだった。

着ている濃紺の長衣も、初めて見るものだ。

王都に来ることになり、長衣を新調するくらいには彼も喜んでい  
るのだと、燃え上がっていた怒りがくすぶるくらいに静まる。

「アーヴィン！」

叫ぶと同時に駆け出す。彼も気付いて足を止めた。

目の端に右手に持っているものをみとめながら、それでも言わずにはいられない。

「来る日は教えてって言ったのに！」

今、イルマは少し怒った風に顔を作っているはずだ。

なのに彼は少しだけ笑った。背が、この間よりも伸びているような気がした。もともと痩せていたが、さらに肉が落ち、顎が尖っている。それだけ激務だったのだろう。背が伸びたと感じたのも、もしかしたらそのせいかもしれない。また差をつけられると思うと、そちらを信じたい。

「私、手紙にきちんと書いたわよね？」

もともとあつた落ち着きに、さらに余裕がプラスされている気がする。

「今読んだところなんだ」

「ええ！？ もう！ 信じられない」

「仕方ないだろう。しばらく研究所に行っていなかったし。所長が届けてくれなかったら、完全に置いてきたよ」

それはイルマが悪いのだろうか。いや、絶対に違う。

「だから！ アーヴィンのおうち教えてっていったのにーっ。今度は絶対教えてもらうんだからね」

「だめだと言っても、押しかけて来るんだろう？」



「ええ。そうよ」

その言葉にアーヴィンの雰囲気<sup>カクタン</sup>が緩む。もしかしたら、緊張していたのかもしれない。彼の長衣<sup>カクタン</sup>に光る銅の印を見つけて目を細めた。今日は晴れがましい門出の日だ。いつまでも怒っていてはこちらが大人げない。軽く咳払いをして我ながら素晴らしいと思う満面の笑みを浮かべる。

「それじゃああらためて。おめでとうアーヴィン。今日から私の後輩ね」

「そうだね」

対する彼はあっさりしたものだ。しかし、その程度でめげているはアーヴィンの相手はできない。

国中を魔法医の長フィデスと回ったアーヴィンは、ようやく身边が落ちていた頃に銅の印を渡された。宮廷魔法使いの見習いの証だ。彼は開かれた子<sup>ウイテ・リーベ</sup>だ。国の意志は絶対で、拒否権など与えられない。それでも、ちよつと嬉しかったと漏らしたアーヴィンに、イルマも喜んだ。そんな風に思うようになった彼の変化に、なんだか胸が熱くなる。

「でも、正直アーヴィンは魔法医になることは決定しているんだから、見習い期間なんていらないわよねえ。フィデス様と一緒に国中を回ったわけでしょ？ 下手な見習いよりよっぽど経験積んでいるのに」

「そうそう特例を出すわけにはいかなかったんじゃないかな」

そういつてアーヴィンがイルマの杖を見る。

彼がくれたイルマの無事を願う石が、まさに彼女を守り、そして力を呼び込んだ。

「せっかくもらったんだし、上手に使わないとね」

分不相応なものだと反対する人間もいたらしい。だがこの大切な時期にこれだけの力を遊ばせておくのも問題だと、王から直々に賜った。

そして、それに見合うだけの働きは十分にしたと思う。普段から

努力することには何の抵抗もない。持てる力を振るい、限界まで働くことに慣れていた。

おかげでこうやって一段落する頃には皆がイルマをわずかでも認めるようになっていた。

「さあ、行きましょう」

アーヴィンを迎える準備がされていることだろう。だがすぐ足を止める。忘れていた。

「お祝いをしないと」

「そんなのいらないよ」

「だめよ！ きつとこの後は、またゆつくり話す暇もないくらいになっちゃいますだろうし」

何かめでたいことがあるたびに、兄はイルマに祝いだとキスをすする。こうやって努力を祝うのだと言った。

アーヴィンには肉親がいないし、一番の友人である自分がその祝いの役を買って出てもよいだろう。

ただ、イルマも学んだ。

まずは許可を取ること。それが大切だ。

「お祝いのキスよ。いいでしょ？」

イルマの言葉に彼の瞳が揺れる。ちらりとイルマの後ろの方を見た。兄はまだ遠くにいてこちらを眺めている。二人の話が終わるまでは来ないつもりなのだろう。

「ねえ、いいでしょう？」

「……いいよ」

やった！ と手を叩く。もしだめだと言われたらどうしようと思っていた。もしかして他に祝ってくれた人がいるのだろうかとか、色々聞きたくなくなってしまう。

「よし、じゃあ行くわよ」

イルマが気合いを入れる姿を見て、彼も苦笑する。

そして、軽く、彼の唇に触れた。

「お祝いよ、アーヴィン」

「いやいやいやいやまでまで!!」

少し離れた場所にいたはずの兄が、二人の間に現れる。

アーヴィンに詰め寄ろうとしたのだろうが、彼は さっきのままの姿勢で動かない。それを見て、こちらへ向き直る。

「お前はっ! いきなりなんてことするんだ!」

「なんてことって……お祝いじゃない! 兄さんよくやってくれるから、アーヴィンには私が……」

「お前に俺がそんなお祝いしたことあるかっ!?!」

最後は声が裏返ってる。

「してくれなきゃない。ほつぺたとかおでことか」

「ほつぺたとかおでことかだろうが!」

サミュエルが何を怒っているか見当がつかない。が、アーヴィンがまったく動かないのでまさかと思う。

「もしかして、嫌だった? だからその、確認取ったんだけど……」

ほら、ニヒ・ラルゲ 荒れた土地 で師匠せんせいが私にお祝いのキスしてくれたけど、でも私にとってはあのときお祝いとかそんな状況じゃなかったし。だから、やっぱりそうゆうのって確かめないといけないんだなって思ったの」

「だーっ! 違うだろう。お前、そんな風に自分で片付けてたのか。畜生っ! あんまりにも忙しくてそこら辺しっかり話し合えてなかったけどさ! って、アーヴィン? 大丈夫か? おい、返事をしろアーヴィン・レケン!」

彼の肩を揺すっていたサミュエルだが、最後は顔を覆って苦悩している。

「ごめんね、アーヴィン。嫌だった?」

彼の目を見て尋ねると、わずかだが首を振る。そして深く息をついた。

「いや、嫌じゃない。うん」

「そう。よかった!」

ほつと肩の緊張が抜ける。

「だけど」

「けど？」

「あまり人のいるところではちょっと」

「おい！」

すかさずサミュエルから突っ込みが入る。立ち直りが早い。

「じゃあ今度は二人のときに」

「イルマ！？」

兄は妹の台詞に血相を変えた。

「だって私、半年後には一位よ。ウーヌス今のせんせい師匠にお墨付きもらっているもの。そうしたら一年経てば王属護衛官。そのときはアーヴィンからお祝いをもらわないと！」

「えっ！？」

二人が仲良く声を揃えた。

ほんのりと頬が染まっているのがわかる。彼らに背を向けて自分に落ち着けと深呼吸を繰り返した。いつまでもこちらが待っていては彼との距離はなかなか縮まらないと、ようやくわかった。幸いサミュエルはイルマの変化に気づいていない。イルマだって、自分の気持ちを知ったのは本当について先日。ホレスが促した成長の一つとも言えよう。

平静を装って振り返ると、彼らに向かってにっこりと微笑み、促す。

「早く行きましょう！ フィデス様がお待ちかねよ」

白い塔の影から覗く太陽が、イルマの杖を照らし出す。

魔石が二個はまった、一つしかない珍しい杖の持ち主は、まさしく地上の太陽だ。

誰よりも輝き、周囲を、世界を照らし出す。

了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5291u/>

---

忘れられた解

2011年9月27日11時40分発行